



PUBLIC (公開)

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム
ドキュメントバージョン: 4.3 Support Package 4 – 2023-12-07

Business Intelligence プラットフォームインストールガイド (UNIX)

目次

1	ドキュメント履歴.....	5
2	概要.....	6
2.1	このドキュメントについて.....	6
2.2	目的.....	6
2.3	制約.....	6
2.4	変数.....	6
2.5	用語.....	7
2.6	その他のドキュメント.....	8
2.7	システム要件.....	9
	Red Hat Linux ベースの OS (Red Hat、Amazon、Oracle Linux) の追加要件.....	10
	Solaris の追加要件.....	12
	SUSE の追加要件.....	13
	DataDirect の追加要件.....	14
	アカウントの権限.....	14
	サーバの場所の選択.....	17
2.8	CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースの準備.....	17
	IBM DB2 の追加要件.....	19
	Sybase ASE の追加要件.....	20
	SQL Anywhere を使用した CMS クラスタリングの追加要件.....	20
	バンドルされた SQL Anywhere ODBC 設定.....	21
2.9	ulimit を無制限に設定.....	21
2.10	SAP サポート.....	22
	SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポート.....	22
	SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のサポート.....	23
	CA Wily Introscope のサポート.....	24
	SAP BW のサポート.....	24
2.11	最終チェックリスト.....	25
3	計画.....	27
3.1	アップグレードのサポート.....	28
3.2	データベースサーバ.....	29
3.3	言語.....	29
4	事前準備.....	31
4.1	システム要件.....	32
	Red Hat Linux ベースの OS (Red Hat、Amazon、Oracle Linux) の追加要件.....	32
	Solaris の追加要件.....	34

	SUSE の追加要件	36
	DataDirect の追加要件	37
	アカウントの権限	37
	サーバの場所の選択	40
4.2	CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースの準備	40
	IBM DB2 の追加要件	41
	Sybase ASE の追加要件	43
	SQL Anywhere を使用した CMS クラスタリングの追加要件	43
	バンドルされた SQL Anywhere ODBC 設定	44
4.3	ulimit を無制限に設定	44
4.4	SAP サポート	44
	SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポート	44
	SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のサポート	46
	CA Wily Introscope のサポート	46
	SAP BW のサポート	47
4.5	最終チェックリスト	47
5	インストール	49
5.1	概要	49
5.2	サーバインストールプログラムをダウンロードする	49
	ONE Installer	50
5.3	ターミナルでスタンドアロンの前提条件チェックを実行する	53
5.4	対話型のインストールを実行する	53
	インストールの種類を選択する	55
	インストール完了時	68
5.5	サイレントインストールを実行する	69
	コマンドラインスイッチパラメータ	69
	インストールオプションのパラメータ	72
5.6	段階的インストールを実行する	82
	UNIX プラットフォームで (コマンドラインから) 新しいインストールのフェーズ別インストール を実行する	82
	UNIX プラットフォームで (コマンドラインから) アップデートインストールのフェーズ別イン ストールを実行する	84
	ユーザインタフェースからアップデートインストールのフェーズ別インストールを実行する	86
6	インストール後の作業	89
6.1	インストールの確認	89
	インストールされているバージョンの確認	89
	ログインのトラブルシューティング	90
	サイレントインストールステータスのリターンコード (Unix)	90
6.2	Adaptive Processing Server の追加登録	91
6.3	Web アプリケーションのデプロイメント	92

6.4	DataDirect DSN 接続の設定	92
	DataDirect 接続に odbc.ini ファイルを設定する	92
6.5	SAP サポート	95
	インストール後のシステムランドスケープディレクトリ (SLD) データサプライヤ (DS) の設定	95
	インストール後に SMD エージェントを設定する	95
	インストール後に CA Wily Introscope エージェントを設定する	95
6.6	サードパーティ ERP の統合	96
	Siebel Enterprise 統合を有効化する	96
	JD Edwards EnterpriseOne 統合を有効化する	97
	Oracle E-Business Suite (EBS) 統合を有効化する	97
6.7	インストール後の診断チェック	98
6.8	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの変更	99
	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを変更する	99
	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを修復する	100
	BI プラットフォームにバンドルされたサードパーティソリューションへのパッチ提供	100
6.9	Administrator アカウントパスワードが失われた場合	101
6.10	fontalias_v2.xml ファイルでのインストール後のフォントの設定	101
6.11	インストールの FIPS の確認	103
6.12	SPL_Warehouse.unx サンプルユニバースの実行	103
	サンプル接続について	104
	サンプルデータセットを開始する	104
6.13	クライアントツールへの変更	105
	サイレント変更	105
	サイレント修復	105
	サイレント削除 (アンインストール)	106
	製品キー名一覧	108

1 ドキュメント履歴

以下の表は、重要なドキュメント変更の概要です。

バージョン	日付	説明
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3 SP2	2021 年 12 月	以下が更新されました。 <ul style="list-style-type: none">fontalias_v2.xml ファイルでのインストール後のフォントの設定 [101 ページ]サイレントインストールステータスのリターンコード (Unix) [90 ページ]
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3 SP1	2020 年 12 月	<ul style="list-style-type: none">Tomcat に対するデフォルトの Xmx (最大ヒープサイズ) 値でシステム要件 [9 ページ] が更新されました。新しい 2 つのトピックが追加されました。<ul style="list-style-type: none">サイレントインストールステータスのリターンコード (Windows)サイレントインストールステータスのリターンコード (Unix) [90 ページ]
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3	2020 年 6 月	無効な情報が削除され、システム要件、コマンドラインスイッチパラメータ、およびサイレントインストールに関する情報が追加されました。

2 概要

このマニュアルでは、BI プラットフォームのインストール手順について説明します。

2.1 このドキュメントについて

以下のマニュアルでは、管理者を対象に BI プラットフォームサーバのインストール、削除、変更についての情報、手順、およびオプションについて説明します。このガイドには次の 2 種類があります。

- *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームインストールガイド (UNIX 版): Unix および Linux オペレーティングシステムを使用している場合に参照します (このドキュメント)。
- *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームインストールガイド (Windows 版): Microsoft Windows オペレーティングシステムを使用している場合に参照します。

2.2 目的

本書は、BI プラットフォームのフルインストールを実行するシステム管理者を対象としています。既存のインストールにマイナーリリース、サポートパッケージ、またはパッチアップデートを適用する方法については、<http://help.sap.com/bobip> にある『アップデートインストールガイド』を参照してください。

2.3 制約

このガイドでは、サポートされているホストオペレーティングシステムのセットアップ方法、データベース、Web アプリケーション、または Web サーバについて説明していません。専用のデータベース、Web アプリケーション、または Web サーバを使用する場合、BI プラットフォームをインストールする前にこれをインストールして機能させておく必要があります。

2.4 変数

以下の変数は、このマニュアル全体を通して使用しています。

変数	説明
<BIP_INSTALL_DIR>	BI プラットフォームのインストールディレクトリ。
<WAS_HOSTNAME>	BI プラットフォーム Web アプリケーションがデプロイされる Web アプリケーションサーバのホスト名または IP。

2.5 用語

BI プラットフォームのドキュメントでは、次の用語が使用されます。

用語	定義
アドオン製品	BI プラットフォームで動作する一方、独自のインストールプログラムがある製品です。
監査データストア (ADS)	監査データを保存するために使用されるデータベースです。
BI プラットフォーム	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの略語です。
バンドルされたデータベース、バンドルされた Web アプリケーションサーバ	BI プラットフォームに同梱されているデータベースまたは Web アプリケーションサーバのことです。
クラスタ (名詞)	1 つの CMS データベースを使用し、同時に動作する 2 つ以上の Central Management Server (CMS) です。
クラスタ化する (動詞)	<p>クラスタを作成することです。</p> <ol style="list-style-type: none"> マシン A に CMS および CMS データベースをインストールします。 マシン B に CMS をインストールします。 マシン B の CMS がマシン A の CMS データベースを使用するように指定します。
クラスタキー	<p>CMS データベースでキーを解読するのに使用されます。</p> <p>CCM を使用してクラスタキーを変更できますが、パスワードのようにキーをリセットすることはできません。暗号化されたコンテンツが含まれており、紛失しないようにすることが重要です。</p>
CMS	Central Management Server の略語です。
CMS データベース	BI プラットフォームに関する情報を保存するために CMS で使用されるデータベースです。

用語	定義
デプロイメント	1つ以上のマシンにおいてインストール、設定、実行されている BI プラットフォームソフトウェアのことです。
インストール	インストールプログラムによって1つのマシン上に作成される BI プラットフォームファイルのインスタンスです。
マシン	BI プラットフォームソフトウェアがインストールされるコンピュータです。
メジャーリリース	ソフトウェアのフルリリースです。
マイナーリリース	ソフトウェアの一部のコンポーネントのリリースです。
ノード	同じマシンで実行され、同じ Server Intelligence Agent (SIA) で管理される BI プラットフォームサーバのグループです。
パッチ	特定のサポートパッケージバージョンの小規模な更新です。
昇格	BI コンテンツを同じメジャーリリース (4.3 から 4.3 など) のデプロイメント間で、プロモーションマネジメントアプリケーションを使用して移行するプロセスです。
サーバ	BI プラットフォームのプロセスの1つです。サーバは、1つ以上のサービスをホストします。
Server Intelligence Agent(SIA)	サーバの停止、起動、起動など、サーバのグループを管理するプロセスです。
サポートパッケージ	マイナーリリースまたはメジャーリリースに対するソフトウェアの更新です。
Web アプリケーションサーバ	動的コンテンツを処理するサーバです。
アップグレード	移行プロセスを完了するために必要な計画、準備、移行、後処理のことです。
ONE Installer	ONE Installer は、サービスパッケージまたはパッチのフレッシュインストール、パッチからパッチへの更新、サービスパッケージからパッチへの更新などの複数の BI インストールシナリオをサポートする単一のインストールパッケージです。


2.6 その他のドキュメント

次の表のドキュメントは、デプロイメントおよびインストールに関するものです。4.3 のドキュメントはすべて、<http://help.sap.com/bobip> からダウンロードできます。

ドキュメントの説明	ドキュメントのタイトル
サポートされているプラットフォーム、データベース、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ、その他のシステムの一覧	製品出荷マトリックス (PAM) 
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームドキュメントの概要	インストールとアップグレードセクションの <i>SAP BusinessObjects Business Intelligence Suite</i> マスタガイド
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの新機能の概要	新機能セクションの新機能ガイド
4.0、4.1、または 4.2 リリース上に 4.3 を直接インストールする手順	インストールとアップグレードセクションのマイナーリリースアップデートガイド
XI 3.1、4.0、4.1、または 4.2 などの以前のメジャーリリースからアップグレードする手順	インストールとアップグレードセクションの <i>Business Intelligence</i> プラットフォームアップグレードガイド
4.3 のデプロイメントにサポートパッケージの更新を適用するインストール手順	インストールとアップグレードセクションのサポートパッケージアップデートガイド
サポートされている Web アプリケーションサーバに BI プラットフォーム Web アプリケーションをデプロイする方法についての詳細情報	インストールとアップグレードセクションの Web アプリケーションデプロイメントガイド (Windows) インストールとアップグレードセクションの Web アプリケーションデプロイメントガイド (Unix)
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームサーバのセットアップとメンテナンスに関する管理マニュアル	管理セクションの <i>SAP BusinessObjects Business Intelligence</i> プラットフォーム管理者ガイド

2.7 システム要件

BI プラットフォームをインストールする場合、以下のガイドラインに従ってください。

- オペレーティングシステムがサポートされていることを確認します。サポートされているのは 64 ビットのオペレーティングシステムのみです。
- オペレーティングシステムのパーティションにデプロイメントをインストールする場合は、デプロイメントおよびオペレーティングシステムの領域が十分にあることを確認してください。一時ファイルと Web アプリケーションに最低 2 GB の領域を確保することをお奨めします。
 - Tomcat のデフォルト Xmx (最大ヒープサイズ) 値が 2 GB から 4 GB に増加しました。この変更は、SAP ノート <https://launchpad.support.sap.com/#/notes/2536659>  に記載されている症状に対応するために導入されています。
- SAP BusinessObjects BI Suite 製品を以前にインストールしたことがある場合、インストールプログラムでは既存のディレクトリが使用されます。

① 注記

完全パス長が 256 文字未満であることを確認します。セットアップがネットワーク場所から実行されている場合は、ドライブをローカルでマップすることをお奨めします。また、インストール先パスは 256 文字未満である必要があります。

サポートされるオペレーティングシステムとハードウェアの要件の詳細一覧については、[製品出荷マトリクス](#)📄で入手可能なサポートされるプラットフォームドキュメントを参照してください。

2.7.1 Red Hat Linux ベースの OS (Red Hat、Amazon、Oracle Linux) の追加要件

必要なライブラリのインストール確認

Red Hat Linux にインストールする前に、必要なすべてのライブラリがインストールされていることを確認する必要があります。ルートアクセスがあることを確認し、*Yum* ソフトウェアインストールツールを使用して、以下のコマンドを実行します。

- `yum install libstdc++.i686`
- `yum install libstdc++.x86_64`
- `yum install glibc.i686`
- `yum install glibc.x86_64`
- `yum install libX11.i686`
- `yum install libX11.x86_64`
- `yum install libXext.i686`
- `yum install libXext.x86_64`
- `yum install expat.i686`
- `yum install expat.x86_64`
- `yum install libgcc.i686`
- `yum install libgcc.x86_64`
- `yum install libXcursor.i686`
- `yum install libXcursor.x86_64`
- `yum install libXrender.i686`
- `yum install libXrender.x86_64`
- `yum install libXfixes.i686`
- `yum install libXfixes.x86_64`
- `yum install libxcb.i686`
- `yum install libxcb.x86_64`
- `yum install libXau.i686`
- `yum install libXau.x86_64`
- `yum install xz-libs.i686`

① 注記

- Red Hat Linux バージョン 7.2 を使用している場合は、yum ツールも使用して以下がインストールされていることを確認してください。

```
yum install glibc.i686
yum install glibc-common.x86_64 // if using Red hat 32 bit machine, use
yum install glibc-common.i686
yum install libstdc++.i686
```

```
yum install libgcc_s.so.1
yum install libstdc++.so.6
yum install libX11.i686
yum install libX11.so.6
yum install libXext-1.3.3-3.el7.i686
yum install libXext-1.3.3-3.el7.x86_64
yum install libXext-devel-1.3.3-3.el7.x86_64
yum install libXext-devel-1.3.3-3.el7.i686
```

- Red Hat Linux バージョン 8 または 9 を使用している場合は、yum ツールを使用して以下がインストールされていることも確認してください。

```
yum install libnsl.i686
yum install libxcrypt-4.1.1-4.el8.i686
yum install libnsl.x86_64
```

- BI 4.2 SP08 パッチ 3 以降では、非推奨パッケージ (例: SUSE の場合は libstdc++33-3.3.3-11.9、Red Hat の場合は compat-libstdc++-33)、および libstdc++.so.5 ファイルの依存関係が削除されます。インストーラは、libstdc++.so.6 およびこのファイルをインストールする新しいパッケージに依存するようになりました。
- 環境変数 \$LD_LIBRARY_PATH に /usr/lib および /usr/lib64 が含まれていることを確認します。そうでない場合は、以下のコマンドを使用します。

```
export LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib:/usr/lib64:$LD_LIBRARY_PATH
```

これらのライブラリがインストールされていない場合、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのインストール中にエラーが発生することがあります。詳細については、以下の SAP Support Knowledge Base の記事で説明しています。以下のナレッジベース記事を <https://support.sap.com/notes> で検索できます。

- [1692724](#)
- [1692679](#)
- [1692695](#)
- [1875824](#)
- [1968075](#)
- [2065789](#)

十分な仮想メモリ割り当ての確認

Red Hat Linux の一部のバージョンには、仮想メモリのデフォルトの割り当て方法が変更される、更新された glibc ライブラリが含まれます。これにより、起動時および使用中に、プロセスによって過剰なサイズの仮想メモリが割り当てられる可能性があります。

BI プラットフォームの Red Hat インストールに変更が必要かどうかを決定するには、SAP サポート技術情報 [1968075](#) を参照してください。

① 注記

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) バージョン 7.2 は、Business Intelligence プラットフォーム 4.2 SP4 以降でサポートされます。

2.7.2 Solaris の追加要件

Solaris 11.3 および 11.4 に必要なパッケージ

BI プラットフォームを Solaris 11.3 および 11.4 にインストールするには、以下の前提条件となるパッケージをインストールする必要があります。

パッケージ	最低バージョン	説明
pkg:/SUNWgzip	1.3.5-0.133	GNU Zip (gzip) 圧縮ユーティリティ
pkg:/SUNWlibC	0.5.11-0.133	Sun Workshop コンパイラバンドル libC
pkg:/SUNWmfrun	0.5.11-0.133	Motif ライブラリ、ヘッダ、xmbind およびバインディング
pkg:/compatibility/ucb	0.5.11-0.175.0.0.0.2.1	ユーザインタフェースとソースビルドの互換性のためのユーティリティ
pkg:/SUNWuiu8	0.5.11-0.133	UTF-8 ロケール用の lconv モジュール
pkg:/SUNWxcu4	0.5.11-0.133	XCU4 仕様との適合性を提供するユーティリティ
pkg:/SUNWxwice	0.5.11-0.133	X Window System Inter-Client Exchange (ICE) プロトコルをサポートするライブラリおよびユーティリティ
pkg:/SUNWzlib	1.2.3-0.133	Zip 圧縮ライブラリ

Solaris 11.2 以前に必要なパッケージ

BI プラットフォームを Solaris 11 にインストールするには、以下の前提条件となるパッケージをインストールする必要があります。

パッケージ	最低バージョン	説明
pkg:/SUNWbash	0.5.11-0.133	GNU Bourne-Again シェル (bash)
pkg:/SUNWgzip	1.3.5-0.133	GNU Zip (gzip) 圧縮ユーティリティ
pkg:/SUNWlibC	0.5.11-0.133	Sun Workshop コンパイラバンドル libC
pkg:/SUNWmfrun	0.5.11-0.133	Motif ライブラリ、ヘッダ、xmbind およびバインディング
pkg:/compatibility/ucb	0.5.11-0.175.0.0.0.2.1	ユーザインタフェースとソースビルドの互換性のためのユーティリティ
pkg:/SUNWuiu8	0.5.11-0.133	UTF-8 ロケール用の lconv モジュール
pkg:/SUNWxcu4	0.5.11-0.133	XCU4 仕様との適合性を提供するユーティリティ
pkg:/SUNWxwice	0.5.11-0.133	X Window System Inter-Client Exchange (ICE) プロトコルをサポートするライブラリおよびユーティリティ
pkg:/SUNWxwplt	0.5.11-0.133	X Window System プラットフォームソフトウェア (サーバ、DPS、拡張、Xlib、必須および共通クライアント)
pkg:/SUNWzlib	1.2.3-0.133	Zip 圧縮ライブラリ

Solaris 11 で必要なスケジューリング制御権限

BI プラットフォームインストールプログラムを実行するユーザアカウントには、`proc_prioctl` スケジューリング制御権限が必要です。これにより、このユーザアカウントで実行されるインストールプロセスによりスレッドの優先順位を変更できます。この権限を許可するには、Solaris 11 マシンに root ユーザとしてログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
usermod -K defaultpriv+=basic,proc_prioctl <userID>
```

ソフトパーティションにインストールできない

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを、ソフトパーティションが設定された Solaris マシンにインストールすることはできません。

2.7.3 SUSE の追加要件

SUSE Linux Enterprise にインストールするには、以下のカーネルパラメータと値を `/etc/sysctl.conf` ファイルで編集または追加します。

```
kernel.sem = 250 32000 32 1024
kernel.msgmni = 1024
kernel.shmmax = 18446744073709551615
```

root ユーザアカウントを使用して、このファイルを編集する必要があります。`/etc/sysctl.conf` ファイルの現在の内容を表示するには、コマンドラインから `sysctl -p` を実行します。使用中のオペレーティングシステムに対する現在の制限の設定を確認するには、コマンドラインから `ipcs -l` を実行します。

SUSE Linux にインストールする前に、必要なすべてのライブラリがインストールされていることを確認する必要があります。

ルートアクセスがあることを確認し、Zypper ソフトウェアインストールツールを使用して、以下のコマンドを実行します。

- `zypper install glibc`
- `zypper install glibc-32bit`
- `zypper install libstdc++6`
- `zypper install libstdc++6-32bit`
- `zypper install liblzma5-32bit` または `32 bit liblzma.so.5` をインストールする任意のパッケージ
- `zypper install libXext6-32bit`
- `zypper install libXau6-32bit`
- `zypper install libxcb1-32bit`
- `zypper install libX11-6-32bit`

① 注記

- SUSE 15 SP03 以上の場合: `install 32 bit libcrypt.so.1`
例: `zypper install libcrypt1-32bit`
- 環境変数 `$LD_LIBRARY_PATH` に `/usr/lib` および `/usr/lib64` が含まれていることを確認します。そうでない場合は、以下のコマンドを使用します。

```
export LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib:/usr/lib64:$LD_LIBRARY_PATH
```

2.7.4 DataDirect の追加要件

DataDirect ODBC データベースドライバを使用するレポートを実行する場合は、`odbc.ini` ファイルを設定する必要があります。[DataDirect DSN 接続の設定 \[92 ページ\]](#)を参照してください。

2.7.5 アカウントの権限

Unix または Linux ホストに BI プラットフォームをインストールするには、ユーザに以下の権限が必要になります。

カテゴリ	必要なアクセス権
オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none">• インストール先ディレクトリでのスクリプトの読み取り、書き込み、および実行権限。• システムインストールの場合、ルートアクセスが必要です (インストールプログラムでは、ホストマシンの起動および停止時にサーバを起動または停止する制御スクリプトが <code>/etc/rc</code> 内に作成されます)。
ネットワーク	<ul style="list-style-type: none">• 適切なポートからデプロイメント内のすべてのマシンへネットワークで接続できること。• 共有ファイルシステムディレクトリへアクセスできること。• 適切なネットワーク認証権限。
データベース	<ul style="list-style-type: none">• SAP BusinessObjects ユーザアカウントでテーブルを作成、編集、および削除する権限。• Central Management Server (CMS) システムデータベースで要求される、SAP BusinessObjects ユーザアカウントでストアドプロシージャを作成する権限

2.7.5.1 追加の UNIX および Linux 要件

TZ 環境変数の設定

インストールを実行する前に、TZ 環境変数を使用し、マシンのタイムゾーンが正しく設定されていることを確認する必要があります。これが設定されていない場合、デフォルトのタイムゾーンおよび夏時間ルールが使用され、それによって予測できない動作が発生する可能性があります。

TZ 変数を設定してから、エクスポートします。

例

```
TZ="PST+8PDT+7,M4.1.0/02:00,M10.5.0/02:00"
export TZ
```

POSIX TZ 変数の形式は以下のとおりです。

STD(+/-)hh:mm:ssDST(+/-)hh:mm:ss,Mm.n.d/hh:mm:ss,Mm.n.d/hh:mm:ss

- STD = 標準時間 (GMT、CET、PST) に従う際のタイムゾーンの名前。odbc.ini ファイルに設定された書き込み権限を確認してください。
- DST = 夏時間 (BST、CEST、PDT) に従う際のタイムゾーンの名前。
(+/-) は + または - を意味します。所在地がグリニッジの西側である場合は + が、所在地がグリニッジの東側である場合は - が付きます (+ はオプションです)。
- hh:mm:ss は、24 時間表示の時間、分、秒です (分と秒はオプションです)。大文字の 'M' は、DST の開始/終了ルールの接頭辞です。
- 'm' は月です (1 月 = 1)。
- 'n' は月の週です (1-5)。
- 'd' は曜日です (日曜日 = 0)。

TZ の POSIX 文字列の例を以下に示します。

ロンドン: "GMT+0BST-1,M3.5.0/01:00,M10.5.0/01:00"

パリ: "CET-1CEST-2,M3.5.0/01:00,M10.5.0/01:00"

ベルリン: "CET-1CEST-2,M3.5.0/2:00,M10.5.0/3:00"

① 注記

オペレーティングシステムレベルのタイムゾーン設定は、SAP サポートの範囲外です。http://www.gnu.org/software/libc/manual/html_node/TZ-Variable.html に GNU POSIX 構文についての優れたレビューがあります。

odbc.ini ファイルに設定された書き込み権限を確認する


インストールプログラムによって、ファイル `<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.ini` に DSN 情報が書き込まれます。ユーザが実行するインストールは、このファイルに対して書き込みアクセスを持っている必要があります。BI プラットフォームマシンにインストールされた SAP HANA クライアントを所有して

いる場合、このファイルに対して、読み取り専用アクセスが設定されている可能性があり、その場合 BI プラットフォームインストールに必要な情報の追加が妨げられます。

ユーザアカウント

ソフトウェアのバックグラウンドプロセスを実行できる、ユーザアカウントおよびグループを作成します。ソフトウェアのインストールと実行にはこのアカウントを使用します。アカウントには root 権限は必要ありません。

ロケール

インストールする前に、サポート対象の UTF-8 ロケールが使用されるようにインストールアカウントの環境を設定し、コンソールソフトウェアが UTF-8 文字セットをサポートしていることを確認します。お使いのオペレーティングシステムで正しいロケールが使用されるようにするには、LC_ALL および LANG 環境変数をログイン環境に適したロケールに設定する必要があります。LC_ALL と LANG に設定するロケールの詳細については、[2052590](#)  を参照してください。

たとえば、以下の bash シェルコマンドは、ロケールをアメリカ英語 UTF-8 に設定します。

```
export LANG=en_US.utf8
export LC_ALL=en_US.utf8
```

→ ヒント

すべての関連ロケール環境変数 (たとえば LC_MONETARY や LC_NUMERIC など) が LC_ALL によって適切に設定されているかどうかを確認するには、「locale」と入力します。

サポートされている UNIX および Linux 環境の詳細な一覧については、製品出荷マトリクス (PAM) を参照してください。

コマンド

インストールプログラムを正常に実行するには、使用しているシステムに、次のユーティリティがシステムにインストールされ、パスに存在する必要があります。

/bin/sh	pwd	read	touch
uname	expr	hostname	sed
awk	chown	grep	tail
tar	id	dirname	gzip
stty	ulimit	which	ping

これらの中の1つがシステムにない場合は、サードパーティベンダ (GNU プロジェクトなど) ではなく、お使いのオペレーティングシステムのベンダ製のバージョンをインストールしてください。

① 注記

GNU バージョンのユーティリティからの出力は、お使いのオペレーティングシステムベンダが提供したバージョンのものとは大きく異なることがあります。インストールプログラムが予想しない形式の出力に遭遇するのを避けるため、インストールユーザアカウントの環境では GNU ユーティリティを使用しないでください。

インストール

新規インストールには、次の 2 つのタイプがあります。

- ユーザインストール
インストールされたソフトウェアは、インストールプログラムの実行に使用されたアカウントが所有します。サーバの起動と停止には、このアカウントを使用する必要があります。ユーザインストールを実行するために root ユーザアカウントにアクセスする必要はありませんが、インストールプログラムが root で実行されていることが検知されると、インストールプログラムは終了します。
- システムインストール
システムインストールは、システムの起動とシャットダウンの実行制御スクリプトを追加した、完全なユーザインストールです。これらのスクリプトによって、オペレーティングシステムの起動またはシャットダウン時に、自動的に SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームサーバ機能が開始および停止されます。実行制御スクリプトをインストールするスクリプトは、ユーザインストールの完了後に root 権限で実行される必要があります。

2.7.6 サーバの場所の選択

分散インストールを計画している場合は、サーバ間の遅延を考慮に入れてください。CMS のパフォーマンスを最適化するために、CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースサーバと同じサブネット上に CMS を設置してください。

CMS はクラスタ化することもでき、クラスタ内の異なるホストシステム上で CMS サーバプロセスを実行できます。CMS クラスタを作成する場合は、CMS システムまたは監査データストアに対し、各コンピュータで同じネットワーク遅延が発生していることを確認してください。

CMS サーバプロセスのクラスタ化の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「Central Management Server のクラスタ化」の節を参照してください。

2.8 CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースの準備

デフォルト以外のデータベースサーバを使用するには、BI プラットフォームをインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- データベース、(お使いのデータベースに該当する場合はテーブルスペースまたはスキーマ)、およびアカウントを作成し、CMS 設定およびシステム情報を格納します。監査情報を保持するには、2 次テーブルスペース

またはスキーマが必要です。データベース、テーブルスペース、およびアカウント情報を記録すると、BI プラットフォームインストールプログラムにより要求された場合に詳細を入力することができます。

⚠ 警告

既存の BI プラットフォーム v3.x または v4.x インストールがある場合、新規データベースを作成し、インストールの完了後に既存のコンテンツを移行する必要があります。

- データベースサーバが UTF-8 などの Unicode 文字エンコードを使用するように設定されていることを確認してください。
- データベースアカウントに、テーブルの作成、変更、削除、およびストアドプロシージャの作成の権限があることを確認してください。
- ネットワーク上でデータベースサーバを使用する場合、BI プラットフォームをインストールする前に適切なデータベースクライアントドライバをインストールし、それが機能していることを確認する必要があります。データベースに必要なドライバを確認するには、データベース管理者に連絡します。

インストール時に、インストールプログラムがデータベースを初期化するための接続および認証情報の入力を求められます。以下の表に、サポートされているデータベースに必要な情報を示します。

データベース	インストールプログラムから要求される情報
MySQL	<ul style="list-style-type: none">• CMS データベース名• サーバのホスト名• ポート番号 (デフォルトは 3306)• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
IBM DB2	<ul style="list-style-type: none">• DB2 エイリアス名• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
Oracle	<ul style="list-style-type: none">• Oracle TNSNAME 接続 ID• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
Sybase ASE	<ul style="list-style-type: none">• サービス名 <div><h4>① 注記</h4><ul style="list-style-type: none">• Sybase Adaptive Server Enterprise (ASE) サービス名は、データベース管理者が <code>sql.ini</code> ファイルおよびインタフェースファイルで設定したホスト名およびポート番号の組み合わせになります。• BI プラットフォームは、指定したユーザのデフォルトデータベースに接続します。デフォルトは、データベース管理者が設定します。</div> <ul style="list-style-type: none">• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)

ODBC を使用する Sybase SQL Anywhere	<ul style="list-style-type: none"> • DSN • アカウントのユーザ名 • アカウントのパスワード • [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
ODBC を使用する SAP HANA データベース	<ul style="list-style-type: none"> • DSN • アカウントのユーザ名 • アカウントのパスワード • [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)

2.8.1 IBM DB2 の追加要件

IBM DB2 には、BI プラットフォームのインストール前に、満たす必要のある要件があります。

- DB2 データベースに次の設定が作成されていることを確認します。

```
Collating Sequence = "Identity"
Codeset = "UTF-8"
Territory = "<XX>"
```

<XX> は、使用している環境に適したコードで置き換えます。詳細については、DB2 のマニュアルを参照してください。DB2 データベースが Collating Sequence = "Identity" に設定されていない場合は、ユーザオブジェクトとユーザグループオブジェクトが CMC で予測通りにソートされない可能性があります。

- BI プラットフォームのインストール前にユーザの一時表スペースを作成します。ユーザの一時表スペースを作成しないと、BI プラットフォームのインストールプログラムは DB2 データベースを設定できません。IBM DB2 のユーザの一時表スペースの詳細については、IBM Technical library の *DB2 Basics: Table spaces and buffer pools* (英語) (<http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/O212wieser/O212wieser.html>) を参照してください。
- IBM DB2 を使用して監査データストアデータベースをホストする場合は、監査表スペースのページサイズが最低でも 8192 (8 KB) に設定してあることを確認します。
- CMS システムデータベースがパーティション化されていないことを確認してください。監査データストアデータベースはパーティション化できます。

さらに、以下のユーザアカウントの要件を検討します。

- DB2 データベースのホストに使用するユーザアカウントの ID が、次の IBM 要件を満たすことを確認します。DB2 をホストする UNIX システムまたは Linux システムの IBM 要件の詳細については、“DB2 ソリューションインフォメーションセンタ” (<http://www.ibm.com/support>) のデータベースの基本セクションの DB2 のユーザとグループ (Linux および UNIX) を参照してください。
 - guests、admins、users、または local を除く一次グループがあること。
 - 英小文字 (a-z)、数字 (0-9)、または下線文字 (_) のみを含むこと。
 - 8 文字を超えないこと。
 - 先頭が IBM、SYS、SQL、または数字ではないこと。
 - DB2 予約語 (USERS、ADMINS、GUESTS、PUBLIC、または LOCAL)、あるいは SQL 予約語ではないこと。

- DB2 インスタンス ID、DAS ID、または fenced ID の root 特権を持ついずれのユーザ ID も使用しないこと。
- アクセント付きの文字を含まないこと。
- 新しいユーザ ID を作成する代わりに既存のユーザ ID を指定する場合は、ユーザ ID について以下の条件を満たすこと。
 - ロックされていない
 - パスワードの有効期限が切れていない
- ユーザの一次グループは次の要件を満たすこと。
 - guests、admins、users、または local のいずれでもないこと。
 - 先頭が sql または ibm でないこと。
 - 先頭が数字でないこと。
 - 英小文字 (a-z)、数字 (0-9) のみを含むこと。

同じマシンに IBM DB2 データベースおよび Central Management Server (CMS) をインストールする場合、

- thread-max 設定およびユーザアカウントの ulimit 設定が十分であることを確認してください。ulimit を無制限に設定することをお勧めします。

2.8.2 Sybase ASE の追加要件

CMS または監査データベースに Sybase ASE を使用する場合は以下のとおりです。

- page size を 8 KB に設定してデータベースを作成します。デフォルトのページサイズは 2 KB です。このサイズは、CMS システムデータベースを効率的に実行するには小さすぎます。ページサイズはデータベースの作成中に設定され、データベースの作成後には変更できません。
- UTF-8 などの Unicode 文字セットを使用します。
- CMS データベースとして SAP Adaptive Server Enterprise v16.0 以降を使用している場合は、インデックス圧縮を無効化する必要があります。

2.8.3 SQL Anywhere を使用した CMS クラスタリングの追加要件

バンドルされている SQL Anywhere データベースサーバを CMS で使用している場合、新しいコンピュータ上の新しいノードを CMS クラスターに追加する前に 2 つの前提条件があります。新しいノードをホストするマシンに対して、以下の作業を行います。

1. SQL Anywhere Database Client をインストールする必要があります。
次の URL から、使用中のオペレーティングシステムに対応する SQL Anywhere 17 クライアントをダウンロードします。<http://scn.sap.com/docs/DOC-35857>
2. プライマリノードの SQL Anywhere CMS データベースに接続する ODBC DSN を作成する必要があります。
プライマリノードで、ODBC システム情報ファイルを開き、DSN の詳細を記述します。たとえば、
<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.ini のようになります。デフォルトでは、DSN は BI4_CMS_DSN<Unix timestamp> です。

次の例を考えてみます。CMS サーバとバンドルされた SQL Anywhere データベースが存在するプライマリノードが1台のマシンにインストールされています。新しいマシンに新しいノードを作成するには、以下を実行します。

1. SQL Anywhere Database Client をインストールします。これにより、SQL Anywhere 17 データベースドライバがインストールされます。
2. SQL Anywhere 17 ドライバを使用して、プライマリノードの SQL Anywhere CMS データベースに接続する ODBC DSN を作成します。たとえば、プライマリノードのホストが 192.0.2.0 で、SQL Anywhere インストールのデフォルトポートと値が次のようであると仮定します。

```
[ODBC Data Sources]
BI4_CMS_DSN_1362069282=SQLAnywhere 16.0
[BI4_CMS_DSN_1362069282]
UID=dba
PWD=mypassword
DatabaseName=BI4_CMS
ServerName=BI4_1362069282
Host=192.0.2.0:2638
Driver=/opt/sqlanywhere16/lib64/libdbodbc16.so
```

3. BI プラットフォームサーバインストールプログラムを実行し、インストールタイプに **[カスタム/拡張]** を選択します。インストール中に次の項目を選択します。
 - **[機能の選択]** ページで、**[Central Management Server]** 機能を選択します。**[Sybase SQL Anywhere データベース]**、**[Subversion]**、および **[WebTier]** 機能の選択を解除します。
 - **[新規または拡張インストールの選択]** ページで、**[既存の SAP BusinessObjects BI プラットフォームデプロイメントを拡張する]** を選択します。
 - **[既存の CMS データベースタイプの選択]** ページで、**[SAP Sybase SQL Anywhere (ODBC 使用)]** を選択します。
 - **[CMS リポジトリデータベースの設定 - SQL Anywhere (ODBC)]** ページで、手順 2 で作成した ODBC DSN を選択し、“dba” アカウントパスワードを入力します。
 - 続行し、新しい CMS サーバノードのインストールを完了します。

2.8.4 バンドルされた SQL Anywhere ODBC 設定

CMS および監査データベースに使用するためにバンドルされた SQL Anywhere をインストールしているとき、インストールプログラムは新しい DSN エントリを探し、既存の ODBC システム情報ファイルに書き込もうとします。既存のファイルが検出または設定されない場合、インストールプログラムによって **<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.ini** に新しい DSN エントリを含むファイルが作成されます。

レポートおよび分析の目的で、新しい ODBC エントリを作成する場合は、これらのエントリを CMS および監査データベースと同じ .ini ファイルに統合します。

2.9 ulimit を無制限に設定

BI プラットフォーム Web アプリケーションを正常に構築してデプロイするには、ホストのオペレーティングシステムまたはユーザのアカウントの ulimit 設定を 無制限に設定する必要があります。

ulimit コマンドを使用して ulimit を設定するか、Linux の場合はシステム構成ファイル /etc/security/limits.conf を変更します。ulimit の詳細については、オペレーティングシステムに含まれているドキュメントを参照してください。

2.10 SAP サポート

2.10.1 SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポート

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) とは、インストール済みの SAP ソフトウェアおよび SAP 以外のソフトウェア (オプション) のリストを維持するディレクトリサービスです。SLD では、情報が次の 2 つのカテゴリに大きく分類されています。

- すでにインストールされているソフトウェア
- 後からインストールされる可能性のあるソフトウェア

SAP システムには、ランドスケープディレクトリを自動更新するデータサプライヤ (DS) コンポーネントが付属しています。SLD に対応している SAP 以外のソフトウェアは、オープン API を介して登録されます。インストール済みのソフトウェアについて収集される情報は次のとおりです。

- バージョン
- ホスト情報
- 接続情報

SLD サポートを使用するために、BI プラットフォームをホストしているシステムに SAP Host Agent がインストールされ機能していることを確認します。SAP Host Agent は、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

2.10.1.1 SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) サポートを有効にする

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) または SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用する計画がある場合は、SAP Host Agent がインストールされ設定されていることを確認してください。次の手順に従って作業をすると、SAP Host Agent がインストールされます。

SAP Host Agent は、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。SAP Host Agent の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence platform* 管理者ガイドの“システムランドスケープでの SAP BusinessObjects Business Intelligence platform の登録”に関する項目を参照してください。

① 注記

SAP GUI または SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) をインストールしている場合は、以下の手順 4 に移ってください。

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポートをインストールするには、root 権限を持つ sapadm ユーザが必要です。

また SAP_LocalAdmin グループも存在し、sapadm ユーザはこのグループのメンバーになっている必要があります。SAPHOSTCONTROL のインストール中に、sapadm のユーザパスワードが必要になります。

1. SAP HOST AGENT は、<Package_Download_Location>/BusinessObjectsServer/Collaterals/Tools/SAP_HOSTAGENT で関連製品にパッケージ化されています。

① 注記

<Package_Download_Location> は、BI インストーラパッケージをダウンロードした場所を示しています。

2. SAP_HOSTAGENT フォルダから管理者権限でコマンドプロンプトを起動します。
3. 次のコマンドを入力して、SAPHOSTCONTROL をインストールします。

```
saphostexec -install
```

4. sldreg ツールを探します。このツールは通常次のフォルダに保存されています。

```
/usr/sap/hostctrl/exe
```

5. 以下のコマンドを使用して、SLD キーを作成します。

```
sldreg -configure connect.key
```

SLD サーバに接続するためのユーザ名、パスワード、ホスト、ポートおよびプロトコルの入力を求められます。

6. 要求される情報を入力します。

sldreg ツールは、SLD サーバに情報をプッシュするために sld-ds で自動的に使用される connect.key ファイルを作成します。

BI プラットフォームのインストールがすでに済んでいる場合は、すべての SIA ノードをセントラル設定マネージャ (CCM) で再起動して SLD に登録します。

2.10.2 SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のサポート

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) は、SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のシステムのパフォーマンスを監視します。SMD が収集した情報を使用して、問題の識別、分析、および解決ができます。収集される情報は次のとおりです。

- パフォーマンスモニタリング
- 設定管理
- ログ管理
- ロードテスト
- アラート
- リソース監視

SMD に統合されているツールは次のとおりです。

- CA Wily Introscope
完全な計測には、SMD と CA Wily Introscope の両方を使用する必要があります。
- SAP LoadRunner by HP

SAP Certified Integration の認定を受けた非 SAP ソフトウェアは、セントラルリポジトリに配置されてから、ユーザの SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) に自動的に転送されます。SAP カスタマは、SAP システム環境において、SAP が認定しているサードパーティ製品統合のバージョンを簡単に特定することができます。このサービスにより、サードパーティ製品のオンラインカタログにないサードパーティ製品についても知ることができます。

SMD を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。SMD エージェントは、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。インストール中に、インストールプログラムから SMD エージェントのホスト名とポート番号の入力を求められます。SMD を使用しない場合、または後でインストールする場合は、SMD を使用しないことを選択できます。SMD エージェントは、後でセントラル管理コンソール (CMC) の [プレースホルダ] 画面で設定できます。詳細については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[95 ページ\]](#) を参照してください。

SMD エージェントの詳細については、[1858920](#) を参照してください。

2.10.3 CA Wily Introscope のサポート

CA Wily Introscope は SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) の一部として含まれています。完全な計測には、SMD と CA Wily Introscope の両方を使用する必要があります。

CA Wily Introscope と SMD を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。SMD エージェントは、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

インストール中に、インストールプログラムから Introscope エージェントのホスト名とポート番号の入力を求められます。Introscope を使用しない場合、または後でインストールする場合は、Introscope を使用しないことを選択できます。Introscope は、後でセントラル管理コンソール (CMC) の [プレースホルダ] 画面で設定できます。詳細については、[インストール後に CA Wily Introscope エージェントを設定する \[95 ページ\]](#) を参照してください。

2.10.4 SAP BW のサポート

BI プラットフォームは SAP BW と統合することができます。SAP BW から最高のパフォーマンスを得るには、次の SAP ノートにある手順に従ってください。

- [1771995](#) - デザイン時における階層レベルの番号が不適切
- [1750788](#) - BICS メタデータサービス拡張
- [1767351](#) - 固定フィルタに特性のメタデータがない
- [1776999](#) - 階層並べ替えが不適切
- [1777544](#) - ノードタイプ属性にメタデータがない
- [1778347](#) - ノードタイプの属性が読み取られない
- [1770434](#) - 複合特性の動的フィルタが正しくない
- [1762156](#) - デザイン時における固定フィルタのノードが正しくない
- [1776688](#) - 読み取られる階層レベルが多すぎる
- [1798297](#) - Samsung クエリに関して見つかった問題の修正
- [1806813](#) - 特性値のテキストが読み取られない

- [1809517](#) - デザイン時サービスによる変数の一覧を取得する際の無効な変数順序の修正
- [1811124](#) - このノートではデザイン時 API によって返されたドリルダウン特性の並べ替えを、ランタイムの並べ替えと一致するように修正
- [1812142](#) - このノートではデザイン時 API によって返された階層の並べ替えを、ランタイムの並べ替えと一致するように修正
- [1817482](#) - このノートではデザイン時 API の機能を追加して、最初に読み込む必要のあるメンバーかどうかを選択します。デフォルトでは、読み込まれない場合に SL のパフォーマンス拡張が提供されます。

2.11 最終チェックリスト

BI プラットフォームをインストールする前に、以下のチェックリストを確認してください。

- インストール先フォルダを決定しましたか。

① 注記

- 出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。
- インストール先フォルダが、インストールプログラムが展開されているのと同じフォルダではないことを確認します (現在の作業ディレクトリからインストールプログラムを実行中に、現在の作業ディレクトリにインストールしないでください)。
- デプロイメントに含まれるすべてのマシン間のネットワーク接続が適切かどうかを確認しましたか。
- 独自のデータベースサーバを使用している場合
 - CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースに対して、データベース、テーブルスペース (必要な場合)、およびアカウントを作成しましたか。
 - BI プラットフォームホストからデータベースにログオンできることを確認しましたか。
 - IBM DB2 または Sybase ASE を使用している場合、そのデータベースが正しい設定で作成されたことを確認しましたか (設定の中には、データベース作成後には変更できないものもあります)。
 - データベースクライアントソフトウェアを正しく設定しましたか。
- 独自の Web アプリケーションサーバを使用している場合
 - 使用する Web アプリケーションサーバを決定しましたか。
 - サーバはすでにインストールおよび設定されていますか。
 - 既存の Web アプリケーションサーバに必要な JDK がインストールされていることを確認しましたか。
- SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用する計画がある場合は、SAP Host Agent のインストールと設定が済んでいることを確認してください。詳細については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) のサポート \[22 ページ\]](#) を参照してください。
- SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用する計画がある場合は、BI プラットフォームの前または後に SMD エージェントをインストールして設定することができます。詳細については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[23 ページ\]](#) を参照してください。

Unix の場合、次回以降にスケジュールされたジョブのタイムスタンプが正しくなるように、TZ 環境変数をすべての BI プラットフォームサーバで設定する必要があります。TZ 環境変数が正しく設定されておらず、タイムゾーンのルールがデフォルトの米国の標準時になっていると、別の場所で問題が発生する場合があります。

DST に関する開始および終了情報を提供するために、TZ 変数を設定する必要があります。

例

TZ 設定は、たとえば TZ='EST-10EDT-11,M10.1.0/02:00:00,M4.1.0/03:00:00' となります。


① 注記

TZ 変数の設定は、POSIX 1003.1 の第 8.1.1 節に従ったものです。書式の詳細については、<http://www.opengroup.org/onlinepubs/007908799/xbd/envvar.html> を参照してください。

3 計画

BI プラットフォームは、Windows、Unix、または Linux プラットフォームにインストールできます。



インストール前:

- BI プラットフォームのインストール先のオペレーティングシステム、アプリケーションサーバ、データベースサーバ、およびその他のコンポーネントがサポートされていることを確認します。SAP BusinessObjects BI 4.3 [製品出荷マトリクス \(PAM\)](#)  を参照してください。
- 組み込まれた Sybase SQL Anywhere データベースサーバを CMS および監査データベースに使用するかを決定します。
BI プラットフォームと一緒に使用するデータベースサーバを準備していない場合は、インストールプログラムでインストールおよび設定することができます。お使いのデータベースサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポートされるデータベースを決定することをお勧めします。

① 注記

インストールプログラムに組み込まれたデフォルトデータベースを使用しない場合は、インストールを開始する前に、使用予定のデータベースを設定しておいてください。データベースには、適切なデータベース権限が設定されたユーザアカウントが必要で、適切なドライバがインストールされ、動作することが確認されている必要があります。インストールプログラムはデータベースに接続し、データベースを初期化します。

インストールプログラムによって、ローカルマシンだけにデータベースがインストールされます。ネットワークを通してインストールすることはできません。

- インストール/更新アクティビティを開始する前に、以下のナレッジベース記事を参照して、ベストプラクティスおよび前提条件を見逃さないようにしてください。
 - KBA [1952120](#) : BI のインストール/更新/パッチ適用時の Windows でのベストプラクティスおよび前提条件
 - KBA [2490588](#) : BI のインストール/更新/パッチ適用時の Linux でのベストプラクティスおよび前提条件
- 組み込まれた Tomcat Web アプリケーションサーバを使用するかを決定します。
BI プラットフォーム Web アプリケーションをホストする Web アプリケーションサーバシステムがない場合、インストールプログラムによってインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適した Web アプリケーションを決定することをお勧めします。その他のサポートされる Web アプリケーションサーバを使用する場合、BI プラットフォームをインストールする前にインストールおよび設定を行い、有効化して、アクセス可能にしておく必要があります。

インストールプログラムによって、ローカルマシンだけに Tomcat がインストールされます。ネットワークを通してインストールすることはできません。

インストール時に、ユーザは SIA またはノード名、クラスタキー、およびクラスタ名に関する詳細を入力する必要があります。SIA/ノード名は識別子にすぎず、DNS 解決可能ホスト名にする必要はありません。クラスタ内で一意にする必要があるため、Node1 や ProdNode1 などにするのが適切です。クラスタ名も、DNS 解決可能にする必要はありません。これは、連携して機能する複数の BOE サーバが含まれる場合がある環境全体を識別するユーザフレンドリな名前です (例: BOEProduction、BOEDev、BOETest)。クラスタ名は、サーバの各クラスタに対して一意である必要があります。これを使用して、ユーザによる環境へのログイン時に、セキュリティおよびシンプルさを改善するため、マシンの実際のホスト名を非表示にすることができます。またこれにより、エンドユーザシステムまたはプロセスを変更することなく、環境でホストを追加および削除す

ことができます。クラスタキーは、マシンを誤ってクラスタリングすることを防ぐために使用される文字列です。これは、サーバによって目に見えないところで交換されるパスワードとみなすことができます。各クラスタで、一意のクラスタキーが必要です。このクラスタキーは一部の暗号化機能にも使用でき、長期的には、必要に応じてユーザに影響を与えることなく変更することができます。

① 注記

BI 4.3 サポートパッケージ1では、BI プラットフォームのコンパイラバージョンがアップグレードされています。BI プラットフォームのアドオン (BI プラットフォーム向け Lumira サーバ、Design Studio BI プラットフォームアドオン、および Analysis for Office BI プラットフォームアドオンなど) は、BI プラットフォームと強固に組み合わされているため、同一のコンパイラバージョンにアップグレードされている必要があります。

プラットフォームのアップグレードを計画する場合に確実なガイドラインを参照するか、または SAP BusinessObjects BI 4.3 をアドオンと共にフレッシュにインストールすることをお奨めします。詳細については、SAP ノート <https://launchpad.support.sap.com/#/notes/2467541> を参照してください

3.1 アップグレードのサポート

アップグレードおよびアップデートの定義

アップデートは、4.x リリースにサポートパッケージまたはパッチを追加することを意味します。アップグレードは、BusinessObject Enterprise XI 3.1 リリースを BI プラットフォーム 4.0、4.1、4.2、または 4.3 リリースに移行することを意味します。

4.X から 4.3 サポートパッケージへの更新

この表を使用して、適切なアップデートガイドを選択します。

① 注記

4.3 サポートパッケージアップデートを、BI プラットフォーム 4.0、4.1、または 4.2 インストールに直接インストールできます。最初に 4.2 アップデートをインストールする必要はありません。

SAP Help Portal の [SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム](#) 製品ページに移動して、詳細を確認することができます。

アップデートのタイプ	例	ガイド
マイナーリリースアップデート	<ul style="list-style-type: none">4.3 を 4.0、4.1、または 4.2 リリースの上にインストール	インストールとアップグレードのマイナーリリースアップデートガイド
サポートパッケージアップデート	4.3 リリースへのパッチ 1 のインストール	インストールとアップグレードのサポートパッケージアップデートガイド

アップデートのタイプ	例	ガイド
4.3 リリースのパッチアップデート	4.3 リリースへのパッチ 1 のインストール	インストールとアップグレードのパッチアップデートガイド

XI 3.1 からのアップグレード

SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.1 またはその他の 3.X リリースを BI プラットフォーム 4.3 SP1 にアップグレードするには、まず BI プラットフォーム 4.3 のフルインストールを実行し、アップグレードマネジメントツールを使用してコンテンツおよび設定を 3.X インストールから移行する必要があります。詳細については、[アップグレードパス](#)を参照してください。


以前にインストールした 3.X バージョンに影響を与えることなく新しいバージョン 4.X をインストールする 3.X/4.X 並列インストールを実行できます。ただし、これは推奨されるインストールシナリオではありません。この場合、一意のディレクトリに対してインストールを実行し、ポート競合が発生しないよう、過去のインストールですでに使用されているポート番号およびディレクトリは選択しないでください。マシンは SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの複数のバージョンをホストできますが、両方同時に実行するとシステムパフォーマンスが低下する場合があります。

3.2 データベースサーバ

BI プラットフォームと一緒に使用するデータベースサーバを準備していない場合は、インストールプログラムでインストールおよび設定することができます。お使いのデータベースサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポートされるデータベースを決定することをお勧めします。

① 注記


データベースクライアントおよびサーバでは、Unicode 文字セットが使用できる必要があります。

サポート対象のデータベースバージョン、改訂レベル、および要件については、[Product Availability Matrix \(PAM\)](#)  を参照してください。

① 注記

CMS データベースはローカルネットワーク上に存在する必要があり、WAN 接続ではアクセスできないようにする必要があります。応答時間は非常に短く、約 10ms か、5ms 以下である必要があります。

3.3 言語

BI プラットフォームのユーザインタフェースは、多くの言語で利用できます。サポートされている言語の完全な一覧については、[製品出荷マトリックス](#)  を参照してください。フルインストールまたは修正インストール時に、

言語パックをインストールして、異なる言語のサポートを追加できます。言語パックのインストールサイズが大きくなる可能性があるため、必要な言語パックのみインストールすることをお勧めします。

UNIX プラットフォームで新しい言語を追加するには、以下の手順に従います。

1. <Install_Dir> に移動します。
2. `modifyOrRemoveProducts.sh` プログラムを実行します。
3. [言語パッケージの選択] から新しい言語を選択し、*Enter* を押します。
4. [変更] を選択し、*Enter* を押します。
5. [言語パッケージの選択] から新しい言語を選択し、*Enter* を押します。
6. 機能を選択し、*Enter* を押します。
7. [拡張インストール] 画面で *Enter* を押します。
8. CMS 管理者パスワードを入力し、*Enter* を押します。
9. インストールを開始するには、*Enter* を押します。
10. インストールを完了するには、[完了] を押します。

新しい言語が追加されています。

4 事前準備

このセクションでは、BI プラットフォームをインストールするための準備について詳細に説明します。

プロセスフロー

1. 十分な利用可能ディスク容量を確保してください。ディスク領域の要件については、[製品出荷マトリクス](#)の付録セクションを参照してください。後でパッチや新しいコンポーネントを使用できるように、オペレーティングシステムおよびソフトウェアの両方で利用できるようにします。
2. インストールメディアを準備するか、「[サーバイnstallプログラムをダウンロードする \[49 ページ\]](#)」に記載されている SAP サービスマーケットプレイスから、最新リリース、およびパッチやサポートパッケージをダウンロードします。
SAP HOSTAGENT: SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用するために必要なソフトウェアパッケージ。[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[22 ページ\]](#)を参照してください。SAP HOSTAGENT は、BusinessObjectsServer/Collaterals/Tools/SAP_HOSTAGENT でパッケージ化されています。
さらに、以下をダウンロードします。
SAPCAR - SAP サービスマーケットプレイスからダウンロードした .SAR 形式のパッケージの圧縮、圧縮解除に使用する圧縮ユーティリティです。
SAPCAR をダウンロードするには、<http://support.sap.com/home.html> > ダウンロード > Support Packages and Patches > Browse our Download Catalog > SAP Technology Components > SAPCAR を参照してください。
3. SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用する計画がある場合、BI プラットフォームをインストールする前に SAP Host Agent がインストールされていることを確認してください。SLD の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“システムランドスケープでの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの登録”に関する項目を参照してください。SAP Host Agent については [SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[22 ページ\]](#)を参照してください。
4. インストールプロセスで設定するオプションの値を決定します。ほとんどの場合、デフォルト値を使用します。高度なインストールでは、インストールプロセスを計画する必要があります。以下の情報の入力を求めるプロンプトが、インストールプログラムから表示されます。
 - 製品キー
 - BI プラットフォームがインストールされるフォルダ
 - タイプ、接続、および認証詳細を含む、Web アプリケーションサーバ構成
 - タイプ、接続、および認証詳細を含む、データベースサーバ構成
 - タイプ、接続、および認証詳細を含む、CMS システムおよび監査データストアの設定情報
 - Central Management Server (CMS) 管理者アカウントパスワードとクラスターキー
 - 受信接続を受け取る CMS ポート番号
 - Server Intelligence Agent (SIA) 名
 - 受信接続のための Server Intelligence Agent (SIA) ポート番号
 - SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) の構成

- CA Wily Introscope Enterprise Manager の設定
- 設定ファイルを保存するための Subversion バージョン管理システムの設定
- プロモーションマネジメント設定
- インストールタイプ (フル、カスタム/拡張、および Web Tier)。別のインストールタイプの説明については、[インストールの種類を選択する \[55 ページ\]](#) を参照してください。

4.1 システム要件

BI プラットフォームをインストールする場合、以下のガイドラインに従ってください。

- オペレーティングシステムがサポートされていることを確認します。サポートされているのは 64 ビットのオペレーティングシステムのみです。
- オペレーティングシステムのパーティションにデプロイメントをインストールする場合は、デプロイメントおよびオペレーティングシステムの領域が十分にあることを確認してください。一時ファイルと Web アプリケーションに最低 2 GB の領域を確保することをお奨めします。
 - Tomcat のデフォルト Xmx (最大ヒープサイズ) 値が 2 GB から 4 GB に増加しました。この変更は、SAP ノート <https://launchpad.support.sap.com/#/notes/2536659> に記載されている症状に対応するために導入されています。
- SAP BusinessObjects BI Suite 製品を以前にインストールしたことがある場合、インストールプログラムでは既存のディレクトリが使用されます。

① 注記

完全パス長が 256 文字未満であることを確認します。セットアップがネットワーク場所から実行されている場合は、ドライブをローカルでマップすることをお奨めします。また、インストール先パスは 256 文字未満である必要があります。

サポートされるオペレーティングシステムとハードウェアの要件の詳細一覧については、[製品出荷マトリクス](#)で入手可能なサポートされるプラットフォームドキュメントを参照してください。

4.1.1 Red Hat Linux ベースの OS (Red Hat、Amazon、Oracle Linux) の追加要件

必要なライブラリのインストール確認

Red Hat Linux にインストールする前に、必要なすべてのライブラリがインストールされていることを確認する必要があります。ルートアクセスがあることを確認し、Yum ソフトウェアインストールツールを使用して、以下のコマンドを実行します。

- `yum install libstdc++.i686`
- `yum install libstdc++.x86_64`
- `yum install glibc.i686`

- `yum install glibc.x86_64`
- `yum install libX11.i686`
- `yum install libX11.x86_64`
- `yum install libXext.i686`
- `yum install libXext.x86_64`
- `yum install expat.i686`
- `yum install expat.x86_64`
- `yum install libgcc.i686`
- `yum install libgcc.x86_64`
- `yum install libXcursor.i686`
- `yum install libXcursor.x86_64`
- `yum install libXrender.i686`
- `yum install libXrender.x86_64`
- `yum install libXfixes.i686`
- `yum install libXfixes.x86_64`
- `yum install libxcb.i686`
- `yum install libxcb.x86_64`
- `yum install libXau.i686`
- `yum install libXau.x86_64`
- `yum install xz-libs.i686`

① 注記

- Red Hat Linux バージョン **7.2** を使用している場合は、yum ツールも使用して以下がインストールされていることを確認してください。

```
yum install glibc.i686
yum install glibc-common.x86_64 // if using Red hat 32 bit machine, use
yum install glibc-common.i686
yum install libstdc++.i686
yum install libgcc_s.so.1
yum install libstdc++.so.6
yum install libX11.i686
yum install libX11.so.6
yum install libXext-1.3.3-3.el7.i686
yum install libXext-1.3.3-3.el7.x86_64
yum install libXext-devel-1.3.3-3.el7.x86_64
yum install libXext-devel-1.3.3-3.el7.i686
```

- Red Hat Linux バージョン **8** または **9** を使用している場合は、yum ツールを使用して以下がインストールされていることも確認してください。

```
yum install libnsl.i686
yum install libxcrypt-4.1.1-4.el8.i686
yum install libnsl.x86_64
```

- BI 4.2 SP08 パッチ 3 以降では、非推奨パッケージ (例: SUSE の場合は `libstdc++33-3.3.3-11.9`、Red Hat の場合は `compat-libstdc++-33`)、および `libstdc++.so.5` ファイルの依存関係が削除されます。インストーラは、`libstdc++.so.6` およびこのファイルをインストールする新しいパッケージに依存するようになりました。

- 環境変数 \$LD_LIBRARY_PATH に /usr/lib および /usr/lib64 が含まれていることを確認します。そうでない場合は、以下のコマンドを使用します。

```
export LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib:/usr/lib64:$LD_LIBRARY_PATH
```

これらのライブラリがインストールされていない場合、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのインストール中にエラーが発生することがあります。詳細については、以下の SAP Support Knowledge Base の記事で説明しています。以下のナレッジベース記事を <https://support.sap.com/notes> で検索できます。

- [1692724](#)
- [1692679](#)
- [1692695](#)
- [1875824](#)
- [1968075](#)
- [2065789](#)

十分な仮想メモリ割り当ての確認

Red Hat Linux の一部のバージョンには、仮想メモリのデフォルトの割り当て方法が変更される、更新された glibc ライブラリが含まれます。これにより、起動時および使用中に、プロセスによって過剰なサイズの仮想メモリが割り当てられる可能性があります。

BI プラットフォームの Red Hat インストールに変更が必要かどうかを決定するには、SAP サポート技術情報 [1968075](#) を参照してください。

① 注記

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) バージョン 7.2 は、Business Intelligence プラットフォーム 4.2 SP4 以降でサポートされます。

4.1.2 Solaris の追加要件

Solaris 11.3 および 11.4 に必要なパッケージ

BI プラットフォームを Solaris 11.3 および 11.4 にインストールするには、以下の前提条件となるパッケージをインストールする必要があります。

パッケージ	最低バージョン	説明
pkg:/SUNWgzip	1.3.5-0.133	GNU Zip (gzip) 圧縮ユーティリティ
pkg:/SUNWlibc	0.5.11-0.133	Sun Workshop コンパイラバンドル libc
pkg:/SUNWmfrun	0.5.11-0.133	Motif ライブラリ、ヘッダ、xmbind およびバインディング

パッケージ	最低バージョン	説明
pkg:/compatibility/ucb	0.5.11-0.175.0.0.0.2.1	ユーザインタフェースとソースビルドの互換性のためのユーティリティ
pkg:/SUNWuiu8	0.5.11-0.133	UTF-8 ロケール用の lconv モジュール
pkg:/SUNWxcu4	0.5.11-0.133	XCU4 仕様との適合性を提供するユーティリティ
pkg:/SUNWxwice	0.5.11-0.133	X Window System Inter-Client Exchange (ICE) プロトコルをサポートするライブラリおよびユーティリティ
pkg:/SUNWzlib	1.2.3-0.133	Zip 圧縮ライブラリ

Solaris 11.2 以前に必要なパッケージ

BI プラットフォームを Solaris 11 にインストールするには、以下の前提条件となるパッケージをインストールする必要があります。

パッケージ	最低バージョン	説明
pkg:/SUNWbash	0.5.11-0.133	GNU Bourne-Again シェル (bash)
pkg:/SUNWgzip	1.3.5-0.133	GNU Zip (gzip) 圧縮ユーティリティ
pkg:/SUNWlibC	0.5.11-0.133	Sun Workshop コンパイラバンドル libC
pkg:/SUNWmfrun	0.5.11-0.133	Motif ライブラリ、ヘッダ、xmbind およびバインディング
pkg:/compatibility/ucb	0.5.11-0.175.0.0.0.2.1	ユーザインタフェースとソースビルドの互換性のためのユーティリティ
pkg:/SUNWuiu8	0.5.11-0.133	UTF-8 ロケール用の lconv モジュール
pkg:/SUNWxcu4	0.5.11-0.133	XCU4 仕様との適合性を提供するユーティリティ
pkg:/SUNWxwice	0.5.11-0.133	X Window System Inter-Client Exchange (ICE) プロトコルをサポートするライブラリおよびユーティリティ
pkg:/SUNWxwplt	0.5.11-0.133	X Window System プラットフォームソフトウェア (サーバ、DPS、拡張、Xlib、必須および共通クライアント)
pkg:/SUNWzlib	1.2.3-0.133	Zip 圧縮ライブラリ

Solaris 11 で必要なスケジューリング制御権限

BI プラットフォームインストールプログラムを実行するユーザアカウントには、`proc_prioctl` スケジューリング制御権限が必要です。これにより、このユーザアカウントで実行されるインストールプロセスによりスレッドの優先順位を変更できます。この権限を許可するには、Solaris 11 マシンに root ユーザとしてログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
usermod -K defaultpriv+=basic,proc_prioctl <userID>
```

ソフトパーティションにインストールできない

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを、ソフトパーティションが設定された Solaris マシンにインストールすることはできません。

4.1.3 SUSE の追加要件

SUSE Linux Enterprise にインストールするには、以下のカーネルパラメータと値を `/etc/sysctl.conf` ファイルで編集または追加します。

```
kernel.sem = 250 32000 32 1024
kernel.msgmni = 1024
kernel.shmmax = 18446744073709551615
```

root ユーザアカウントを使用して、このファイルを編集する必要があります。`/etc/sysctl.conf` ファイルの現在の内容を表示するには、コマンドラインから `sysctl -p` を実行します。使用中のオペレーティングシステムに対する現在の制限の設定を確認するには、コマンドラインから `ipcs -l` を実行します。

SUSE Linux にインストールする前に、必要なすべてのライブラリがインストールされていることを確認する必要があります。

ルートアクセスがあることを確認し、Zypper ソフトウェアインストールツールを使用して、以下のコマンドを実行します。

- `zypper install glibc`
- `zypper install glibc-32bit`
- `zypper install libstdc++6`
- `zypper install libstdc++6-32bit`
- `zypper install liblzma5-32bit` または `32 bit liblzma.so.5` をインストールする任意のパッケージ
- `zypper install libXext6-32bit`
- `zypper install libXau6-32bit`
- `zypper install libxcb1-32bit`
- `zypper install libX11-6-32bit`

① 注記

- SUSE 15 SP03 以上の場合: `install 32 bit libcrypt.so.1`
例: `zypper install libcrypt1-32bit`
- 環境変数 `$LD_LIBRARY_PATH` に `/usr/lib` および `/usr/lib64` が含まれていることを確認します。そうでない場合は、以下のコマンドを使用します。

```
export LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib:/usr/lib64:$LD_LIBRARY_PATH
```

4.1.4 DataDirect の追加要件

DataDirect ODBC データベースドライバを使用するレポートを実行する場合は、`odbc.ini` ファイルを設定する必要があります。[DataDirect DSN 接続の設定 \[92 ページ\]](#)を参照してください。

4.1.5 アカウントの権限

Unix または Linux ホストに BI プラットフォームをインストールするには、ユーザに以下の権限が必要になります。

カテゴリ	必要なアクセス権
オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none">インストール先ディレクトリでのスクリプトの読み取り、書き込み、および実行権限。システムインストールの場合、ルートアクセスが必要です (インストールプログラムでは、ホストマシンの起動および停止時にサーバを起動または停止する制御スクリプトが <code>/etc/rc</code> 内に作成されます)。
ネットワーク	<ul style="list-style-type: none">適切なポートからデプロイメント内のすべてのマシンへネットワークで接続できること。共有ファイルシステムディレクトリへアクセスできること。適切なネットワーク認証権限。
データベース	<ul style="list-style-type: none">SAP BusinessObjects ユーザアカウントでテーブルを作成、編集、および削除する権限。Central Management Server (CMS) システムデータベースで要求される、SAP BusinessObjects ユーザアカウントでストアードプロシージャを作成する権限

4.1.5.1 追加の UNIX および Linux 要件

TZ 環境変数の設定

インストールを実行する前に、TZ 環境変数を使用し、マシンのタイムゾーンが正しく設定されていることを確認する必要があります。これが設定されていない場合、デフォルトのタイムゾーンおよび夏時間ルールが使用され、それによって予測できない動作が発生する可能性があります。

TZ 変数を設定してから、エクスポートします。

例

```
TZ="PST+8PDT+7,M4.1.0/02:00,M10.5.0/02:00"
export TZ
```

POSIX TZ 変数の形式は以下のとおりです。

STD(+/-)hh:mm:ssDST(+/-)hh:mm:ss,Mm.n.d/hh:mm:ss,Mm.n.d/hh:mm:ss

- STD = 標準時間 (GMT、CET、PST) に従う際のタイムゾーンの名前。odbc.ini ファイルに設定された書き込み権限を確認してください。
- DST = 夏時間 (BST、CEST、PDT) に従う際のタイムゾーンの名前。
(+/-) は + または - を意味します。所在地がグリニッジの西側である場合は + が、所在地がグリニッジの東側である場合は - が付きます (+ はオプションです)。
- hh:mm:ss は、24 時間表示の時間、分、秒です (分と秒はオプションです)。大文字の 'M' は、DST の開始/終了ルール of 接頭辞です。
- 'm' は月です (1 月 = 1)。
- 'n' は月の週です (1-5)。
- 'd' は曜日です (日曜日 = 0)。

TZ の POSIX 文字列の例を以下に示します。

ロンドン: "GMT+01:00,M3.5.0/01:00,M10.5.0/01:00"

パリ: "CET-1CEST-2,M3.5.0/01:00,M10.5.0/01:00"

ベルリン: "CET-1CEST-2,M3.5.0/2:00,M10.5.0/3:00"

① 注記

オペレーティングシステムレベルのタイムゾーン設定は、SAP サポートの範囲外です。http://www.gnu.org/software/libc/manual/html_node/TZ-Variable.html に GNU POSIX 構文についての優れたレビューがあります。

odbc.ini ファイルに設定された書き込み権限を確認する


インストールプログラムによって、ファイル `<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.ini` に DSN 情報が書き込まれます。ユーザが実行するインストールは、このファイルに対して書き込みアクセスを持っている必要があります。BI プラットフォームマシンにインストールされた SAP HANA クライアントを所有している場合、このファイルに対して、読み取り専用アクセスが設定されている可能性があり、その場合 BI プラットフォームインストールに必要な情報の追加が妨げられます。

ユーザアカウント

ソフトウェアのバックグラウンドプロセスを実行できる、ユーザアカウントおよびグループを作成します。ソフトウェアのインストールと実行にはこのアカウントを使用します。アカウントには root 権限は必要ありません。

ロケール

インストールする前に、サポート対象の UTF-8 ロケールが使用されるようにインストールアカウントの環境を設定し、コンソールソフトウェアが UTF-8 文字セットをサポートしていることを確認します。お使いのオペレーテ

イングシステムで正しいロケールが使用されるようにするには、LC_ALL および LANG 環境変数をログイン環境に適したロケールに設定する必要があります。LC_ALL と LANG に設定するロケールの詳細については、[2052590](#)  を参照してください。

たとえば、以下の bash シェルコマンドは、ロケールをアメリカ英語 UTF-8 に設定します。

```
export LANG=en_US.utf8
export LC_ALL=en_US.utf8
```

→ ヒント

すべての関連ロケール環境変数 (たとえば LC_MONETARY や LC_NUMERIC など) が LC_ALL によって適切に設定されているかどうかを確認するには、「locale」と入力します。

サポートされている UNIX および Linux 環境の詳細な一覧については、製品出荷マトリクス (PAM) を参照してください。

コマンド

インストールプログラムを正常に実行するには、使用しているシステムに、次のユーティリティがシステムにインストールされ、パスに存在する必要があります。

/bin/sh	pwd	read	touch
uname	expr	hostname	sed
awk	chown	grep	tail
tar	id	dirname	gzip
stty	ulimit	which	ping

これらの中の1つがシステムにない場合は、サードパーティベンダ (GNU プロジェクトなど) ではなく、お使いのオペレーティングシステムのベンダ製のバージョンをインストールしてください。

① 注記

GNU バージョンのユーティリティからの出力は、お使いのオペレーティングシステムベンダが提供したバージョンのものとは大きく異なることがあります。インストールプログラムが予想しない形式の出力に遭遇するのを避けるため、インストールユーザアカウントの環境では GNU ユーティリティを使用しないでください。

インストール

新規インストールには、次の2つのタイプがあります。

- ユーザインストール
インストールされたソフトウェアは、インストールプログラムの実行に使用されたアカウントが所有します。サーバの起動と停止には、このアカウントを使用する必要があります。ユーザインストールを実行するために root ユーザアカウントにアクセスする必要はありませんが、インストールプログラムが root で実行されていることが検知されると、インストールプログラムは終了します。

- システムインストール
システムインストールは、システムの起動とシャットダウンの実行制御スクリプトを追加した、完全なユーザインストールです。これらのスクリプトによって、オペレーティングシステムの起動またはシャットダウン時に、自動的に SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームサーバ機能が開始および停止されます。実行制御スクリプトをインストールするスクリプトは、ユーザインストールの完了後に root 権限で実行される必要があります。

4.1.6 サーバの場所の選択

分散インストールを計画している場合は、サーバ間の遅延を考慮に入れてください。CMS のパフォーマンスを最適化するために、CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースサーバと同じサブネット上に CMS を設置してください。

CMS はクラスタ化することもでき、クラスタ内の異なるホストシステム上で CMS サーバプロセスを実行できます。CMS クラスタを作成する場合は、CMS システムまたは監査データストアに対し、各コンピュータで同じネットワーク遅延が発生していることを確認してください。

CMS サーバプロセスのクラスタ化の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「“Central Management Server のクラスタ化”」の節を参照してください。

4.2 CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースの準備

デフォルト以外のデータベースサーバを使用するには、BI プラットフォームをインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- データベース、(お使いのデータベースに該当する場合はテーブルスペースまたはスキーマ)、およびアカウントを作成し、CMS 設定およびシステム情報を格納します。監査情報を保持するには、2 次テーブルスペースまたはスキーマが必要です。データベース、テーブルスペース、およびアカウント情報を記録すると、BI プラットフォームインストールプログラムにより要求された場合に詳細を入力することができます。

⚠ 警告

既存の BI プラットフォーム v3.x または v4.x インストールがある場合、新規データベースを作成し、インストールの完了後に既存のコンテンツを移行する必要があります。

- データベースサーバが UTF-8 などの Unicode 文字エンコードを使用するように設定されていることを確認してください。
- データベースアカウントに、テーブルの作成、変更、削除、およびストアドプロシージャの作成の権限があることを確認してください。
- ネットワーク上でデータベースサーバを使用する場合、BI プラットフォームをインストールする前に適切なデータベースクライアントドライバをインストールし、それが機能していることを確認する必要があります。データベースに必要なドライバを確認するには、データベース管理者に連絡します。

インストール時に、インストールプログラムがデータベースを初期化するための接続および認証情報の入力を求められます。以下の表に、サポートされているデータベースに必要な情報を示します。

MySQL	<ul style="list-style-type: none">• CMS データベース名• サーバのホスト名• ポート番号 (デフォルトは 3306)• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
IBM DB2	<ul style="list-style-type: none">• DB2 エイリアス名• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
Oracle	<ul style="list-style-type: none">• Oracle TNSNAME 接続 ID• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
Sybase ASE	<ul style="list-style-type: none">• サービス名 <div><p>① 注記</p><ul style="list-style-type: none">• Sybase Adaptive Server Enterprise (ASE) サービス名は、データベース管理者が <code>sql.ini</code> ファイルおよびインタフェースファイルで設定したホスト名およびポート番号の組み合わせになります。• BI プラットフォームは、指定したユーザのデフォルトデータベースに接続します。デフォルトは、データベース管理者が設定します。</div> <ul style="list-style-type: none">• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
ODBC を使用する Sybase SQL Anywhere	<ul style="list-style-type: none">• DSN• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)
ODBC を使用する SAP HANA データベース	<ul style="list-style-type: none">• DSN• アカウントのユーザ名• アカウントのパスワード• [既存のデータベースをリセット] オプション (推奨設定)

4.2.1 IBM DB2 の追加要件

IBM DB2 には、BI プラットフォームのインストール前に、満たす必要のある要件があります。

- DB2 データベースに次の設定が作成されていることを確認します。

```
Collating Sequence = "Identity"
Codeset = "UTF-8"
Territory = "<XX>"
```

<XX> は、使用している環境に適したコードで置き換えます。詳細については、DB2 のマニュアルを参照してください。DB2 データベースが Collating Sequence = "Identity" に設定されていない場合は、ユーザオブジェクトとユーザグループオブジェクトが CMC で予測通りにソートされない可能性があります。

- BI プラットフォームのインストール前にユーザの一時表スペースを作成します。ユーザの一時表スペースを作成しないと、BI プラットフォームのインストールプログラムは DB2 データベースを設定できません。IBM DB2 のユーザの一時表スペースの詳細については、IBM Technical library の *DB2 Basics: Table spaces and buffer pools* (英語) (<http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/0212wieser/0212wieser.html> ♪) を参照してください。
- IBM DB2 を使用して監査データストアデータベースをホストする場合は、監査表スペースのページサイズが最低でも 8192 (8 KB) に設定してあることを確認します。
- CMS システムデータベースがパーティション化されていないことを確認してください。監査データストアデータベースはパーティション化できます。

さらに、以下のユーザアカウントの要件を検討します。

- DB2 データベースのホストに使用するユーザアカウントの ID が、次の IBM 要件を満たすことを確認します。DB2 をホストする UNIX システムまたは Linux システムの IBM 要件の詳細については、“DB2 ソリューションインフォメーションセンタ” (<http://www.ibm.com/support> ♪) のデータベースの基本セクションの DB2 のユーザとグループ (Linux および UNIX) を参照してください。
 - guests、admins、users、または local を除く一次グループがあること。
 - 英小文字 (a-z)、数字 (0-9)、または下線文字 (_) のみを含むこと。
 - 8 文字を超えないこと。
 - 先頭が IBM、SYS、SQL、または数字ではないこと。
 - DB2 予約語 (USERS、ADMINS、GUESTS、PUBLIC、または LOCAL)、あるいは SQL 予約語ではないこと。
 - DB2 インスタンス ID、DAS ID、または fenced ID の root 特権を持ついずれのユーザ ID も使用しないこと。
 - アクセント付きの文字を含まないこと。
 - 新しいユーザ ID を作成する代わりに既存のユーザ ID を指定する場合は、ユーザ ID について以下の条件を満たすこと。
 - ロックされていない
 - パスワードの有効期限が切れていない
 - ユーザの一次グループは次の要件を満たすこと。
 - guests、admins、users、または local のいずれでもないこと。
 - 先頭が sql または ibm でないこと。
 - 先頭が数字でないこと。
 - 英小文字 (a-z)、数字 (0-9) のみを含むこと。

同じマシンに IBM DB2 データベースおよび Central Management Server (CMS) をインストールする場合、

- thread-max 設定およびユーザアカウントの ulimit 設定が十分であることを確認してください。ulimit を無制限に設定することをお勧めします。

4.2.2 Sybase ASE の追加要件

CMS または監査データベースに Sybase ASE を使用する場合は以下のとおりです。

- `page size` を 8 KB に設定してデータベースを作成します。デフォルトのページサイズは 2 KB です。このサイズは、CMS システムデータベースを効率的に実行するには小さすぎます。ページサイズはデータベースの作成中に設定され、データベースの作成後には変更できません。
- UTF-8 などの Unicode 文字セットを使用します。
- CMS データベースとして SAP Adaptive Server Enterprise v16.0 以降を使用している場合は、インデックス圧縮を無効化する必要があります。

4.2.3 SQL Anywhere を使用した CMS クラスタリングの追加要件

バンドルされている SQL Anywhere データベースサーバを CMS で使用している場合、新しいコンピュータ上の新しいノードを CMS クラスタに追加する前に 2 つの前提条件があります。新しいノードをホストするマシンに対して、以下の作業を行います。

1. SQL Anywhere Database Client をインストールする必要があります。
次の URL から、使用中のオペレーティングシステムに対応する SQL Anywhere 17 クライアントをダウンロードします。<http://scn.sap.com/docs/DOC-35857>
2. プライマリノードの SQL Anywhere CMS データベースに接続する ODBC DSN を作成する必要があります。
プライマリノードで、ODBC システム情報ファイルを開き、DSN の詳細を記述します。たとえば、
`<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.ini` のようになります。デフォルトでは、DSN は `BI4_CMS_DSN<Unix timestamp>` です。

次の例を考えてみます。CMS サーバとバンドルされた SQL Anywhere データベースが存在するプライマリノードが 1 台のマシンにインストールされています。新しいマシンに新しいノードを作成するには、以下を実行します。

1. SQL Anywhere Database Client をインストールします。これにより、SQL Anywhere 17 データベースドライバがインストールされます。
2. SQL Anywhere 17 ドライバを使用して、プライマリノードの SQL Anywhere CMS データベースに接続する ODBC DSN を作成します。たとえば、プライマリノードのホストが 192.0.2.0 で、SQL Anywhere インストールのデフォルトポートと値が次のようであると仮定します。

```
[ODBC Data Sources]
BI4_CMS_DSN_1362069282=SQLAnywhere 16.0
[BI4_CMS_DSN_1362069282]
UID=dba
PWD=mypassword
DatabaseName=BI4_CMS
ServerName=BI4_1362069282
Host=192.0.2.0:2638
Driver=/opt/sqlanywhere16/lib64/libdbodbc16.so
```

3. BI プラットフォームサーバインストールプログラムを実行し、インストールタイプに **[カスタム/拡張]** を選択します。インストール中に次の項目を選択します。
 - **[機能の選択]** ページで、**[Central Management Server]** 機能を選択します。**[Sybase SQL Anywhere データベース]**、**[Subversion]**、および **[WebTier]** 機能の選択を解除します。

- [新規または拡張インストールの選択] ページで、[既存の SAP BusinessObjects BI プラットフォームデプロイメントを拡張する] を選択します。
- [既存の CMS データベースタイプの選択] ページで、[SAP Sybase SQL Anywhere (ODBC 使用)] を選択します。
- [CMS リポジトリデータベースの設定 - SQL Anywhere (ODBC)] ページで、手順 2 で作成した ODBC DSN を選択し、“dba” アカウントパスワードを入力します。
- 続行し、新しい CMS サーバノードのインストールを完了します。

4.2.4 バンドルされた SQL Anywhere ODBC 設定

CMS および監査データベースに使用するためにバンドルされた SQL Anywhere をインストールしているとき、インストールプログラムは新しい DSN エントリを探し、既存の ODBC システム情報ファイルに書き込もうとします。既存のファイルが検出または設定されない場合、インストールプログラムによって <BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.ini に新しい DSN エントリを含むファイルが作成されます。

レポートおよび分析の目的で、新しい ODBC エントリを作成する場合は、これらのエントリを CMS および監査データベースと同じ .ini ファイルに統合します。

4.3 ulimit を無制限に設定

BI プラットフォーム Web アプリケーションを正常に構築してデプロイするには、ホストのオペレーティングシステムまたはユーザのアカウントの ulimit 設定を 無制限に設定する必要があります。

ulimit コマンドを使用して ulimit を設定するか、Linux の場合はシステム構成ファイル /etc/security/limits.conf を変更します。ulimit の詳細については、オペレーティングシステムに含まれているドキュメントを参照してください。

4.4 SAP サポート

4.4.1 SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポート

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) とは、インストール済みの SAP ソフトウェアおよび SAP 以外のソフトウェア (オプション) のリストを維持するディレクトリサービスです。SLD では、情報が次の 2 つのカテゴリに大きく分類されています。

- すでにインストールされているソフトウェア
- 後からインストールされる可能性のあるソフトウェア

SAP システムには、ランドスケープディレクトリを自動更新するデータサプライヤ (DS) コンポーネントが付属しています。SLD に対応している SAP 以外のソフトウェアは、オープン API を介して登録されます。インストール済みのソフトウェアについて収集される情報は次のとおりです。

- バージョン
- ホスト情報
- 接続情報

SLD サポートを使用するために、BI プラットフォームをホストしているシステムに SAP Host Agent がインストールされ機能していることを確認します。SAP Host Agent は、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

4.4.1.1 SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) サポートを有効にする

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) または SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用する計画がある場合は、SAP Host Agent がインストールされ設定されていることを確認してください。次の手順に従って作業をすると、SAP Host Agent がインストールされます。

SAP Host Agent は、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。SAP Host Agent の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence platform* 管理者ガイドの“システムランドスケープでの SAP BusinessObjects Business Intelligence platform の登録”に関する項目を参照してください。

① 注記

SAP GUI または SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) をインストールしている場合は、以下の手順 4 に移ってください。

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポートをインストールするには、root 権限を持つ `sapadm` ユーザが必要です。

また `SAP_LocalAdmin` グループも存在し、`sapadm` ユーザはこのグループのメンバーになっている必要があります。SAPHOSTCONTROL のインストール中に、`sapadm` のユーザパスワードが必要になります。

1. SAP HOST AGENT は、`<Package_Download_Location>/BusinessObjectsServer/Collaterals/Tools/SAP_HOSTAGENT` で関連製品にパッケージ化されています。

① 注記

`<Package_Download_Location>` は、BI インストーラパッケージをダウンロードした場所を示しています。

2. `SAP_HOSTAGENT` フォルダから管理者権限でコマンドプロンプトを起動します。
3. 次のコマンドを入力して、SAPHOSTCONTROL をインストールします。

```
saphostexec -install
```

4. `sldreg` ツールを探します。このツールは通常次のフォルダに保存されています。

```
/usr/sap/hostctrl/exe
```

5. 以下のコマンドを使用して、SLD キーを作成します。

```
sldreg -configure connect.key
```

SLD サーバに接続するためのユーザ名、パスワード、ホスト、ポートおよびプロトコルの入力を求められます。

6. 要求される情報を入力します。

sldreg ツールは、SLD サーバに情報をプッシュするために sld-ds で自動的に使用される connect.key ファイルを作成します。

BI プラットフォームのインストールがすでに済んでいる場合は、すべての SIA ノードをセントラル設定マネージャ (CCM) で再起動して SLD に登録します。

4.4.2 SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のサポート

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) は、SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のシステムのパフォーマンスを監視します。SMD が収集した情報を使用して、問題の識別、分析、および解決ができます。収集される情報は次のとおりです。


- パフォーマンスモニタリング
- 設定管理
- ログ管理
- ロードテスト
- アラート
- リソース監視

SMD に統合されているツールは次のとおりです。

- CA Wily Introscope
完全な計測には、SMD と CA Wily Introscope の両方を使用する必要があります。
- SAP LoadRunner by HP

SAP Certified Integration の認定を受けた非 SAP ソフトウェアは、セントラルリポジトリに配置されてから、ユーザの SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) に自動的に転送されます。SAP カスタマは、SAP システム環境において、SAP が認定しているサードパーティ製品統合のバージョンを簡単に特定することができます。このサービスにより、サードパーティ製品のオンラインカタログにないサードパーティ製品についても知ることができます。

SMD を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。SMD エージェントは、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。インストール中に、インストールプログラムから SMD エージェントのホスト名とポート番号の入力を求められます。SMD を使用しない場合、または後でインストールする場合は、SMD を使用しないことを選択できます。SMD エージェントは、後でセントラル管理コンソール (CMC) の [\[プレースホルダ\]](#) 画面で設定できます。詳細については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[95 ページ\]](#) を参照してください。

SMD エージェントの詳細については、[1858920](#)  を参照してください。

4.4.3 CA Wily Introscope のサポート

CA Wily Introscope は SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) の一部として含まれています。完全な計測には、SMD と CA Wily Introscope の両方を使用する必要があります。

CA Wily Introscope と SMD を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。SMD エージェントは、BI プラットフォームのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

インストール中に、インストールプログラムから Introscope エージェントのホスト名とポート番号の入力を求められます。Introscope を使用しない場合、または後でインストールする場合は、Introscope を使用しないことを選択できます。Introscope は、後でセントラル管理コンソール (CMC) の [\[プレースホルダ\]](#) 画面で設定できます。詳細については、[インストール後に CA Wily Introscope エージェントを設定する \[95 ページ\]](#) を参照してください。

4.4.4 SAP BW のサポート

BI プラットフォームは SAP BW と統合することができます。SAP BW から最高のパフォーマンスを得るには、次の SAP ノートにある手順に従ってください。

- [1771995](#) - デザイン時における階層レベルの番号が不適切
- [1750788](#) - BICS メタデータサービス拡張
- [1767351](#) - 固定フィルタに特性のメタデータがない
- [1776999](#) - 階層並べ替えが不適切
- [1777544](#) - ノードタイプ属性にメタデータがない
- [1778347](#) - ノードタイプの属性が読み取られない
- [1770434](#) - 複合特性の動的フィルタが正しくない
- [1762156](#) - デザイン時における固定フィルタのノードが正しくない
- [1776688](#) - 読み取られる階層レベルが多すぎる
- [1798297](#) - Samsung クエリに関して見つかった問題の修正
- [1806813](#) - 特性値のテキストが読み取られない
- [1809517](#) - デザイン時サービスによる変数の一覧を取得する際の無効な変数順序の修正
- [1811124](#) - このノートではデザイン時 API によって返されたドリルダウン特性の並べ替えを、ランタイムの並べ替えと一致するように修正
- [1812142](#) - このノートではデザイン時 API によって返された階層の並べ替えを、ランタイムの並べ替えと一致するように修正
- [1817482](#) - このノートではデザイン時 API の機能を追加して、最初に読み込む必要のあるメンバーかどうかを選択します。デフォルトでは、読み込まれない場合に SL のパフォーマンス拡張が提供されます。

4.5 最終チェックリスト

BI プラットフォームをインストールする前に、以下のチェックリストを確認してください。

- インストール先フォルダを決定しましたか。

① 注記

- 出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。

- インストール先フォルダが、インストールプログラムが展開されているのと同じフォルダではないことを確認します (現在の作業ディレクトリからインストールプログラムを実行中に、現在の作業ディレクトリにインストールしないでください)。

- デプロイメントに含まれるすべてのマシン間のネットワーク接続が適切かどうかを確認しましたか。
- 独自のデータベースサーバを使用している場合
 - CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースに対して、データベース、テーブルスペース (必要な場合)、およびアカウントを作成しましたか。
 - BI プラットフォームホストからデータベースにログオンできることを確認しましたか。
 - IBM DB2 または Sybase ASE を使用している場合、そのデータベースが正しい設定で作成されたことを確認しましたか (設定の中には、データベース作成後には変更できないものもあります)。
 - データベースクライアントソフトウェアを正しく設定しましたか。
- 独自の Web アプリケーションサーバを使用している場合
 - 使用する Web アプリケーションサーバを決定しましたか。
 - サーバはすでにインストールおよび設定されていますか。
 - 既存の Web アプリケーションサーバに必要な JDK がインストールされていることを確認しましたか。
- SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用する計画がある場合は、SAP Host Agent のインストールと設定が済んでいることを確認してください。詳細については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) のサポート \[22 ページ\]](#) を参照してください。
- SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用する計画がある場合は、BI プラットフォームの前または後に SMD エージェントをインストールして設定することができます。詳細については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[23 ページ\]](#) を参照してください。

Unix の場合、次回以降にスケジュールされたジョブのタイムスタンプが正しくなるように、TZ 環境変数をすべての BI プラットフォームサーバで設定する必要があります。TZ 環境変数が正しく設定されておらず、タイムゾーンのルールがデフォルトの米国の標準時になっていると、別の場所で問題が発生する場合があります。

DST に関する開始および終了情報を提供するために、TZ 変数を設定する必要があります。

例

TZ 設定は、たとえば TZ='EST-10EDT-11,M10.1.0/02:00:00,M4.1.0/03:00:00' となります。

① 注記

TZ 変数の設定は、POSIX 1003.1 の第 8.1.1 節に従ったものです。書式の詳細については、<http://www.opengroup.org/onlinepubs/007908799/xbd/envvar.html> を参照してください。

5 インストール

この章では、BI プラットフォームのインストール手順について説明します。

5.1 概要

BI プラットフォームのインストールプログラムには、次の 3 つの実行方法があります。

- 対話型インストール
インストールに関連するすべての情報をユーザが選択できる対話型ウィザードを使ってインストールします。このオプションを使用して、一連の画面で個々のインストールオプションを選択できます。これは、デフォルトのインストール方法です。
- サイレントインストール
インストールオプションは、コマンドラインまたはテキストファイルで指定します。複数のマシンに同じ設定でインストールする場合は、このオプションが便利です。
- 段階的インストール
インストールは 2 段階 (キャッシュとキャッシュ後のインストール) で実行されます。

インストールプログラムで予想外の状況が発生し続行できない場合は、その時点まで実行された作業が元に戻され、インストールが開始される前のシステム状態に戻ります。

BI プラットフォームが機能するには、データベースサーバと Web アプリケーションサーバが必要です。既存のデータベースがない場合は、インストールプログラムによって Sybase SQL Anywhere データベースが自動的にインストールおよび設定されます。既存の Web アプリケーションサーバがない場合は、インストールプログラムによって Tomcat Web アプリケーションサーバが自動的にインストールおよび設定されます。

① 注記

インストールプログラムがインストールを完了するまで 1 時間以上かかる場合もあります。

5.2 サーバインストールプログラムをダウンロードする

次のツールを使用できます。

- .rar ファイルの抽出および .exe ファイルを実行するための WinZip/WinRAR がある Windows マシン。
- ソフトウェアファイルをダウンロードするための SAP ダウンロードマネージャ。

サーバのインストールプログラムをダウンロードするには、以下の手順を実行します。

1. <https://support.sap.com/home.html> > [ソフトウェアダウンロード] に移動します。
2. [Installations and Upgrades] の下の [By Alphabetical Index (A-Z)] を展開します。

3. [B](#) [SBOP BI platform \(former SBOP Enterprise\)](#) [SBOP BI PLATFORM \(ENTERPRISE\)](#) [SBOP BI PLATFORM 4.3](#) を選択します。
4. [インストールおよびアップグレード](#) を選択し、プラットフォームを選択します。
[ド롭ダウンから OS を選択することができます。]
5. [SBOP BI PLATFORM <バージョン> SERVER](#) というタイトルのすべてのパッケージと、必要な追加アドオン製品を選択してから、Web サイトの指示に従ってこれらのパッケージをダウンロードして抽出します。

① 注記

Windows マシンまたはシステム内の同じ場所に .rar および .exe パッケージをダウンロードしていることを確認する必要があります。

6. .exe ファイルを実行します。
7. 抽出されたファイルを UNIX マシンまたはシステムにコピーします。

ソフトウェアのダウンロードには時間がかかることがあります。システム管理者に連絡して、会社のファイアウォールがダウンロード処理を終了しないようにする必要があります。

① 注記

[\[Installation & Upgrades\]](#) カテゴリまたは [\[Support Packages & Patches\]](#) カテゴリから ONE Installer パッケージをダウンロードしてフレッシュインストールシナリオと更新インストールシナリオにそのパッケージを使用できます。サポートパッケージとパッチのインストールの詳細については、[SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームサポートパッケージアップデートガイド](#)を参照してください。

5.2.1 ONE Installer

ONE Installer の概要

ONE Installer は、単一のインストールパッケージであり、以下の複数の BI インストールシナリオをサポートしています。

- サポートパッケージ/パッチのフレッシュインストール
- 任意のサポートパッケージ/パッチから任意のサポートパッケージ/パッチへの更新

以下の表に記載されている情報は、BI 4.2 SP06 以上、および 4.3 バージョンにも適用されます。

SAP BusinessObjects BI プラットフォームを使用していない場合は、BI リリースの最新のサポートパッケージまたはパッチバージョンのフレッシュインストールに ONE Installer を使用できます。

従来のバージョンの SAP BusinessObjects BI プラットフォームを現在使用している場合は、ONE Installer を使用して、最新の使用可能なパッチを含む、BI リリースの任意の新しいバージョンに更新できます。

ONE Installer は、すべての BI Suite 製品に対して利用可能であり、通常の BI Suite インストーラでサポートされるすべてのプラットフォームにインストールできます。

以下の表には、ONE Installer を使用可能なさまざまなシナリオが示されています。既存の手順と ONE Installer の手順を比較できます。

シナリオ	例	既存の手順	ONE Installer の手順
フレッシュインストール	BI 4.2 SP06 をインストールする。	1. SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4.2 SP06 をインストールします。	1. 4.2 SP06 を 1 ステップで直接インストールします。
	BI 4.2 SP06 パッチ x をインストールする。	パッチレベルのフレッシュインストールは現在サポートされていません。ただし、以下の手順に従うことができます。 1. SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4.2 SP06 をインストールします。 2. 通常のパッチインストーラを使用して、4.2 SP06 から 4.2 SP06 パッチ x に更新します。	1. 4.2 SP06 パッチ x を 1 ステップで直接インストールします。
パッチからパッチへの更新	4.1 SP05 パッチ 1 から 4.2 SP06 パッチ x に更新する。	1. 4.1 SP05 パッチ 1 から 4.2 SP06 に更新します。 2. 通常のパッチインストーラを使用して、4.2 SP06 から 4.2 SP06 パッチ x に更新します。	1. 4.1 SP05 パッチ 1 から 4.2 SP06 パッチ x に 1 ステップで直接更新します。
	4.2 SP06 パッチ x から 4.2 SP06 パッチ y に更新する。	1. 通常のパッチインストーラを使用して、4.2 SP06 パッチ x から 4.2 SP06 パッチ y に更新します (デルタ更新)。	1. 4.2 SP06 パッチ x から 4.2 SP06 パッチ y に 1 ステップで直接更新します。
パッチからサポートパッケージへの更新	4.1 SP05 パッチ 1 から 4.2 SP06 に更新する。	1. 4.1 SP05 パッチ 1 から 4.2 SP06 に更新します。	1. 4.1 SP05 パッチ 1 から 4.2 SP06 に 1 ステップで直接更新します。
サポートパッケージからパッチへの更新	4.1 SP05 から 4.2 SP06 パッチ x に更新する。	1. 4.1 SP05 から 4.2 SP06 に更新します。 2. 通常のパッチインストーラを使用して、4.2 SP06 から 4.2 SP06 パッチ x に更新します。	1. 4.1 SP05 から 4.2 SP06 パッチ x に 1 ステップで直接更新します。

5.2.1.1 ONE Installer の使用

Unix オペレーティングシステムの場合、ONE Installer を使用したインストールプロセスは以下のとおりです。

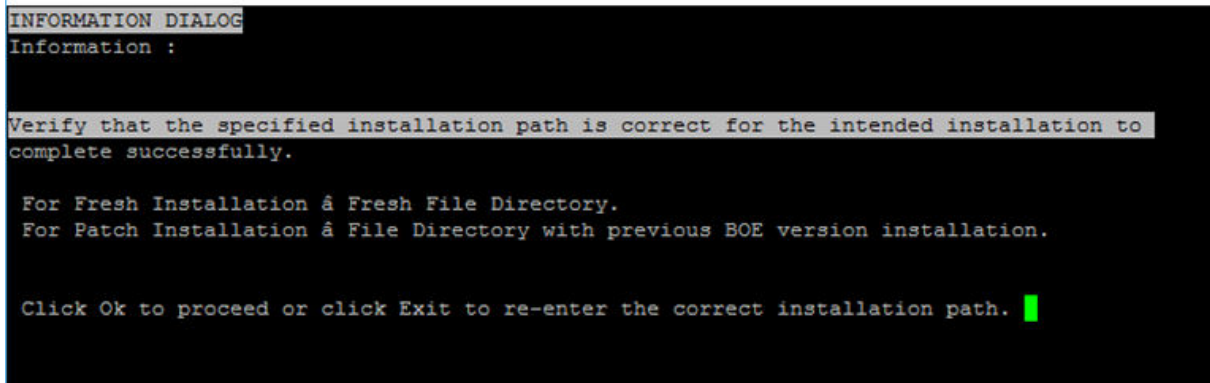
- SAP BI プラットフォームのフレッシュインストールでは、コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。

`./setup.sh -InstallDir <i.e. <Destination folder> into which the setup program will install.`

- 更新またはパッチインストールのシナリオでは、コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。
`./setup.sh -InstallDir <i.e. <Destination folder> path where the base has been installed.`

例: `./setup.sh -InstallDir /build/BOE`

以下の図の指定したインストールパスは、上記の `InstallDir` パスを示しています。



① 注記

新たに導入された前提条件チェック機能は、Unix プラットフォームで以下のように ONE Installer パッケージで 사용할 수 있습니다。

構文: `./setup.sh -InstallDir <Folder path, same as the value for InstallDir option in the response file> -pre_requisite_check <response file path> <file path to store failed pre-requisite info>`

例: `./setup.sh -InstallDir /build/BOE - pre_requisite_check %build%response.ini %build%failed.txt`

5.2.1.2 ONE Installer を使用する利点

ONE Installer を使用することで、以下を実現できます。

- 1 ステップのインストール
 - 新しいカスタムは、最新の利用可能なサポートパッケージの最新のパッチレベルに 1 ステップで更新できます。
 - 既存のカスタムは、パッチを適用する前にランドスケープをサポートパッケージレベルに更新するステップを省くことができます。
- 2 ステップのパッチ適用が 1 ステップに削減されるため、インストール時間が約 50% 節約される。
- エンドユーザに対する、更新時の本稼働のダウンタイムが削減される。
- 必要なサポートパッケージまたはパッチへの更新後のチェックおよびテストの実行が 1 回だけになる。
- BI プラットフォーム管理者のメンテナンス作業が改善される。

5.3 ターミナルでスタンドアロンの前提条件チェックを実行する

前提条件をチェックするには、以下の手順を実行します。

1. オプション `SetupUILanguage=en` および `InstallDir` が含まれている必須の **response.ini** ファイルがあることを確認します。
2. ファイルメニューからターミナルを開きます。
3. ソフトウェアがダウンロードされ、抽出された場所に移動します。
4. コマンド `setup.sh -InstallDir <Install_Dir_Path> -pre_requisite_check <response file path> <file path to store failed pre-requisite info>` を実行します。

例: `./setup.sh -pre_requisite_check <Unix_Directory>%response.ini
<Unix_Directory>%logs%xyz_failedpc.txt`

この例では、`<Unix_Directory>` は UNIX システムの任意のファイルの場所です。

① 注記

両方のパラメータ、すなわち、**SetupUILanguage=en** オプションおよび **InstallDir** 値が含まれているファイル **response.ini**、および合致しない前提条件をキャプチャする `file path` の値を指定する必要があります。

指定した `file path` の値が無効である場合は、デフォルト名 **failedPrerequisites.txt** のファイルが、**setupengine.log** が保存される一時ディレクトリの下に作成されます。

5. 前提条件チェックの結果が **.txt** ファイルに書き込まれ、プロセスが終了します。

① 注記

製品の前提条件に合致しない場合、**.txt** ファイルには次の項目が含まれています。 `<pre-requisite name>` および `<info related to the pre-requisite failure.>`

製品の前提条件を満たした場合、**.txt** ファイルには **setupengine.log** に書き込まれる単一行の情報である「すべての製品の前提条件に合格しました。」が含まれています。

5.4 対話型のインストールを実行する

SAP BusinessObjects Business Intelligence (BI) プラットフォームインストールメディアをロード、マウント、またはダウンロードします。LC_ALL を `en_US.utf8` などのサポートされている UTF-8 文字セットに設定してください。例:

```
export LANG=en_US.utf8  
export LC_ALL=en_US.utf8
```

① 注記

インストールログファイルは、最初に一時ディレクトリに作成されてから、インストール時に `<BIP_INSTALL_DIR>/InstallData/logs/<DATEandTIME>/setupengine.log` に移動および保存されます。

1. コマンドラインを使用してパッケージのダウンロード場所に移動し、ルートユーザ以外として `./setup.sh` コマンドを実行します。

コマンドラインから `InstallDir=DESTINATION_DIR` パラメータでインストール先フォルダを設定します。たとえば、BI プラットフォームを `/opt/sap` フォルダにインストールするには、コマンド `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path>` を使用します。

2. [\[インストーラ言語の選択\]](#) ページで、セットアップ言語を選択します。

この言語設定を使用して、インストールプログラムは、ユーザが選択した言語で情報を表示します。英語以外の言語を選択した場合は、対応する言語パックがサーバに自動的にインストールされます。

① 注記

インストールプログラムは、使用しているオペレーティングシステムと同じ言語で自動的に実行されます。インストールプログラムで使用する言語に従って、インストールプログラムによって設定されるコンポーネントに使用される名前が決定されます。これらの名前は、後で変更できず、インストール終了後の言語設定の影響は受けません。

3. [インストールフォルダの設定](#) ページで、表示されるインストール先フォルダを確認します。

インストールプログラムにより、このフォルダに BI プラットフォームがインストールされます。フォルダが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。

① 注記

- 出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。
- インストール先のフォルダ名にスペースが含まれていないことを確認します。
- 出力先フォルダが、インストールプログラムが展開されているのと同じフォルダではないことを確認します (現在の作業ディレクトリからインストールプログラムを実行中に、現在の作業ディレクトリにインストールしないでください)。

4. [\[前提条件のチェック\]](#) ページで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するか選択します。

インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。依存関係の要件が重要な場合は、インストールプログラムによってインストールが中止されます。見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、条件を修正するかを選択できます。

5. インストールの初期ページを確認します。
6. [\[使用許諾契約\]](#) ページで、使用許諾契約を確認して同意します。
7. [\[製品登録の設定\]](#) ページで、製品キーを入力します。

→ ヒント

製品の再インストールが必要になった場合のために、製品キーを安全な場所に保管してください。

8. [\[言語パッケージの選択\]](#) ページで、インストールする追加の言語をリストから選択します。

オペレーティングシステムで現在使用されている言語が自動的に選択されます。各言語パックで問題が検知された場合、BI プラットフォームは英語を使用してフォールバックするため、英語サポートを選択から外すことはできません。

[\[インストールタイプの選択\]](#) ページが表示されます。

5.4.1 インストールの種類を選択する

[[インストールタイプの選択](#)] ページは、実行するインストールのタイプを選択するために使用します。

1. 次のインストールの種類オプションのいずれかを選択します。

- Full
1 台のマシンに必要なすべてのサーバコンポーネントをインストールします。実稼動前のデプロイメントやテスト環境など、シングルホストデプロイメントを構築するには、このオプションを使用します。
- Custom / Expand
上級ユーザは、機能を個別に選択できます。このオプションは次の場合に使用します。
 - CMS クラスタを作成するなど、複数のホスト間でサーバコンポーネントを分散する場合
 - ホストにデプロイする機能を完全に制御する場合

① 注記

バンドルされている SQL Anywhere データベースサーバを使用する CMS クラスタに新しいノードを追加する場合、インストールを進める前に、「[SQL Anywhere を使用した CMS クラスタリングの追加要件 \[20 ページ\]](#)」を参照してください。

- Web Tier
Web Tier には、BI ラウンチパッドおよびセントラル管理コンソール (CMC) などの Web アプリケーションが含まれています。[[Web Tier](#)] インストールオプションを使用すると、Java Web アプリケーションがデフォルトの Java Web アプリケーションサーバにインストールされます。
サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。

2. 次のページに進んで、選択したインストールの設定を開始します。

後でいつでも、[[インストールタイプの選択](#)] ページに戻ることができます。

- [[フル](#)] インストールを選択した場合は、次のフルの節に進みます。
- [[カスタム/拡張](#)] インストールを選択した場合は、次のカスタム/拡張の節に進みます。
- [[Web Tier](#)] インストールを選択した場合は、次の *Web Tier* の節に進みます。

5.4.1.1 フルインストール

BI プラットフォームの [[フル](#)] インストールでは、次の手順を実行します。

1. [デフォルトデータベースまたは既存データベースの選択](#) ページで、Central Management Server (CMS) および監査データストア (ADS) 情報を保存するためのデータベースオプションを選択します。

オプション	説明
Sybase SQL Anywhere データベースの設定およびインストール	BI プラットフォームと一緒に使用するデータベースサーバを準備していない場合は、インストールプログラムで Sybase SQL Anywhere をインストールおよび設定することができます。

① 注記

バンドルされたソフトウェアのサードパーティパッチまたはアップデートのインストールは、サポートされていません。詳細については、[BI プラットフォームにバンドルされたサードパーティソリューションへのパッチ提供 \[100 ページ\]](#)を参照してください。

既存のデータベースの設定

既存のデータベースサーバを使用している場合、インストールプログラムから、CMS システムデータベースおよび監査データベースの両方のデータベースタイプと接続認証情報を入力するよう求められます。

① 注記

既存のデータベースには、適切な権限が設定されたユーザアカウントが必要で、適切なドライバがインストールされ、動作することが確認されている必要があります。インストールプロセスの一部として、インストールプログラムにより、データベースへの接続と初期化が試行されます。

お使いのデータベースサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポート対象データベースを決定することをお勧めします。

2. [\[既存のデータベースの設定\]](#) を選択した場合は、次の作業を行います。
 - a. [\[既存の CMS データベースタイプの選択\]](#) ページで、既存の CMS データベースのデータベースタイプを選択します。
 - b. [\[既存の監査データベースタイプの選択\]](#) ページで、既存の監査データベースのデータベースタイプを選択します。

監査機能を使用しない場合は、[\[監査データベースなし\]](#) を選択します。
3. [\[Java Web アプリケーションサーバの選択\]](#) ページで、BI プラットフォーム Web アプリケーションをホストするオプションを選択します。

デフォルトの *Tomcat Java Web アプリケーションサーバ* をインストールし、*Web アプリケーション* を自動的にデプロイします

BI プラットフォームと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。BI プラットフォーム Web アプリケーションは Tomcat に自動的にデプロイされます。

① 注記

バンドルされたソフトウェアのサードパーティパッチまたはアップデートのインストールは、サポートされていません。詳細については、[BI プラットフォームにバンドルされたサードパーティソリューションへのパッチ提供 \[100 ページ\]](#)を参照してください。

インストール後に、*Web アプリケーション* を手動でサポートされている *Java Web アプリケーションサーバ* にデプロイします

既存のサポートされている Java Web アプリケーションサーバを使用している場合は、このオプションを選択してから WDeploy ツールを使用して (インストール後に) Web アプリケーションを Java Web アプリケーションサーバにデプロイします。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイド* を参照してください。

① 注記

BI プラットフォームでは、インストールプログラムの実行時に、バンドルされた Tomcat Web アプリケーションサーバ以外の Web アプリケーションサーバへの Web アプリケーションの自動デプロイメントはサポートされていません。

Web アプリケーションコンテナサーバをインストールし、Web アプリケーションを自動でデプロイします

BI プラットフォーム Web アプリケーションのホストに Java アプリケーションサーバを使用しない場合は、このオプションを選択し、Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) でホストすることができます。

お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。

① 注記

本稼働環境を設定する場合には、Web アプリケーションサーバを BI プラットフォームサーバから独立したシステムでホストすることをお勧めします。本稼働環境で BI プラットフォームサーバと Web アプリケーションサーバを同じホストで実行すると、パフォーマンスが低下する可能性があります。

4. バージョン管理の選択ページで、Subversion バージョン管理システムをインストールおよび設定するかどうかを決定します。

Subversion を設定およびインストールします

Subversion バージョン管理システムをインストールして設定します。

この時点ではバージョン管理システムを設定しない

既存のサポートされているバージョン管理システムを使用している場合は、インストールの完了後、セントラル管理コンソール (CMC) で手動で設定する必要があります。詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“バージョン管理”および“プロモーションマネジメント”の節を参照してください。

BI プラットフォームでは、バージョン管理システムの CMS リポジトリに存在する BI リソースの異なるバージョンを維持し、必要なときに CMC を使用して、より簡単に以前の設定に戻すことができます。

5. *Server Intelligence Agent (SIA)* の設定ページで、SIA ノードのデフォルトの名前およびポート番号を確認します。

ノード名 これは、セントラル設定マネージャ (CCM) に表示される名前です。CMS サーバは、1 つの SIA を使って管理できます。

この名前は、英語文字 (A ~ Z、a ~ z および 0 ~ 9) である必要があり、スペースや句読点は使用できません。アンダースコア (“_”) は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。

SIA ポート このポートは、CMS からの受信接続をリスニングするために SIA で使用されます。SIA がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

ポート 6410 は、BI プラットフォーム SIA で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

① 注記

インストールプロセスで、以下の文字はパスワード作成に使用できません。

1. **BI 管理者:** “ `、スペースタブ、および後続バックスペース (¥) は使用できません。
2. **クラスタキー:** “ `、\$、#、およびスペースタブは使用できません。
3. **SQL Anywhere:** “&`、<>、@、¥、|、()、[]、{}、^、\$、*、+、?、.、_、:、およびスペースタブは使用できません。
4. **サブバージョン:** |、&、および “ は使用できません。

6. [\[Central Management Server \(CMS\) の設定\]](#) ページで、CMS ポート番号のデフォルト値を確認します。
このポートを使って、CMS は、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ (該当する場合)、他の CMS ノード (該当する場合) およびサーバからの受信接続をリスニングします。CMS がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
ポート 6400 は、BI プラットフォーム CMS で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。
7. [\[CMS アカウントの設定\]](#) ページで、CMS 管理者アカウントのパスワードと CMS クラスタキーを入力して確認します。
CMS 管理者は、BI プラットフォーム認証システムのスーパーユーザアカウントで、サーバ設定の管理にのみ使用されます。これは、オペレーティングシステムやシングルサインオン認証システムの一部ではありません。
クラスタを使用する場合により高いレベルのセキュリティを提供するために、一部の CMS コンポーネント間の通信は暗号化されます。

① 注記

フルインストール時に入力する管理者パスワードには、文字クラスとして大文字と小文字の少なくとも 2 つが必ず含まれている必要があります。CMS 管理者パスワードでの特殊文字の使用が、4.2 SP4 からは許可されています。4.2 SP6 から、追加の特殊文字が既存の 4.2 SP4 での許可される特殊文字の一覧に追加されます。

8. CMS システムデータベースを設定します。
 - a. [\[Sybase SQL Anywhere データベースの設定およびインストール\]](#) を選択した場合は、[\[Sybase SQL Anywhere の設定\]](#) ページでアカウントとポート情報を入力します。
Sybase SQL Anywhere が受信データベースクエリをリスニングするポート番号を入力します。データベースがこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。また、管理者アカウントパスワードも入力します。
 - b. [\[既存のデータベースの設定\]](#) を選択した場合は、[\[CMS リポジトリデータベースの設定 - <データベースタイプ>\]](#) ページで CMS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。
 - c. [\[既存のデータベースの設定\]](#) を選択していて、監査を使用する場合は、[\[監査データベースの設定\]](#) ページで ADS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。
9. [\[デフォルトの Tomcat Java Web アプリケーションサーバをインストールし、Web アプリケーションを自動でデプロイします\]](#) を選択した場合は、[\[Tomcat の設定\]](#) ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
接続ポート	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
シャットダウンポート	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
リダイレクトポート	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

Tomcat では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

10. [\[HTTP リスニングポートの設定\]](#) ページで、WACS が Web クライアントからの受信接続をリスニングする HTTP リスニングポートの番号を確認します。
WACS では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
11. [\[Subversion を設定およびインストールします\]](#) を選択した場合は、[\[Subversion の設定\]](#) ページでポート番号を確認し、Subversion のパスワード (ユーザアカウントは LCM) を入力します。
12. [\[Solution Manager Diagnostics \(SMD\) エージェントの接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の SMD エージェントと統合するかどうかを指定します。

オプション	説明
SMD エージェントへの接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のデプロイメントと統合できます。 このオプションを選択した場合、SMD エージェントのホスト名およびポート番号を次の SMD エージェントへの接続の設定 ページに入力します。
SMD エージェントへの接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、SMD エージェントを CMC プレースホルダ 画面で設定できます。

① 注記

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用するには、SAP Host Agent と SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SAP Host Agent をインストールする方法については、[SAP システムランズケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[22 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SAP Host Agent をインストールする方法については、[インストール後のシステムランズケープディレクトリ \(SLD\) データサプライヤ \(DS\) の設定 \[95 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[23 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[95 ページ\]](#)を参照してください。

13. [\[Introscope Enterprise Manager への接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

① 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

オプション	説明
Introscope Enterprise Manager への接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。

オプション	説明
	このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を次の Introscope Enterprise Manager への接続の設定 ページに入力します。
Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、Introscope Enterprise Manager を CMC プレースホルダ 画面で設定できます。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。

インストール完了時 [\[68 ページ\]](#)に進みます。

5.4.1.2 カスタム/拡張インストール

BI プラットフォームの [\[カスタム/拡張\]](#) インストールでは、次の手順を実行します。

1. [\[機能の選択\]](#) ページで、インストールする機能をリストから選択します。

機能は、以下の見出しで分類されています。

- [Web Tier](#)
Web Tier コンポーネントには、BI ラウンチパッドおよびセントラル管理コンソール (CMC) など、エンドユーザと管理者が BI コンテンツおよび BI プラットフォームのインストールを操作できる Web アプリケーションが含まれています。
BI プラットフォームと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。
サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。
- [サーバ](#)
サーバ機能には、Business Intelligence プラットフォームサーバ (Processing Server および Scheduling Server など)、主要なシステムコンポーネント (CMS、Event Server、バンドルされたデータベース、バージョン管理システムなど)、および BI プラットフォームを組織の既存のネットワークインフラストラクチャ (SAP BW、その他の Enterprise Resource Planning (ERP) システムなど) に統合するサーバが含まれます。

① 注記

SAP BW 認証を使用する場合は、[\[BW パブリッシャサーバ\]](#) 機能が [\[インテグレーションサーバ\]](#) 機能の一覧で選択されていることを確認します。

① 注記

サンプルユニバース `efashion.unv` および `efashion.unx` は、Web Intelligence サーバのインストール後に CMS リポジトリの `/Universes/Samples/` フォルダで利用できます。つまり、CMC にログインしてフォルダ構造 `/Universes/Samples/` に従ってサンプルユニバースにアクセスすることができます。

- **管理者ツール**

管理者ツール機能を使って、管理者はインストールを維持できます。たとえば、アップグレードマネジメントツールを使用すると、異なるバージョンの BI プラットフォーム間のアップグレード時に BI コンテンツを移行できます。

- **開発者ツール**

BI プラットフォーム .NET ソフトウェア開発キット (SDK) を使用して独自のアプリケーションを開発する場合は、**[開発者ツール]** 機能をインストールします。

① 注記

[[SPL ウェアハウス](#)] を選択して、SQL Anywhere データベース、サンプルデータセット、および `SPL_Warehouse.unx` サンプルユニバースをインストールします。データベースの実行に必要なインストール後の手順を実行するには、[SPL_Warehouse.unx サンプルユニバースの実行 \[103 ページ\]](#) を参照してください。

- **データベースアクセス**

組織の既存のデータベース内のデータにアクセスし、データの分析やレポートを行うには、適切な **[データベースアクセス]** 機能を選択します。組織で特定のデータベースを使用していない場合は、それを選択解除できます。

① 注記

- PeopleSoft Enterprise、JD Edwards EnterpriseOne、Siebel、または Oracle EBS Enterprise Resource Planning (ERP) システムの統合は、デフォルトでは選択されていません。ERP シングルサインオン認証、またはその他の ERP 機能を使用する場合は、適切な ERP 機能が **[データアクセス]** 機能の一覧で選択されていることを確認します。
- SAP、SAP BW、または SAP R3 システムの統合を使用する場合は、**[SAPBW]** 機能および **[SAP]** 機能が **[データアクセス]** 機能の一覧で選択されていることを確認します。

- **サンプル**

サンプル機能によって、サンプルレポート、テンプレート、レポーティングデータベースがインストールされます。サンプルが必要ない場合は、選択解除できます。

2. **[新規または拡張インストールの選択]** ページで、実行するインストールのタイプを選択します。

オプション	説明
新しい SAP BusinessObjects BI プラットフォームのデプロイメントの開始	スタンドアロン BI プラットフォームサーバをインストールするか、クラスタの最初のサーバをインストールする場合に選択します。
既存の SAP BusinessObjects BI プラットフォームデプロイメントを拡張する	CMS がすでに存在し、クラスタの一部として新しいサーバノードを作成する場合に選択します。

最後のページで **[新しい SAP BusinessObjects BI プラットフォームのデプロイメントを開始する]** を選択した場合は、カスタム (新規) インストールに進みます。

最後のページで **[既存の SAP BusinessObjects BI プラットフォームデプロイメントを拡張する]** を選択した場合は、カスタム (拡張) インストールに進みます。

5.4.1.2.1 カスタム (新規) インストール

[カスタム/拡張] インストールで [新しい SAP BusinessObjects BI プラットフォームデプロイメントを開始する] オプションを選択した場合は、次の作業を行います。

1. [機能の選択] ページで [Sybase SQL Anywhere データベース] 機能を選択解除した場合、次の作業を行います。
 - a. [既存の CMS データベースタイプの選択] ページで、CMS データベースに使用するデータベースタイプを選択します。
 - b. [既存の監査データベースタイプの選択] ページで、監査データベースに使用するデータベースタイプを選択します。
監査機能を使用しない場合は、[監査データベースなし] を選択します。
2. *Server Intelligence Agent (SIA) の設定* ページで、SIA ノードのデフォルトの名前およびポート番号を確認します。

オプション	説明
-------	----

ノード名	これは、セントラル設定マネージャ (CCM) に表示される名前です。CMS サーバは、1 つの SIA を使って管理できます。
-------------	---

この名前は、英数字 (A ~ Z、a ~ z および 0 ~ 9) である必要があり、スペースや句読点は使用できません。アンダースコア ("_") は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。

SIA ポート	このポートは、CMS からの受信接続をリスニングするために SIA で使用されます。SIA がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
----------------	--

ポート 6410 は、BI プラットフォーム SIA で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

① 注記

インストールプロセスで、以下の文字はパスワード作成に使用できません。

1. **BI 管理者:** ``、スペースタブ、および後続バックスペース (¥) は使用できません。
2. **クラスタキー:** "、\$、#、およびスペースタブは使用できません。
3. **SQL Anywhere:** "&"、<>、@、¥、|、()、[]、{}、^、\$、*、+、?、.、_、:、およびスペースタブは使用できません。
4. **サブバージョン:** |、&、および " は使用できません。

3. [Central Management Server (CMS) の設定] ページで、CMS ポート番号のデフォルト値を確認します。
このポートを使って、CMS は、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ (該当する場合)、他の CMS ノード (該当する場合) およびサーバからの受信接続をリスニングします。CMS がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
ポート 6400 は、BI プラットフォーム CMS で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。
4. [CMS アカウントの設定] ページで、CMS 管理者アカウントのパスワードと CMS クラスタキーを入力して確認します。
CMS 管理者は、BI プラットフォーム認証システムのスーパーユーザアカウントで、SAP BusinessObjects サーバ設定の管理にのみ使用されます。これは、オペレーティングシステムやシングルサインオン認証システムの一部ではありません。
クラスタを使用する場合により高いレベルのセキュリティを提供するために、一部の CMS コンポーネント間の通信は暗号化されます。

① 注記

フルインストール時に入力する管理者パスワードには、文字クラスとして大文字と小文字の少なくとも 2 つが必ず含まれている必要があります。CMS 管理者パスワードでの特殊文字の使用が、4.2 SP4 からは許可されています。4.2 SP6 から、追加の特殊文字が既存の 4.2 SP4 での許可される特殊文字の一覧に追加されます。

5. CMS システムデータベースを設定します。

- a. [機能の選択] ページで [Sybase SQL Anywhere データベース] 機能を選択した場合は、[Sybase SQL Anywhere の設定] ページでアカウントとポート情報を入力します。

Sybase SQL Anywhere が受信データベースクエリをリスニングするポート番号を入力します。データベースがこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。また、データベースサーバ名と管理者アカウントのパスワードも入力し、確認してください。

- b. [機能の選択] ページで [Sybase SQL Anywhere データベース] 機能を選択解除した場合は、[CMS リポジトリデータベースの設定 - <データベースタイプ>] ページで CMS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。

- c. [機能の選択] ページで [Sybase SQL Anywhere データベース] 機能を選択解除していて、監査を使用する場合は、[監査データベースの設定] ページで ADS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。

6. [サーバの自動開始の選択] ページで、インストール完了直後にサーバを起動するかどうかを指定します。

[いいえ] を選択すると、インストール完了後にセントラル設定マネージャ (CCM) を使用して手動でサーバを起動する必要があります。

7. [機能の選択] ページで [Tomcat] 機能を選択した場合は、[Tomcat の設定] ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
接続ポート	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
シャットダウンポート	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
リダイレクトポート	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

Tomcat では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

8. 機能の選択ページで Web アプリケーションコンテナサーバまたは RESTful Web サービス機能を選択した場合、HTTP リスニングポートの設定ページで HTTP リスニングポート番号を確認します。

WACS では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

9. [機能の選択] ページで [Subversion] 機能を選択した場合は、[Subversion の設定] ページでポート番号を確認し、Subversion のパスワード (ユーザアカウントは LCM) を入力します。

10. [Solution Manager Diagnostics (SMD) エージェントの接続の選択] ページで、BI プラットフォームを既存の SMD エージェントと統合するかどうかを指定します。

オプション	説明
SMD エージェントへの接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のデプロイメントと統合できます。

オプション	説明
	このオプションを選択した場合、SMD エージェントのホスト名およびポート番号を次の SMD エージェントへの接続の設定 ページに入力します。
SMD エージェントへの接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、SMD エージェントを CMC プレースホルダ 画面で設定できます。

① 注記

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用するには、SAP Host Agent と SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SAP Host Agent をインストールする方法については、[SAP システムランズケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[22 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SAP Host Agent をインストールする方法については、[インストール後のシステムランズケープディレクトリ \(SLD\) データサプライヤ \(DS\) の設定 \[95 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[23 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[95 ページ\]](#)を参照してください。

11. [\[Introscope Enterprise Manager への接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

① 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

オプション	説明
Introscope Enterprise Manager への接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。 このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を次の Introscope Enterprise Manager への接続の設定 ページに入力します。
Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、Introscope Enterprise Manager を CMC プレースホルダ 画面で設定できます。

[\[インストールの開始\]](#) ページが表示されます。インストールを開始します。

[インストール完了時 \[68 ページ\]](#)に進みます。

5.4.1.2.2 カスタム (拡張) インストール

[\[カスタム/拡張\]](#) インストールで [\[既存の SAP BusinessObjects BI プラットフォームデプロイメントを拡張する\]](#) を選択した場合は、次の作業を行います。

1. [\[既存の CMS データベースタイプの選択\]](#) ページで、既存のリモート CMS データベースのデータベースタイプを選択します。
2. [\[Server Intelligence Agent \(SIA\) の設定\]](#) ページで、新しい SIA ノードのデフォルトの名前とポート番号を確認します。

オプション	説明
-------	----

ノード名	これは、セントラル設定マネージャ (CCM) に表示される名前です。CMS サーバは、1 つの SIA を使って管理できます。
-------------	---

この名前は、英数字 (A～Z、a～z および 0～9) である必要があり、スペースや句読点は使用できません。アンダースコア (" ") は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。

SIA ポート	このポートは、CMS からの受信接続をリスニングするために SIA で使用されます。SIA がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
----------------	--

ポート 6410 は、BI プラットフォーム SIA で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

3. [\[既存の CMS デプロイメント情報\]](#) ページで、既存のリモート CMS の接続情報を、管理者パスワードを含めて入力します。
4. [\[CMS アカунツの設定\]](#) ページで、新しい CMS の CMS クラスターキーを入力して確認します。
CMS 管理者は、BI プラットフォーム認証システムのスーパーユーザアカウントで、SAP BusinessObjects サーバ設定の管理にのみ使用されます。これは、オペレーティングシステムやシングルサインオン認証システムの一部ではありません。
クラスターを使用する場合により高いレベルのセキュリティを提供するために、一部の CMS コンポーネント間の通信は暗号化されます。
5. [\[Central Management Server \(CMS\) の設定\]](#) ページで、CMS ポート番号のデフォルト値を確認します。
このポートを使って、CMS は、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ (該当する場合)、他の CMS ノード (該当する場合) およびサーバからの受信接続をリスニングします。CMS がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
ポート 6400 は、BI プラットフォーム CMS で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。
6. [\[CMS リポヰトリデータベースの設定 - <データベースタイプ>\]](#) ページで、CMS システムデータベースの接続詳細情報を入力します。
接続を試行している既存の CMS 上で BI プラットフォームにバンドルされている Sybase SQL Anywhere データベースを使用している場合は、既存の CMS システムデータベースのシステム ODBC DSN 接続を入力します。
以前インストールした別のデータベースを使用する場合は、CMS の接続認証情報を入力してデータベースに接続します。
7. [\[サーバの自動開始の選択\]](#) ページで、インストール完了直後にサーバを起動するかどうかを指定します。
[\[いいえ\]](#) を選択すると、インストール完了後にセントラル設定マネージャ (CCM) を使用して手動でサーバを起動する必要があります。
8. [\[Tomcat 7.0\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Tomcat の設定\]](#) ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
-------	----

接続ポート	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
--------------	--

シャットダウンポート	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
-------------------	----------------------------------

オプション	説明
リダイレクトポート	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

9. [\[HTTP リスニングポートの設定\]](#) ページで、WACS が Web クライアントからの受信接続をリスニングする HTTP リスニングポートの番号を確認します。
WACS では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
10. [\[Subversion\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Subversion の設定\]](#) ページでポート番号を確認し、Subversion のパスワード (ユーザアカウントは LCM) を入力します。
11. [\[Solution Manager Diagnostics \(SMD\) エージェントの接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の SMD エージェントと統合するかどうかを指定します。

オプション	説明
SMD エージェントへの接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のデプロイメントと統合できます。 このオプションを選択した場合、SMD エージェントのホスト名およびポート番号を次の SMD エージェントへの接続の設定 ページに入力します。
SMD エージェントへの接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、SMD エージェントを CMC ブレースホルダ 画面で設定できます。

① 注記

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用するには、SAP Host Agent と SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SAP Host Agent をインストールする方法については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[22 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SAP Host Agent をインストールする方法については、[インストール後のシステムランドスケープディレクトリ \(SLD\) データサプライヤ \(DS\) の設定 \[95 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[23 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[95 ページ\]](#)を参照してください。

12. [\[Introscope Enterprise Manager への接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

① 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

オプション	説明
Introscope Enterprise Manager への接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。

オプション	説明
	このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を次の Introscope Enterprise Manager への接続の設定 ページに入力します。
Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、Introscope Enterprise Manager を CMC プレースホルダ 画面で設定できます。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。

① 注記

拡張インストールを実行している場合は、インストールプロセスの一環として既存の CMS が自動的に再起動されます。

インストール完了時 [68 ページ]に進みます。

5.4.1.3 Web Tier インストール

Web Tier には、BI ラウンチパッドやセントラル管理コンソール (CMC) などの Web アプリケーションが含まれています。[Web Tier](#) インストールオプションを使用すると、BI プラットフォーム Web アプリケーションが Web アプリケーションサーバにインストールされます。

① 注記

- Web Tier のインストール中に、BI プラットフォーム管理者として、既存の Central Management Server (CMS) にログオンするよう求められます。Web Tier インストールを実行するには、リモートまたは同じマシンで実行中の CMS が必要です。
- サードパーティ認証、または Siebel Enterprise、JD Edwards EnterpriseOne、Oracle E-Business Suite などの企業資源計画 (ERP) システムの統合で Web Tier を使用する計画がある場合は、[カスタム/拡張](#)インストールを実行して必要なコンポーネントを選択する必要があります。
たとえば、ERP をサポートする Web Tier インストールを実行するには、[カスタム/拡張機能](#)リストから次のコンポーネントを選択します。

- ▶ [インスタンス](#) ▶ [WebTier](#) ▶ [Java Web アプリケーション](#) ▶
- ▶ [インスタンス](#) ▶ [WebTier](#) ▶ [Tomcat 8.0](#) ▶ (Web アプリケーションサーバがまだない場合)
- ▶ [インスタンス](#) ▶ [データベースアクセス](#) ▶ (ERP システムの名前を選択)

BI プラットフォームと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、インストールプログラムにより Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。

サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。このオプションでは、Web アプリケーションは Web アプリケーションサーバにデプロイされません。Web Tier インストール後に Web アプリケーションサーバに Web アプリケーションをデプロイするには、WDeploy ツールを使用します。WDeploy ツールの使用の詳細については、[SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイド](#)を参照してください。

BI プラットフォームの [Web Tier] インストールでは、次の手順を実行します。

1. 機能の選択ページで、**インスタンス** ▶ **WebTier** ▶ からインストールする機能を選択します。

オプション	説明
Java Web アプリケーション	BI プラットフォーム Web アプリケーションをコンピュータにインストールします。
Tomcat 8.0	バンドルされている Apache Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールして設定します。

2. [Tomcat 8.0] 機能を選択した場合は、[Tomcat の設定] ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
接続ポート	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
シャットダウンポート	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
リダイレクトポート	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

3. [既存の CMS デプロイメント情報] ページで、既存の CMS にログインします。
4. [Introscope Enterprise Manager への接続の選択] ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

① 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[23 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[95 ページ\]](#)を参照してください。

オプション	説明
Introscope Enterprise Manager への接続を設定します	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。 このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を次の Introscope Enterprise Manager への接続の設定 ページに入力します。
Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません	インストールプログラムの完了後に、Introscope Enterprise Manager を CMC ブレースホルダ 画面で設定できます。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。

[インストール完了時 \[68 ページ\]](#)に進みます。

5.4.2 インストール完了時

インストールが完了したら、[インストール後の手順] 画面の情報を確認します。バンドルされている Tomcat Web アプリケーションサーバを使用していない場合は、WDeploy Web アプリケーションデプロイメントツールを使用して Web アプリケーションをデプロイする必要があります。

① 注記

インストール時にファイルがロックされている場合、インストール後にサーバを再起動するように促される可能性があります。すぐに再起動する、または後で再起動することができます。ただし、後で再起動することを選択した場合、システムは、再起動するまでサポートされない状態となる可能性があります。

5.5 サイレントインストールを実行する

インストールウィザードの各オプションは、コマンドラインで起動した応答ファイルから読み取ることができます。これを、サイレントインストールといいます。

① 注記

BI プラットフォームを変更または削除するためにサイレントインストールを使用することはできません。

応答ファイルとは、インストールオプションパラメータをキー値形式で含むテキストファイルです。応答ファイルを使用してインストールオプションを指定する場合、インストールプログラムはコマンドラインから `-r <RESPONSE_FILE>` パラメータを使って実行されます。ここで、`<RESPONSE_FILE>` は応答ファイルの名前です。

応答ファイルには、インストールオプションが各行に1つ指定されている複数のインストールオプションが含まれます。次の例では、応答ファイルがパラメータとして指定されています。

ルートユーザ権限でコマンド `./setup.sh [...] -InstallDir <InstallDir_Path> -r $HOME/response.ini [...]` を実行して応答ファイルを作成します。

たとえば、インストールオプション `cmsport=6401` を応答ファイルの行に指定すると、CMS ポート番号がデフォルト値の 6400 の代わりに 6401 に設定されます。

応答ファイルに `cmsport` パラメータを指定する以下の例では、省略記号 (`[...]`) で表示されているところは、通常他のインストールオプションが存在していることを示しています。

```
[...]  
cmsport=6401  
[...]
```

インストールオプションの完全な一覧については、[インストールオプションのパラメータ \[72 ページ\]](#)を参照してください。応答ファイルの例については、[応答ファイルの例 \[80 ページ\]](#)を参照してください。

5.5.1 コマンドラインスイッチパラメータ

以下の表は、サイレントインストールを実行するためにコマンドラインでインストールプログラムに指定することができるスイッチパラメータです。[メンテナンス](#)ウィザードの各オプションは、コマンドラインで起動した応答ファイルから読み取ることができます。これをサイレントインストールと呼びます。コマンドラインでパラメータを指定すると、インストール中に情報を入力するためのプロンプトは表示されません。

インストールプログラムのコマンドラインスイッチパラメータ

スイッチパラメータ	説明	例
-w <FILENAME>	応答ファイルを <FILENAME> に書き込みます。これには、インストールウィザードで選択されたオプションを含みます。	<pre>./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -w "\$HOME/response.ini"</pre>
-r <FILENAME>	<FILENAME> というファイル名の応答ファイルからインストールオプションを読み込みます。	<pre>./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -r "\$HOME/response.ini"</pre>
-i <product key name>	このパラメータは、メンテナンス操作の実行に使用される製品のキー名です。	<pre>"setup.exe -i response.ini -i bipclient"</pre>

5.5.1.1 応答ファイルを使用する

応答ファイルのインストールは、コマンドラインで開始されますが、インストールオプションは、オプションがキー値形式で保存された ASCII テキストファイルから読み込まれます。これは、クラスタを設定したり、標準化されたオプションで開発環境またはテスト環境を構築する場合に有用です。

オプションがコマンドラインと応答ファイルの両方で指定された場合、コマンドラインオプションが応答ファイルオプションより優先されます。これにより、管理者は必要に応じて、応答ファイル内のオプションを上書きすることができます。インストールオプションの優先順位には 3 段階あります。

1. コマンドラインで指定されるインストールオプションは最優先され、応答ファイルおよびデフォルト値を常に上書きします。
2. 応答ファイルで指定されるインストールオプションは、コマンドラインで指定されない場合に使用され、デフォルト値を上書きします。
3. インストールオプションのデフォルト値は、コマンドラインでも応答ファイルでも指定されない場合に使用されます。

たとえば、次のコマンドではインストールオプションを応答ファイル `$HOME/response.ini` から読み込みます。

```
./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -r $HOME/response.ini
```

予期せぬ条件が発生した場合、エラーメッセージがインストールログファイルに書き込まれ、インストールプログラムは終了します。インストールのアクティビティ、警告、およびエラーは、以下のフォルダ内のインストールログファイルに書き込まれます。

<BIP_INSTALL_DIR>/InstallData/logs/<DATEandTIME>/setupengine.log

インストールプログラムの終了時まで、<BIP_INSTALL_DIR> フォルダが作成されない場合は、システムの <TEMP> 環境変数で指定された一時フォルダ内にある `install.log` を確認してください。

5.5.1.1.1 応答ファイルを読み込む

応答ファイルとは、インストールオプションパラメータをキー値形式で含むテキストファイルです。応答ファイルを使用するには、`-InstallDir <InstallDir_Path> -r <RESPONSE_FILE>` パラメータを使用してイン

ストールプログラムを実行します。インストールプログラムは、すべてのインストールオプションを応答ファイルから読み込むため、その後の入力はありません。

たとえば、次のコマンドはインストールオプションを応答ファイル `$HOME/response.ini` から読み込みます。

-r <RESPONSE FILE NAME>: このパラメータを指定すると、<RESPONSE FILENAME> という名前の応答ファイルからインストールオプションが読み込まれます。

-i <product key name>: このパラメータは、メンテナンス操作の実行に使用される製品のキー名です。

```
./setup.sh -r "$HOME/ response.ini"
```

```
./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -r $HOME/response.ini
```

SAP BusinessObjects Explorer アドオンの応答ファイルは `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -r $HOME/response.ini` にあります。

5.5.1.2 応答ファイルを記述する

応答ファイルとは、インストールオプションパラメータをキー値形式で含むテキストファイルです。応答ファイルを作成するには、`-InstallDir <InstallDir_Path> -w <RESPONSE_FILE>` パラメータを使用してインストールプログラムを実行し、インストールウィザードで目的のインストールオプションを選択します。ウィザードが完了すると、インストールプログラムが終了し、応答ファイルが作成されます。これで、今後のインストールで応答ファイルを使用できるようになります。

-i <product key name>: このパラメータは、メンテナンス操作の実行に使用される製品のキー名です。

たとえば、次のコマンドでは応答ファイル `$HOME/response.ini` を作成します。

```
./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -w $HOME/response.ini
```

さまざまなクライアントの応答ファイル

クライアント	応答ファイル
SAP Crystal Reports	<pre>./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -w \$HOME/ response.ini</pre>
SAP Crystal Reports for Enterprise	<pre>./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -w \$HOME/ response.ini</pre>
SAP BusinessObjects Explorer	<pre>./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -w \$HOME/ response.ini</pre>
SAP Lumira	<pre>./SAPLumiraSetup.sh -w \$HOME/ response.ini</pre>

SAP BusinessObjects Web Intelligence リッチクライアント スクリプトの場合:

```
./setup.sh -InstallDir
<InstallDir_Path> -w $HOME/
response.ini
```

一度作成すると、応答ファイルはテキストエディタで更新することができます。

① 注記

GUI インストールプログラムで応答ファイルを作成する場合、GUI を介して入力したライセンスキーおよび一部のパスワードはプレーンテキスト形式の応答ファイルには書き込まれません。サイレントインストールを実行する前に、アスタリスク (*****) の部分を実際のパスワードに置き換える必要があります。

5.5.2 インストールオプションのパラメータ

以下の表は、応答ファイルでインストールオプションを選択するのに使用できるパラメータを示しています。

インストールオプションのパラメータ

パラメータ	説明
chooseintroscopeintegration=<VALUE>	Introscope サポートを有効にするかどうかを決定します。Introscope 統合を有効化するには、<VALUE> を integrate に設定します。Introscope 統合を無効化するには、<VALUE> を nointegrate に設定します。
choosesmdintegration=<VALUE>	SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) エージェントサポートを有効にするかどうかを決定します。SMD 統合を有効化するには、<VALUE> を integrate に設定します。SMD 統合を無効化するには、<VALUE> を nointegrate に設定します。
clusterkey=<KEY>	暗号化された安全な CMS クラスタ通信に使用される暗号化キー。<KEY> にキー文字列を代入します。
cmspassword=<PASSWORD>	CMS 管理者アカウントで使用するパスワード。<PASSWORD> にパスワードを代入します。
cmsport=<PORT>	受信接続用に CMS で使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にポート番号を代入します。デフォルト値は 6400 です。
enableservers=<SWITCH>	インストールの完了後に、自動的に CMS サーバを起動するかどうかを決定します。インストール後に自動的にサーバを有効化するには、<SWITCH> に 1 を設定します。サーバを有効化せず、後で手動で実行する必要があるようにするには、<SWITCH> に 0 を設定します。

パラメータ	説明
installdir=<PATH>	<p>セットアッププログラムがプログラムをインストールするインストール先フォルダです。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。</p> <ul style="list-style-type: none"> インストール先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。 出力先フォルダが、インストールプログラムが展開されているのと同じフォルダではないことを確認します (現在の作業ディレクトリからインストールプログラムを実行中に、現在の作業ディレクトリにインストールしないでください)。 </div>
installtype=<VALUE>	<p>デフォルト設定、カスタム設定 (ユーザがコンポーネントを選択可能)、または Web Tier コンポーネントのインストールに使用される設定 (Web アプリケーションサーバへのインストール時) に基づいて、インストールプログラムがインストール可能なコンポーネントを選択する必要があるかどうかを決定します。デフォルトコンポーネントをインストールするには、<VALUE> を default に設定します。コンポーネントのカスタム選択をインストールするには、<VALUE> を custom に設定します。Web Tier コンポーネントをインストールするには、<VALUE> を webtier に設定します。</p>
introscope_ent_host=<HOSTNAME>	<p>Introscope サーバのホスト名。<HOSTNAME> に Introscope サーバのホスト名を代入します。</p>
introscope_ent_port=<PORT>	<p>Introscope サーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> に Introscope サーバのポート番号を代入します。</p>
lcmname=LCM_Repository	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバのホスト名。</p> <div> <p>⚠ 警告</p> <p>この値は変更しないでください。</p> </div>
lcmpassword=<PASSWORD>	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバにアクセスするためのユーザパスワード。<PASSWORD> にパスワードを代入します。</p>
lcmport=<PORT>	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にポート番号を代入します。</p>
lcmusername=LCM	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバにアクセスするためのユーザ名。</p> <div> <p>⚠ 警告</p> <p>この値は変更しないでください。</p> </div>
neworexistinglcm=<VALUE>	<p>このインストールが、未使用のサーバへの LCM なのか、CMS クラスタの作成に使用される拡張インストールなのかを決定します。新しいインストールを実行するには、<VALUE> を new に設定します。拡張インストールを実行するには、<VALUE> を expand に設定します。</p>
productkey=<KEY>	<p>ソフトウェア購入時に発行された製品のライセンスキー。<KEY> に XXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXX という形式の製品キーを代入します。</p>

パラメータ	説明
registeredcompany=<NAME>	ソフトウェアの登録者となる会社の名前。<NAME> に名前を代入します。
registereduser=<NAME>	ソフトウェアの登録者となるユーザの名前。<NAME> に名前を代入します。
selectedlanguagepacks=<CODE>	<p>ユーザおよび管理者が、サポートされている言語で BI プラットフォームと対話するために言語サポートをインストールします。1つ以上の言語パックをインストールする場合、各コードをスペースなしのセミコロンで区切り、引用符で囲んで指定したリストを使用してください。以下の例では、英語、日本語、簡体字中国語、およびタイ語の言語サポートがインストールされます。</p> <pre>SelectedLanguagePacks="en;ja;zh_cn;th"</pre> <p><CODE> に以下の言語コードを代入します。</p> <ul style="list-style-type: none"> アラビア語: ar チェコ語: cs デンマーク語: da オランダ語: nl 英語: en フィンランド語: fi フランス語: fr ドイツ語: de ヘブライ語: iw ハンガリー語: hu イタリア語: it 日本語: ja カザフ語: kk 韓国語: ko ノルウェー語 (ブークモール): ポーランド語: pl ポルトガル語: pt ルーマニア語: ro ロシア語: ru 簡体字中国語: zh_cn スロバキア語: sk スロベニア語: sl スペイン語: es スウェーデン語: sv タイ語: th 繁体字中国語: zh_tw トルコ語: tr ウクライナ語: uk
selectintegrateddatabase=<VALUE>	<p>バンドルされているデータベースをインストールするかどうかを指定します。バンドルされているデータベースをインストールするには、<VALUE> を 1 に設定します。</p> <p>バンドルされているデータベースは Sybase SQL Anywhere です。</p>

setupuilanguage=<CODE>

インストール中に使用するインストールプログラムの言語を指定します。
<CODE> に以下の言語コードを代入します。

- チェコ語: cs
 - デンマーク語: da
 - オランダ語: nl
 - 英語: en
 - フィンランド語: fi
 - フランス語: fr
 - ドイツ語: de
 - ハンガリー語: hu
 - イタリア語: it
 - 日本語: ja
 - 韓国語: ko
 - ノルウェー語 (ブークモール):
 - ポーランド語: pl
 - ポルトガル語: pt
 - ルーマニア語: ro
 - ロシア語: ru
 - 簡体字中国語: zh_cn
 - スロバキア語: sk
 - スロベニア語: sl
 - スペイン語: es
 - スウェーデン語: sv
 - タイ語: th
 - 繁体字中国語: zh_tw
 - トルコ語: tr
-

パラメータ	説明
sianame=<NAME>	<p>このインストールで作成される Server Intelligence Agent (SIA) のノード名。<NAME> に SIA 名を代入します。</p> <p>この名前は、英語文字 (A～Z、a～z および 0～9) である必要があり、スペースや句読点は使用できません。アンダースコア ("_") は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>インストールプロセスで、以下の文字はパスワード作成に使用できません。</p> <ol style="list-style-type: none"> BI 管理者: "、スペースタブ、および後続バックスペース (¥) は使用できません。 クラスタキー: "、\$、#、およびスペースタブは使用できません。 SQL Anywhere: "&"、"<"、"@、¥、 、()、[]、{}、^、\$、*、+、?、.、\、;" およびスペースタブは使用できません。 サブバージョン: 、&、および " は使用できません。 </div>
siaport=<PORT>	SIA で使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にポート番号を代入します。
smdagent_host=<HOSTNAME>	SMD エージェントのホスト名。<HOSTNAME> にエージェントのホスト名を代入します。
smdagent_port=<PORT>	SMD エージェントで使用するネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にエージェントのポート番号を代入します。
sqlanywhereadminpassword=<PASSWORD>	Sybase SQL Anywhere dba 管理ユーザアカウントに割り当てる管理パスワード。<PASSWORD> にパスワードを代入します。
sqlanywhereport=<PORT>	BI プラットフォームにバンドルされている Sybase SQL Anywhere データベースサーバで使用するネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にデータベースサーバのポート番号を代入します。
tomcatconnectionport=<PORT>	受信接続用に Tomcat Web アプリケーションサーバで使用するネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にポート番号を代入します。
tomcatredirectport=<PORT>	サーバリクエストのリダイレクトのために Tomcat Web アプリケーションサーバで使用するネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にポート番号を代入します。
tomcatshutdownport=<PORT>	サーバシャットダウンをトリガするために Tomcat Web アプリケーションサーバで使用するネットワーク TCP リスニングポート番号。<PORT> にポート番号を代入します。

パラメータ	説明
webappservertype=<VALUE>	<p>Web アプリケーションのデプロイメントに使用する Web アプリケーションサーバを設定します。デフォルト値は tomcat, manual, and wacs. です。</p> <div> <p>① 注記</p> <ul style="list-style-type: none"> BI プラットフォームと一緒に使用する Web アプリケーションサーバがない場合は、[tomcat] を使用します。 既存のサポートされている Java Web アプリケーションサーバがある場合は、[手動] を使用します。 BI プラットフォーム Web アプリケーションのホストに Java アプリケーションサーバを使用しない場合は、[wacs] を使用します。 </div>
features=<CODE>	<p>インストールするコンポーネントのリストです。installtype=custom または installtype=webtier パラメータの組み合わせで使用されます。このパラメータは手動で変更しないでください。機能は、応答ファイルの作成時にインストールプログラムのユーザインタフェースを使用して選択する必要があります。</p> <p>機能コードの全リストについては、機能コード [77 ページ]を参照してください。</p>

5.5.2.1 機能コード

インストールの機能を選択するには、以下の機能コードを使用します。複数の機能はカンマで区切ります。

- root: すべての機能のインストール
 - WebTier: すべての Web Tier コンポーネントのインストール

① 注記

サードパーティ認証、または SAP BW、Siebel Enterprise、JD Edwards EnterpriseOne、Oracle E-Business Suite などの Enterprise Resource Planning (ERP) システムの統合で Web Tier を使用する場合、[\[カスタム/拡張\]](#) インストールを実行して、必要なコンポーネントを選択する必要があります。

たとえば、SAP BW と SAP 認証サポートを含む Web Tier インストールを実行するには、[\[カスタム/拡張\]](#) 機能一覧で次のコンポーネントを選択します。

- ▶ インスタンス ▶ WebTier ▶ Java Web アプリケーション ▶
- ▶ インスタンス ▶ WebTier ▶ Tomcat 8.0 ▶ (Web アプリケーションサーバがまだない場合)
- ▶ インスタンス ▶ データベースアクセス ▶ SAPBW ▶
- ▶ インスタンス ▶ データベースアクセス ▶ SAP ▶

別の ERP システムのサポートを伴う Web Tier インストールを実行するには、次を選択します。

- ▶ インスタンス ▶ WebTier ▶ Java Web アプリケーション ▶
- ▶ インスタンス ▶ WebTier ▶ Tomcat 8.0 ▶ (Web アプリケーションサーバがまだない場合)
- ▶ インスタンス ▶ データベースアクセス ▶ (ERP システムの名前を選択)

- JavaWebApps1 Java Web アプリケーション
- MobileServices
 - MobileServers
 - MobileAddon (Mobile 用 CMS プラグイン)
- IntegratedTomcat (バンドルされている Tomcat Web アプリケーションサーバのインストール)
- Servers: すべてのサーバコンポーネントのインストール
 - PlatformServers: すべてのプラットフォームサーバのインストール
 - CMS (Central Management Server)
 - FRS (File Repository Servers)
 - PlatformServers.IntegratedDB.SQLAnywhere (バンドルされている Sybase SQL Anywhere データベースサーバのインストール)
 - PlatformServers.EventServer
 - PlatformServers.WebAppContainerService (WACS)
 - AdaptiveProcessingServer (プラットフォーム処理)
 - AdaptiveJobServer (スケジュール)
 - Platform.RestWebService
 - Platform.Action.Framework.backend:(Insight to Action フレームワーク)
 - Subversion (Subversion バージョン管理システム)
 - ConnectionServices: 接続コンポーネントのインストール
 - ConnectionProcService
 - DataFederatorServices: すべてのデータフェデレーションコンポーネントのインストール
 - DataFederatorQueryService
 - AdvancedAnalysisServices: すべての Analysis コンポーネントのインストール
 - MultidimensionalAnalysisServices (MDAS)
 - BExWebApplicationsService
 - CrystalReportsServers: すべての SAP Crystal Reports コンポーネントのインストール
 - CrystalReportsProcServices (SAP Crystal Reports 処理)
 - CrystalReportSchedulingServices
 - CrystalReport2011ProcServices (SAP Crystal Reports 2016 処理)
 - CrystalReport2011SchedulingServices (SAP Crystal Reports 2016 スケジュール)
 - WebIServers: すべての Web Intelligence コンポーネントのインストール
 - WebIProcServer (Web Intelligence 処理)
 - WebISchedulingServices (Web Intelligence スケジュール)
 - XcelsiusServers (ダッシュボード)
 - IntegrationServers: すべての統合コンポーネントのインストール
 - BWPublisherServer (SAP BW 認証および SAP BW Publisher のサポート)
- AdministratorTools: すべての管理者ツールのインストール
 - UpgradeManager (アップグレードマネジメントツール)
 - Automation.Framework
 - PromotionManagementWizard
 - MultitenancyManager

- `DataAccess` すべてのデータベースアクセスコンポーネントのインストール
 - `DataAccess.DataFederator`
 - `DataAccess.HPVertica`
 - `DataAccess.MySQL`
 - `DataAccess.GenericJDBC`
 - `DataAccess.GenericODBC`
 - `DataAccess.GenericODBC.DataDirect7`
 - `DataAccess.GenericODBC.DataDirect7.1`
 - `DataAccess.GenericOLEDB`
 - `DataAccess.OptionalDataDirectODBC7.1`
 - `DataAccess.MaxDB`
 - `DataAccess.SAPHANA`
 - `DataAccess.Salesforce (Salesforce.com)`
 - `DataAccess.Netezza`
 - `DataAccess.Microsoft_AnalyticalServices`
 - `DataAccess.MicrosoftExchange`
 - `DataAccess.MicrosoftOutlook`
 - `DataAccess.Microsoft_SQLServer`
 - `DataAccess.Microsoft_Access`
 - `DataAccess.Ingres`
 - `DataAccess.Greenplum`
 - `DataAccess.PostgreSQL`
 - `DataAccess.Progress`
 - `DataAccess.IBMDB2`
 - `DataAccess.Informix`
 - `DataAccess.Oracle`
 - `DataAccess.Sybase`
 - `DataAccess.Teradata`
 - `DataAccess.SAPBW`
 - `DataAccess.SAPBW64`
 - `DataAccess.SAPERP`
 - `DataAccess.XMLWebServices`
 - `DataAccess.OData`
 - `DataAccess.SAP (SAP BW および R/3 システムのセキュリティとデータアクセス)`
 - `DataAccess.PersonalFiles`
 - `DataAccess.JavaBean`
 - `DataAccess.OpenConnectivity`
 - `DataAccess.HSQLDB`
 - `DataAccess.Derby`
 - `DataAccess.HadoopHive`
 - `DataAccess.Essbase`
 - `DataAccess.Peoplesoft (PeopleSoft Enterprise)`

- `DataAccess.JDEdwards` (JD Edwards EnterpriseOne)
- `DataAccess.Siebel` (Siebel Enterprise サーバ)
- `DataAccess.OracleEBS` (Oracle E-Business Suite)
- `DataAccess.Universe` (SAP BusinessObjects ユニバース)
- `DataAccess.MyCube` (OLAP キューブ)
- `DataAccess.XML`
- `DataAccess.ADO.NET`
- `DataAccess.COMData`
- `DataAccess.DataSet` (データセットコンシューマ)
- `DataAccess.SymantecACT`
- `DataAccess.BDE` (IDAPI データベース DLL)
- `DataAccess.CDO` (Crystal データオブジェクト)
- `DataAccess.FieldDefinitions`
- `DataAccess.FileSystem`
- `DataAccess.NTEventLog`
- `DataAccess.WebActivityLog`
- `DataAccess.Btrieve` (一般的なデータベースドライバ)
- `DataAccess.dBase.DataDirect7.1`
- `DataAccess.UWSC` (ユニバーサル Web サービスコネクタ (UWSC))
- `DataAccess.CMSDBDriver`
- `Samples`: サンプルレポートとデータソースのインストール

5.5.2.2 応答ファイルの例

BI プラットフォームのインストールオプションを含む応答ファイルの例は次のとおりです。

→ ヒント

例となる `response.ini` という応答ファイルも、インストールパッケージに含まれています。

例: `response.ini`

```
# InstallDir requires a trailing slash
InstallDir=/opt/sap/sap_bobj/
ProductKey=XXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXX
SetupUILanguage=en
InstallType=default
TomcatConnectionPort=10001
TomcatRedirectPort=10002
TomcatShutdownPort=10003
CMSPort=10004
CMSPassword=Password1
ClusterKey=Password1
SIAName=sia
```



```

SIAPort=10006
SelectedLanguagePacks=en
RunMonitorTool=0
LCMName=localhost
LCMPort=10004
LCMUserName=Administrator
LCMPassword=Password1
NewOrExistingLCM=new
#Choose to Integrated Introscope: integrate or nointegrate
ChooseIntroscopeIntegration=nointegrate
### Choose to Integrate Solution Manager Diagnostics (SMD) Agent: integrate or
nointegrate
choosesmdintegration=nointegrate
# Change this to "0" if you want to use existing db
SelectIntegratedDatabase=1
SQLAnywhereAdminPassword=Password1
SQLAnywherePort=2638
# Choose your existing database types
UsingCMSDBType=sqlanywhere
UsingAuditDBType=sqlanywhere
# Enter appropriate values for the db type
ExistingCMSDBServer=www
ExistingCMSDBPort=111
ExistingCMSDBDatabase=xxx
ExistingCMSDBUser=yyy
ExistingCMSDBPassword=zzz
ExistingCMSDBReset=1
# Enter appropriate values for the db type
ExistingAuditingDBServer=aaa
ExistingAuditingDBPort=111
ExistingAuditingDBDatabase=bbb
ExistingAuditingDBUser=ccc
ExistingAuditingDBPassword=ddd
#Enter appropriate values for the Introscope
Introscope_ENT_HOST=localhost
Introscope_ENT_PORT=6001
Introscope_ENT_INSTRUMENTATION=10
#Enter appropriate values for the SMD Agent
SMDAgent_HOST=localhost
SMDAgent_PORT=6001
#WACS Port
WACSPort=6405
# The acceptable value of WebAppServerType: tomcat/wacs/manual/none
WebAppServerType=tomcat
#List the features installed by default
features=JavaWebApps1,tomcat80,WebTier,CMS,FRS,PlatformServers.IntegratedDB,SQLAn
ywhere,PlatformServers.EventServer,AdaptiveProcessingServer,AdaptiveJobServer,Pla
tform.RestWebService,Platform.Action.Framework.backend,Subversion,ConnectionProcS
ervice,ConnectionServices,DataFederatorQueryService,DataFederatorServices,Multidi
mensionalAnalysisServices,BExWebApplicationsService,AdvancedAnalysisServices,Crys
talReportsProcServices,CrystalReportSchedulingServices,CrystalReport2011ProcServi
ces,CrystalReport2011SchedulingServices,CrystalReportsServers,WebIProcServer,WebI
SchedulingServices,WebIServers,XcelsiusServers,MobileAddon,MobileServices,BWPubli
sherServer,IntegrationServers,MultitenancyManager,UpgradeManager,AdministratorToo
ls,DataAccess.DataFederator,DataAccess.HPNeoView,DataAccess.MySQL,DataAccess.Gene
ricJDBC,DataAccess.GenericOLEDB,DataAccess.OptionalDataDirectODBC,DataAccess.Sale
sforce,DataAccess.Netezza,DataAccess.Microsoft_AnalyticalServices,DataAccess.Micr
osoftExchange,DataAccess.MicrosoftOutlook,DataAccess.Microsoft_SQLServer,DataAcce
ss.Microsoft_Access,DataAccess.Ingres,DataAccess.Greenplum,DataAccess.IBMDB2,Data
Access.Informix,DataAccess.ProgressOpenEdge,DataAccess.Oracle,DataAccess.Sybase,D
ataAccess.Teradata,DataAccess.SAPBW,DataAccess.SAP,DataAccess.SAPHANA,DataAccess.
PersonalFiles,DataAccess.JavaBean,DataAccess.OpenConnectivity,DataAccess.HSQLDB,D
ataAccess.Derby,DataAccess.HadoopHive,DataAccess.Essbase,DataAccess.Universe,Data
Access.MyCube,DataAccess.XML,DataAccess.ADO.NET,DataAccess.COMData,DataAccess.Dat
aSet,DataAccess.SymantecACT,DataAccess.BDE,DataAccess.CDO,DataAccess.FieldDefinit
ions,DataAccess.FileSystem,DataAccess.NTEventLog,DataAccess.WebActivityLog,DataAc
cess.Btrieve,DataAccess.dBase,DataAccess.UWSC,DataAccess.SAPERP,DataAccess.XMLWeb
Services,DataAccess.OData,DataAccess.Excel,DataAccess.OracleEBS,Samples

```

5.6 段階的インストールを実行する

インストールは2段階(キャッシュとキャッシュ後のインストール)で実行されます。

- キャッシュは、ソフトウェアをインストールディレクトリにコピーするプロセスです。
- キャッシュ後のインストールは、実際のインストールプロセスです。

5.6.1 UNIX プラットフォームで(コマンドラインから)新しいインストールのフェーズ別インストールを実行する

フェーズ別インストールを実行するには、以下の手順に従います。

1. ファイルメニューからターミナルを起動します。
2. ソフトウェアがダウンロードされている場所を入力します。
3. `setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -cache <path><file name>` と入力します。
例: `setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -cache usr/sap/response.ini`

① 注記

- 既存の response.ini ファイルを使用しない場合、インストール時に BI プラットフォームインストーラによりこのファイルが自動的に作成されます。
- 既存の response.ini ファイルを使用する場合は、有効な response.ini ファイルを使用することを確認し、有効な認証情報を入力する必要があります。
- 無効な response.ini ファイルを無効な認証情報とともに使用すると、何の通知もなくインストールが失敗する原因になります。

4. [セットアップ言語を選択してください] ウィンドウで、セットアップ言語を選択します。
セットアップ言語を設定することにより、インストール時の情報が選択した言語で表示されるようになります。
5. **前提条件のチェック**ウィンドウで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。
インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。
 - 依存関係の前提条件が重要な場合は、インストールを続行することができません。
 - 見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、中止して条件を修正するかを選択することができます。
6. **インストールウィザード**ウィンドウで、表示された指示を確認します。
7. **使用許諾契約**ウィンドウで、使用許諾契約を確認して同意します。
8. **製品登録の設定**ウィンドウで、製品キーを入力します。
9. **言語パッケージの選択**ウィンドウで、インストールする追加言語を一覧から選択します。
オペレーティングシステムで現在使用されている言語が自動的に選択されます。各言語で問題が検知された場合、BI プラットフォームでは英語が使用されるため、英語サポートを選択から外すことはできません。

① 注記

[言語パッケージの選択] ウィンドウでは、チェックボックスを選択して言語パックを追加または削除することができます。

10. **インストールタイプの選択** ウィンドウで、インストールタイプのいずれかを選択します。
 - フルインストール: [フル] インストールを選択した場合は、以下の [フルインストール] の節に進みます。
 - カスタム/拡張インストール: [カスタム/拡張] インストールを選択した場合は、以下の [カスタム/拡張インストール] の節に進みます。
 - Web Tier: [Web Tier] インストールを選択した場合は、以下の [Web Tier インストール] の節に進みます。
11. [インストールの開始] ウィンドウが表示されます。キャッシュを開始するには、[次へ] を選択します。
12. [キャッシュが正常に完了しました] 画面が表示されます。

① 注記

キャッシュプロセスでは、システムダウンタイムはありません。

13. response.ini ファイルの格納先ディレクトリに移動します。
14. パスワードと製品キーを入力し、response.ini ファイルを保存します。
例: [CMS クラスターキー]、[CMS 管理者パスワード]、[SQL Anywhere パスワード] の各情報を入力します。

⚠ 警告

応答ファイルを作成する場合、ユーザが入力したライセンスキーおよびすべてのパスワードはプレーンテキスト形式の応答ファイルには書き込まれません。フェーズ別インストールの際には、アスタリスク (*****) の部分を特定の値に置き換える必要があります。

15. コマンドプロンプトに移動します。
16. ソフトウェアがダウンロードされている場所を入力します。
17. `setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -resume_after_cache <path><file name>` と入力します。
例: `setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -resume_after_cache usr/sap/
response.ini`
18. [インストールを再開します] ウィンドウで、[OK] を選択します。
19. [インストール後の手順] ウィンドウで、指示に従って操作し、[次へ] を選択します。

インストールが正常に完了します。

① 注記

- キャッシュ後のインストールでのみシステムダウンタイムが発生するため、全体的なシステムダウンタイムは短縮されます。
- インストールを開始すると、インストーラによりキャッシュ中に発生したエラーが修復され、インストールが続行されます。

5.6.2 UNIX プラットフォームで (コマンドラインから) アップデートインストールのフェーズ別インストールを実行する

パッチアップデートのフェーズ別インストールを実行するには、以下の手順に従います。

LC_ALL を en_US.utf8 などのサポートされている UTF-8 文字セットに設定してください。例:

```
export LANG=en_US.utf8
export LC_ALL=en_US.utf8
```

1. ファイルメニューからターミナルを開きます。
2. ソフトウェアパッケージの場所に移動します。
3. コマンド `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -cache <path>/<file name>` を実行します。
例: `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -cache /build/response.ini`

① 注記

必要な入力を含む既存の response.ini ファイルを使用する場合、インストーラでは情報の入力を求めずに直接キャッシュフェーズを開始します。

4. **前提条件のチェック**ウィンドウで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。インストールを続行する場合は、`[Enter]` キーを押します。
インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。
 - 依存関係の前提条件が重要な場合は、インストールを続行することができません。
 - 見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、中止して条件を修正するかを選択することができます。
5. **インストールウィザード**ウィンドウで、表示された指示を確認し、`[Enter]` キーを押します。
6. **使用許諾契約**ウィンドウで、使用許諾契約を確認し、`[Enter]` キーを押して同意します。
7. **新しいライセンスキー要件**ウィンドウで、新しいライセンスキー要件の内容を確認し、`[Enter]` キーを押して、アップデートインストール後に古いライセンスキーを削除して新しいライセンスキーを追加することに同意します。

① 注記

情報プラットフォームサービス 4.3 SP1 以前のバージョンを上位バージョンの情報プラットフォームサービス 4.2 にアップデートする場合は、インストーラに**新しいライセンスキー要件**ウィンドウが表示され、それ以外の場合は、インストーラに**新しいライセンスキー要件**ウィンドウは表示されません。

① 注記

システムを情報プラットフォームサービス 4.3 SP1 以前のバージョンから上位バージョンの情報プラットフォームサービスにアップデートすると、既存のライセンスは失効したライセンスとして機能します。SAP Service Marketplace から情報プラットフォームサービス 4.3 アップデートの新しいライセンスキーを申請する必要があります。<https://support.sap.com/keys-systems-installations/keys.html> にアクセスして新しいライセンスキーを申請してください。

新しいライセンスキーの申請方法の詳細については、<http://scn.sap.com/docs/DOC-70095> にアクセスしてください。

システムを情報プラットフォームサービス 4.3 アップデートにアップデートしたら、セントラル管理コンソールにログインして、古いライセンスキーを削除し、新しいライセンスキーを追加する必要があります。または、スクリプトを実行して、ライセンスキーを削除することができます。スクリプトによるライセンスキーの削除の詳細については、[2276413](#) を参照してください。

セントラル管理コンソールに新しいライセンスキーを追加するまで、特定のサーバは無効な状態です。

新しいライセンスキーを追加すると、[サーバ] ウィンドウに移動して、無効な状態にあるこれらのサーバを有効化することができます。

詳細については、**Business Intelligence** プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

8. 既存の **CMS デプロイメント情報** ウィンドウで、管理者 **パスワード** を入力し、[Enter] キーを押します。
9. [インストールの開始] ウィンドウで、[Enter] キーを押してキャッシュを開始します。
キャッシュが開始されます。キャッシュが完了すると、**キャッシュが正常に完了しました** ウィンドウが表示されます。

① 注記

キャッシュフェーズではシステムダウンタイムが発生しないため、システムで作業を続けることができます。

10. **キャッシュが正常に完了しました** ウィンドウで、[Enter] キーを押してフェーズ別インストールを終了します。

① 注記

キャッシュフェーズの後、メンテナンス時間があるときに、インストールを実行することができます。

11. response.ini ファイルディレクトリの場所に移動します。
12. **[CMS 管理者パスワード]** を入力し、response.ini ファイルを保存します。
13. コマンドプロンプトを開きます。
14. ソフトウェアをダウンロードする場所に移動します。
15. コマンド `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -resume_after_cache <path>/<file name>` を実行します。
例: `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path> -resume_after_cache /build/response.ini`
16. インストールを再開するには、[Enter] キーを押します。
インストールを再開すると、インストーラによりキャッシュ中に発生したエラーが修復され、インストールが続行されます。
インストールが開始されます。インストールが完了すると、インストール後の指示が含まれている完了画面が表示されます。
17. **インストール後の手順** ウィンドウで、[Enter] キーを押します。

① 注記

情報プラットフォームサービス 4.2 SP8 を上位バージョンの情報プラットフォームサービス 4.3 にアップデートしており、基本セットアップにバンドルされているデフォルトの Tomcat Web アプリケーションサーバが含まれている場合は、インストーラに **インストール後の手順** ウィンドウは表示されません。

18. [Enter] キーを押して、インストールを終了します。

情報プラットフォームサービス 4.3 アップデートのインストールが正常に完了します。

① 注記

キャッシュ後のインストールでのみシステムダウンタイムが発生するため、システムダウンタイムは全体的に短縮されます。

5.6.3 ユーザインタフェースからアップデートインストールのフェーズ別インストールを実行する

以下の手順に従って、パッチアップデートのフェーズ別インストールを実行してください。

1. ファイルメニューからターミナルを開きます。
2. ソフトウェアパッケージの場所に移動します。
3. コマンド `./setup.sh -InstallDir <InstallDir_Path>` ファイルを実行します。
コマンドラインから `InstallDir=DESTINATION_DIR` パラメータでインストール先フォルダを設定します。たとえば、BI プラットフォームを `/opt/sap` フォルダにインストールするには、コマンド `./setup.sh -InstallDir /opt/sap` を使用します。
4. **前提条件のチェック**ウィンドウで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。インストールを続行する場合は、**Enter** キーを押します。
インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。
 - 依存関係の前提条件が重要な場合は、インストールを続行することができません。
 - 見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、中止して条件を修正するかを選択することができます。
5. **インストールウィザード**ウィンドウで、表示された指示を確認し、**Enter** キーを押します。
6. **使用許諾契約**ウィンドウで、使用許諾契約を確認し、**Enter** キーを押して同意します。
7. **新しいライセンスキー要件**ウィンドウで、新しいライセンスキー要件の内容を確認し、**Enter** キーを押して、アップデートインストール後に古いライセンスキーを削除して新しいライセンスキーを追加することに同意します。

① 注記

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 SP1 以前のバージョンを上位バージョンの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 にアップデートする場合は、BI インストーラに**新しいライセンスキー要件**ウィンドウが表示され、それ以外の場合は、BI インストーラに**新しいライセンスキー要件**ウィンドウは表示されません。

① 注記

Business Intelligence プラットフォーム 4.3 SP1 以前のバージョンから、上位バージョンの Business Intelligence プラットフォームにアップデートすると、既存のライセンスは失効したライセンスとして機能します。SAP Service Marketplace から Business Intelligence プラットフォーム 4.3 アップデートの新しいライセンスキーを申請する必要があります。<https://support.sap.com/keys-systems-installations/keys.html> にアクセスして新しいライセンスキーを申請してください。

新しいライセンスキーの申請方法の詳細については、<http://scn.sap.com/docs/DOC-70095> にアクセスしてください。

システムを Business Intelligence プラットフォーム 4.3 アップデートにアップデートしたら、セントラル管理コンソールにログインして、古いライセンスキーを削除し、新しいライセンスキーを追加する必要があります。または、スクリプトを実行して、ライセンスキーを削除することができます。スクリプトによるライセンスキーの削除の詳細については、[2276413](#) を参照してください。

セントラル管理コンソールに新しいライセンスキーを追加するまで、特定のサーバは無効な状態です。

新しいライセンスキーを追加すると、[サーバ] ウィンドウに移動して、無効な状態にあるこれらのサーバを有効化することができます。

詳細については、『Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

8. 既存の CMS デプロイメント情報ウィンドウで、管理者パスワードを入力し、[Enter] キーを押します。
9. インストールモードの選択ウィンドウで、[フェーズ別インストール] オプションを選択し、[Enter] キーを押します。

④ 注記

BI プラットフォームインストーラでは、インストールは 2 フェーズ (キャッシュとキャッシュ後のインストール) で実行されます。

キャッシュ中はシステムダウンタイムが発生しないため、システムで作業を続けることができます。

キャッシュ後のインストール中は、ソフトウェアをインストールするシステムでシステムダウンタイムが発生します。

10. キャッシュフェーズを開始するには、Enter キーを押します。
キャッシュプロセスが正常に完了すると、**キャッシュが正常に完了しました**ウィンドウが表示されます。
11. フェーズ別インストールを終了するには、Enter キーを押します。

④ 注記

キャッシュフェーズの後、メンテナンス時間があるときに、インストールを実行することができます。

12. キャッシュフェーズの後にインストールを再開するには、ステップ 1 および 2 を実行します。
13. さらに続行するには、ステップ 3、5、6、および 7 を実行します。
14. Web アプリケーションデプロイメントウィンドウで、適切な Web アプリケーションデプロイメントオプションを選択し、Enter キーを押します。

④ 注記

基本インストールにデフォルトの Tomcat JAVA Web アプリケーションサーバが存在する場合、Business Intelligence プラットフォームインストーラに [Web アプリケーションデプロイメント] ウィンドウが表示されます。存在しない場合は、Web アプリケーションデプロイメントウィンドウは表示されません。

- [Web アプリケーションを今すぐデプロイします。] オプションを選択すると、バンドルされているデフォルトの Tomcat JAVA Web アプリケーションサーバに Web アプリケーションのコンテンツがデプロイされます。
- [Web アプリケーションを後でデプロイします。] オプションを選択すると、バンドルされているデフォルトの Tomcat JAVA Web アプリケーションサーバに Web アプリケーションのコンテンツはデプロイされません。
- BI プラットフォームおよび SAP BusinessObjects Explorer アドオン製品をインストールする場合は、[Web アプリケーションを後でデプロイします。] オプションを選択することをお奨めします。ご使用の

システムに Explorer アドオン製品をインストールする場合は、[Web アプリケーションを今すぐデプロイします。] オプションを選択してください。これを選択すると、システムダウンタイムが全体的に短縮されます。

15. **インストールを再開します**ウィンドウで、*Enter* キーを押してインストールを再開します。
アップデートインストールが開始されます。インストールが完了すると、[インストール後の手順] ウィンドウが表示されます。
16. **インストール後の手順**ウィンドウで、指示に従って操作し、[*Enter*] キーを押します。

① 注記

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 SP2 を上位バージョンの SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3 にアップデートしており、基本セットアップにバンドルされているデフォルトの Tomcat Web アプリケーションサーバが含まれている場合は、BI インストーラに**インストール後の手順**ウィンドウは表示されません。

17. インストールを終了するには、*Enter* キーを押します。

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.3 アップデートのインストールが正常に完了します。

① 注記

キャッシュ後のインストールでのみシステムダウンタイムが発生するため、システムダウンタイムは全体的に短縮されます。

6 インストール後の作業

この節では、インストールプログラムが終了した後で、インストールが成功したことをテストするために実行する必要のある操作について説明します。

6.1 インストールの確認

インストールが成功したかどうかを確認するには、セントラル管理コンソール (CMC) を使用して CMS にログインします。CMC は、サーバ、ユーザとグループ、権限、セキュリティポリシーの管理に使用されます。

専用の Web アプリケーションサーバをインストールしている場合は、CMC にアクセスするための Web アプリケーションサーバの URL を入力することができます。次の URL を使用します。

```
http://<WAS_HOSTNAME>:<PORT>/BOE/CMC
```

① 注記

デフォルトの Tomcat Web アプリケーションサーバのリスニングポート番号は、8080 です。

<WAS_HOSTNAME> を Web アプリケーションサーバのホスト名に置き換え、<PORT> を Web アプリケーションサーバのリスニングポートに置き換えます。カスタム Web アプリケーションサーバのルートコンテキストまたは BOE.war Web アプリケーションコンテキストを使用している場合は、URL が異なります。

Internet Explorer を使用している場合、信頼済みサイトのリストに新しいサーバが追加されていないため、複数の Internet Explorer セキュリティ強化の構成警告が表示される可能性があります。[\[追加\]](#) をクリックして、ローカル Web サーバを信頼された Web サイトのリストに追加します。サーバが SSL 暗号を使用していない場合、[\[このゾーンのサイトにはすべてサーバの確認 \(https:\) を必要とする\]](#) をオフにします。

ユーザ名フィールドに **Administrator** と入力し、インストールプログラムに入力した管理者パスワードを入力して、管理者ユーザとしてログインします。

CMC の使用の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

6.1.1 インストールされているバージョンの確認

次のいずれかの方法を使用して、インストールした BI プラットフォームのバージョンをチェックします。

- Windows デプロイメントの場合、プログラムの追加と削除 (ARP) を使用します
- Unix または Linux デプロイメントの場合、`modifyOrRemoveProducts.sh` を実行します。

BI 製品およびクライアントツール

▶ ヘルプ ▶ バージョン情報 ▶ メニューから、BI プラットフォームクライアントツールおよび SAP Crystal Reports といった他の SAP BusinessObjects BI 製品の最新のバージョン情報を確認できます。

6.1.2 ログインのトラブルシューティング

CMC を使用して CMS にログオンできない場合、または CMC を起動できない場合は、考えられる以下の原因を確認してください。

1. ファイアウォールが CMS ポート番号 (デフォルト 6400)、または Web アプリケーションサーバポートをブロックしていないか。
2. URL は正しいか。
CMC にアクセスするためのデフォルトの URL は次のとおりです。

```
http://<WAS_HOSTNAME>:<PORT>/BOE/CMC
```

<WAS_HOSTNAME> を Web アプリケーションサーバのホスト名に置き換え、<PORT> を Web アプリケーションサーバのリスニングポートに置き換えます。カスタム Web アプリケーションサーバのルートコンテキストまたは BOE.war Web アプリケーションコンテキストを使用している場合は、URL が異なります。

3. [認証] フィールドに正しい方式を指定したか。
デフォルトの認証の種類は *Enterprise* で、固有の BI プラットフォーム認証システムを表します。
LDAP または Windows AD シングルサインオン認証システムを使用している場合は、システムを選択します。
LDAP シングルサインオン認証システムを使用している場合は、システムを選択します。
4. CMC ログイン画面の **ユーザ名** および **パスワード** フィールドに正しいユーザ認証情報を入力しているか。
管理アカウントの名称は、**Administrator** です。パスワードは、インストールプロセス中に入力したものです。
5. Server Intelligence Agent (SIA) が実行されているかどうか。
SIA サーバのステータスを取得するには、次のコマンドを実行: `-$./ccm.sh -cms servername.<CMSName>:<PORT> -username Administrator -password <password> -authentication secEnterprise -display (SIA が実行中でない場合は、起動してください)`
6. CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースに使用するデータベースサーバが実行されていること、および CMS からデータベースへのネットワーク接続が機能していることを確認します。

① 注記

BI プラットフォームを Unix プラットフォームにインストールしてシステムを再起動した後で、`setupinit.sh` によるサーバの自動再起動に失敗した場合、サーバを手動で再起動する必要があります。

これらの解決策によって問題が解決しない場合は、ソフトウェアの修復あるいは再インストール、または <https://support.sap.com/home.html> でサポートに連絡することをお奨めします。

6.1.3 サイレントインストールステータスのリターンコード (Unix)

以下は、自動化シナリオでサイレントモードで起動したときのインストーラからのリターンコードです。

リターンコード	インストールステータス	シナリオ
0	成功	インストール作業が正常に完了しました。
1	エラー	<p>何らかの重大なエラーのため、インストールに失敗しました。</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> ノードの追加中にエラーが発生 応答ファイルを介する、またはコマンドプロンプトでのサイレントインストール中にインストールオプションパラメータに対して不適切な/無効な値が指定されました。
128+n (n は OS が送信する数値)	異常終了 (クラッシュ)	<p>インストール (セットアッププログラム) が強制的にクローズまたはクラッシュしました。</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> setupengine.bin プロセスを強制的に中止 (kill -9 pid 使用など) して、リターンコード 137 (128+9) が与えられる。
2	警告	<p>インストールが警告ありで完了しました。</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> DFO デプロイメントまたは DFO アップロードに関連する問題。

6.2 Adaptive Processing Server の追加登録

ホストシステムごとに 1 つの Automated Process Server (APS) がインストールプログラムによりインストールされます。インストールした機能に応じて、この APS はモニタリングサービス、ライフサイクルマネジメントサービス、多次元分析サービス (MDAS)、公開サービスなど、多くのサービスを提供することができます。

本稼働システムまたはテストシステムでは、追加の APS を作成し、ビジネス要件に合わせて APS を設定するのが最適です。

追加の APS の作成方法には、以下の 2 種類があります。

- システム設定ウィザードを実行する。
ウィザードは、事前に定義されたデプロイメントテンプレートに従った APS の設定を含む、ユーザの BI platform プラットフォームシステムの基本設定に役立ちます。ウィザードを使用すると、適切に APS 設定を開始できます。ただし、この場合でもシステムのサイズ設定を実行する必要があります。

ウィザードは、セントラル管理コンソール (CMC) から使用できます。ウィザードの詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“システム設定ウィザードの概要”を参照してください。デフォルトのデプロイメントテンプレートに関する詳細については、ウィザード内および <http://help.sap.com/bobip> で参照できる *SAP BusinessObjects BI* プラットフォームデプロイメントテンプレートのドキュメントを参照してください。

- CMC を使用して、追加 APS の作成と設定を手動で実行する。詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“サーバの追加、クローン、および削除”を参照してください。

→ 注意

ウィザードでのデプロイメントテンプレートの選択、または手動での追加 APS の作成で、システムのサイズ設定が置き換わることはありません。サイズ設定が実行されていることを確認してください。BI サイズ設定ガイドを参照するには、<http://help.sap.com/bobip> に移動します。

6.3 Web アプリケーションのデプロイメント

このインストールでは、バンドルされているバージョンの Tomcat にのみ Web アプリケーションをデプロイします。サポートされている Web アプリケーションサーバに Web アプリケーションをデプロイするには、WDeploy ツールまたは Web アプリケーションサーバ管理コンソールを使用して、Web アプリケーションを手動でデプロイする必要があります。

WDeploy ツールは、サポートされている Web アプリケーションサーバへの Web アプリケーションのデプロイメントを自動化します。WDeploy の使用の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。

6.4 DataDirect DSN 接続の設定

DataDirect DSN を使用するレポートを作成して、データソースへの接続を定義することができます。このレポートに BI プラットフォームをアップロードする前に、レポートで使用された DataDirect 接続に BI プラットフォーム `odbc.ini` ファイルを設定します。

6.4.1 DataDirect 接続に `odbc.ini` ファイルを設定する

BI プラットフォームでは、DataDirect ODBC データベースドライバを使用してデータソースに接続できます。ODBC ドライバは `odbc.ini` ファイルを使用して、特定のデータソースへの接続を定義します。DataDirect を使用するレポートをアップロードして、レポーティングデータベースに接続する場合は、DataDirect 接続情報を BI プラットフォーム `odbc.ini` ファイルに追加する必要があります。

この節の例では、ユーザのレポートで `SQL_NWP_1` と呼ばれる SQL Server Native Wire Protocol 接続を使用しているとします。

1. ディレクトリを `<INSTALLEDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40` に変更します。これには次のファイルが含まれます。

- `odbc.ini` (BI プラットフォーム `odbc.ini` ファイル)
 - `odbc_dd_7_0_1_sample.ini` (DataDirect の `odbc.ini` ファイルの例)
2. `odbc_dd_7_1_5_sample.ini` を開き、[ODBC Data Sources] 下のレポートで使用されているデータソースの DSN 宣言を `odbc.ini` ファイルの宣言セクションにコピーします。例:宣言のコピー
`SQL Native Wire Protocol=DataDirect 7.1.5 SQL Server Native Wire Protocol`
 3. ユーザのレポートで使用された接続名を使用するように宣言を編集します。例:
`SQL_NWP_1=DataDirect 7.1.5 SQL Server Native Wire Protocol`
 4. `odbc_dd_7_1_5_sample.ini` ファイルで、ユーザのレポートで使用されている DSN の定義を検索します。例:

```
[SQL Server Native Wire Protocol]
Driver=/build/taffi/aurora/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x86/odbc/7.1.5/lib/
CRsqls27.so
Description=DataDirect 7.1.5 SQL Server Native Wire Protocol
...1
XML Describe Type=-10
```

5. この定義を `odbc_dd_7_1_5_sample.ini` ファイルから `odbc.ini` ファイルにコピーして、ユーザのレポートで使用されている接続名を使用するように変更します。例:

```
[SQL_NWP_1]
Driver=/build/taffi/aurora/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x86/odbc/7.1.5/lib/
CRsqls27.so
Description=DataDirect 7.1.5 SQL Server Native Wire Protocol
...
XML Describe Type=-10
```

6. DSN 定義に任意の変数を定義します。
`[SQL_NWP_1]` 定義に、次のように定義する必要があります。
 - `Database=<database_name>`
 - `HostName=<SQL_Server_host>`
 - `PortNumber=<SQL_Server_server_port>`
7. `odbc.ini` ファイルを保存します。

例

`SQL_NWP_1` と呼ばれる SQL Server Native Wire Protocol 接続を使用するレポートをアップロードするとします。この例では、変更された `odbc.ini` ファイルが Red Hat インストールでどのように表示されるかを示します。

```
[ODBC Data Sources]
BI4_CMS_DSN_1375267365=SQLAnywhere 16
BI4_Audit_DSN_1375267365=SQLAnywhere 16
DB2 Wire Protocol=DataDirect 7.1.5 DB2 Wire Protocol
Informix Wire Protocol=DataDirect 7.1.5 Informix Wire Protocol
Oracle Wire Protocol=DataDirect 7.1.5 Oracle Wire Protocol
Sybase Wire Protocol= DataDirect 7.1.5 Sybase Wire Protocol
Text=DataDirect 7.1.5 TextFile (*.*)
SQL_NWP_1=DataDirect 7.1.5 SQL Server Native Wire Protocol
[BI4_CMS_DSN_1373070022]
UID=dba
DatabaseName=BI4_CMS
ServerName=BI4_1373070022
Host=localhost:2638
Driver=/build/taffi/aurora/sqlanywhere/lib64/libdbodbc12.so
[BI4_Audit_DSN_1373070022]
```

```

UID=dba
DatabaseName=BI4_Audit
ServerName=BI4_1373070022
Host=localhost:2638
Driver=/build/taffi/aurora/sqlanywhere/lib64/libdbodbc12.so
...
[SQL_NWP_1]
Driver=/build/taffi/aurora/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x86/odbc/7.1.5/lib/
CRsqls27.so
Description=DataDirect 7.1.5 SQL Server Native Wire Protocol
AlternateServers=
AlwaysReportTriggerResults=0
AnsiNPW=1
ApplicationName=
ApplicationUsingThreads=1
AuthenticationMethod=1
BulkBinaryThreshold=32
BulkCharacterThreshold=-1
BulkLoadBatchSize=1024
BulkLoadOptions=2
ConnectionReset=0
ConnectionRetryCount=0
ConnectionRetryDelay=3
Database=<database_name>
EnableBulkLoad=0
EnableQuotedIdentifiers=0
EncryptionMethod=0
FailoverGranularity=0
FailoverMode=0
FailoverPreconnect=0
FetchTSWTZasTimestamp=0
FetchTWFSasTime=1
GSSClient=native
HostName=<SQL_Server_host>
HostNameInCertificate=
InitializationString=
Language=
LoadBalanceTimeout=0
LoadBalancing=0
LoginTimeout=15
LogonID=
MaxPoolSize=100
MinPoolSize=0
PacketSize=-1
Password=
Pooling=0
PortNumber=<SQL_Server_server_port> 1433
QueryTimeout=0
ReportCodePageConversionErrors=0
SnapshotSerializable=0
TrustStore=
TrustStorePassword=
ValidateServerCertificate=1
WorkStationID=
XML Describe Type=-10

```

6.5 SAP サポート

6.5.1 インストール後のシステムランドスケープディレクトリ (SLD) データサプライヤ (DS) の設定

BI プラットフォームのインストール時に SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポートを有効化しなかった場合は、SAP Host Agent をインストールすることで後からいつでも有効化できます。詳細については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[22 ページ\]](#)を参照してください。

SAP Host Agent をインストールしたら、セントラル管理コンソール (CMC) を開き、[\[サーバ\]](#) タブを選択して SIA ノードを再起動します。SIA が再起動または作成されると、必ず SLD 登録が自動的に実行されます。

Web アプリケーションサーバにデプロイされた Web アプリケーションの SLD サポートを有効化する方法は、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドの「SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) 登録」に関する項目を参照してください。

6.5.2 インストール後に SMD エージェントを設定する

インストールプロセス中に SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を設定しなかった場合でも、SMD エージェントのホスト名とポート番号をセントラル管理コンソール (CMC) で指定することができます。

① 注記

BI プラットフォームで SMD エージェントのホスト名とポート番号を設定するには、まず SMD エージェントがインストールされている必要があります。

1. セントラル管理コンソール (CMC) を開きます。
2. [\[サーバ\]](#) タブを選択します。
3. サーバー一覧で SIA [\[ノード\]](#) フォルダを展開し、SIA を右クリックして更新します。
4. コンテキストメニューから [\[ブレースホルダ\]](#) を選択します。
5. SMD エージェントに関連するブレースホルダが正しく設定されていることを確認します。
 - a. ブレースホルダ %SMDAgentHost% を SMD エージェントのホスト名で更新します。
 - b. ブレースホルダ %SMDAgentPort% を SMD エージェントのポート番号で更新します。
6. [\[ブレースホルダ\]](#) 画面を保存して閉じます。
7. SIA を再起動します。
8. SIA が複数ある場合は、[ノード](#)フォルダ内の各 SIA に対して手順 3～7 を繰り返します。

6.5.3 インストール後に CA Wily Introscope エージェントを設定する

インストールプロセス中に CA Wily Introscope を設定しなかった場合は、セントラル管理コンソール (CMC) で後から設定できます。

① 注記

CMC で設定するには、先に Introscope エージェントをインストールして実行しておく必要があります。

1. セントラル管理コンソール (CMC) を開きます。
2. [サーバ] タブを選択します。
3. サーバー一覧で SIA [ノード] フォルダを展開し、SIA を右クリックして更新します。
4. コンテキストメニューから [プレースホルダ] を選択します。
5. Introscope に関連するプレースホルダが正しく設定されているか確認します。
 - a. プレースホルダ `%IntroscopeAgentEnableInstrumentation%` を `false` から `true` に変更します。
 - b. プレースホルダ `%IntroscopeAgentManagerHost%` を Introscope エージェントのホスト名で更新します。
 - c. プレースホルダ `%IntroscopeAgentEnterpriseManagerPort%` を Introscope エージェントのポート番号で更新します。
 - d. `%IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransport%` を確認し、正しいネットワークトランスポート (TCP など) が選択されていることを確認します。
6. [プレースホルダ] 画面を保存して閉じます。
7. SIA を再起動します。
8. SIA が複数ある場合は、ノードフォルダ内の各 SIA に対して手順 3～7 を繰り返します。

6.6 サードパーティ ERP の統合

6.6.1 Siebel Enterprise 統合を有効化する

BI プラットフォームを Siebel Enterprise に統合するには、追加の手順が必要になることがあります。Siebel データからレポートするには以下の 2 つの方法があります。

- ローカルの Siebel クライアントからのレポート
ローカルの Siebel クライアントからレポートを作成するには、Siebel Dedicated Web Client または Mobile Web Client が有効化されアクセスできるよう Siebel Enterprise が設定されていることを確認します。
- Siebel Enterprise サーバの直接レポート
Siebel Enterprise 統合を有効化するには、Siebel Java Data Bean JAR ファイルを BI プラットフォームおよび Web アプリケーションサーバの `lib` フォルダにコピーする必要があります。

1. Siebel Tools をインストールしたときに作成された `classes` フォルダに移動します。

Java Data Bean のファイルは、通常 `SIEBEL_HOME/classes` フォルダに保存されています。たとえば、Siebel `classes` フォルダは `/opt/siebel/7.8/classes` になります。

2. `SiebelJI.jar` および `SiebelJI_enu.jar` Java Data Bean ファイルを、BI プラットフォーム Java `lib` ディレクトリにコピーします。

たとえば、`/opt/siebel/7.8/classes/SiebelJI.jar` および `/opt/siebel/7.8/classes/SiebelJI_enu.jar` を `<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/siebel` にコピーします。

3. `SiebelJI.jar` および `SiebelJI_enu.jar` Java Data Bean ファイルをユーザの Web アプリケーションサーバの `lib` ディレクトリにコピーします。

たとえば、`/opt/siebel/7.8/classes/SiebelJI.jar` および `/opt/siebel/7.8/classes/SiebelJI_enu.jar` を `<WAS_INSTALL_DIR>/lib` にコピーします。BI プラットフォームにバンドルされている Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールした場合は、フォルダは `<BIP_INSTALL_DIR>/tomcat/lib` です。

4. Central Management Server および Web アプリケーションサーバを再起動します。

詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“Siebel 統合の設定”を参照してください。

6.6.2 JD Edwards EnterpriseOne 統合を有効化する

JD Edwards EnterpriseOne 統合を有効化するには、JD Edwards Java Data Bean JAR ファイルを BI プラットフォーム `Java lib` フォルダにコピーする必要があります。

1. JD Edwards EnterpriseOne をインストールしたときに作成された `classes` フォルダに移動します。

Java Data Bean のファイルは、通常 `<JDE_HOME>/system/classes` フォルダに保存されています。

2. 次の Java Data Bean のファイルに移動します。

- `kernel.jar`
- `jdeutil.jar`
- `log4j.jar`
- `pseoneqryxml.jar`
- `pseonexml.jar`

3. 上記の `.jar` ファイルを、次の BI プラットフォーム JD Edwards lib フォルダにコピーします。

`<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/jdedwards/default/jdedwards`

4. さらに、`.jar` ファイルを Web アプリケーションサーバの `Java lib` フォルダにコピーします。たとえば、BI プラットフォームにバンドルされている Web アプリケーションサーバを使用している場合、デフォルトの Web アプリケーションサーバの `lib` ディレクトリは次のようになります。

`<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/tomcat/lib`

5. Central Management Server および Web アプリケーションサーバを再起動します。

詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“JD Edwards 統合の設定”に関する節を参照してください。

6.6.3 Oracle E-Business Suite (EBS) 統合を有効化する

SAP Crystal Reports で Oracle EBS データソースからのレポートングを有効化するには、32 ビットの Oracle クライアントが SAP Crystal Reports を実行するシステムにインストールされていることを確認します。

BI プラットフォームと、Oracle EBS 認証およびインポートロールを含む Oracle EBS との統合を有効化するには、次の手順に従います。

1. 64 ビットの Oracle クライアントを BI プラットフォームホストにインストールおよび設定します。
64 ビットの Oracle クライアントをインストールしたら、次のコンポーネントがインストールされていることを確認します。

- Oracle JDBC ドライバ
 - JDBC-OCI ブリッジ
2. クライアントの Oracle EBS データベースにログオンし、Oracle クライアントが接続可能であることを確認します。
 3. 次の Oracle クライアントバイナリを BI プラットフォーム Oracle ライブラリにコピーします。

コピーするファイル:

- `<ORA_HOME>/lib/ocijdbc11.so`
- `<ORA_HOME>/lib/libclntsh.so.11.1`
- `<ORA_HOME>/lib/libnnz11.so`

変更後 `<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/oracle/default`

4. 次のファイルを Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリにコピーします。

コピーするファイル:

- `<ORA_HOME>/jdbc/lib/ojdbc5.jar`

このファイルを Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリにコピーします。たとえば、BI プラットフォームにバンドルされている Web アプリケーションサーバを使用している場合、デフォルトの Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリは次のようになります。

`<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/tomcat/lib`

5. CMS を再起動します。
6. Web アプリケーションサーバを停止します。
7. Web アプリケーションの作業フォルダをクリーンアップします。

たとえば、BI プラットフォームにバンドルされている Tomcat Web アプリケーションサーバの Tomcat 作業フォルダ (`<BIP_INSTALL_DIR>/sap_bobj/tomcat/work/Catalina/localhost/BOE`) にあるすべてのファイルを削除します。

8. Web アプリケーションサーバを再起動します。

Oracle E-Business Suite の統合をインストールしたら、Oracle EBS セキュリティコンテキストが実行されていることを確認します。これには、Integration Solution を初めて使用する前に、新しい Oracle EBS データベースで bobj_pkg パッケージを手動で作成します。パッケージを生成するには、Oracle EBS データベースにログオンし、以下のファイルに指定された PL/SQL コードを使用します。

`<BIP_INSTALL_DIR>/Samples/ebs/bobj_pkg.txt`

6.7 インストール後の診断チェック

いつでも監視ツールを実行して、診断チェックを実行したり問題を検出したりすることができます。

診断テストを実行するために監視ツールにアクセスするには、セントラル管理コンソール (CMC) にログオンして **[モニタリング]** 画面を選択し、**[プローブ]** タブをクリックします。

6.8 SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの変更

6.8.1 SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを変更する

これらの手順では、インストール済みの機能を追加または削除することによって、SAP BusinessObjects Business Intelligence (BI) プラットフォームのインストールを変更するプロセスについて説明します。

BI プラットフォームを変更する前に、CMS システムデータベースをバックアップすることをお勧めします。

① 注記

インストールを変更するために、CMS 以外の他のすべてのサーバを停止する必要があります。また、`ps -ef | grep sap_bobj` コマンドを使用して確認する必要があります。

1. `<BIP_INSTALL_DIR>` フォルダにディレクトリを移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
./modifyOrRemoveProducts.sh
```

② 注記

削除プログラムでは、ログファイル、Web アプリケーション設定ファイル、および Web アプリケーションは削除されません。対応する機能を削除した後に残ったフォルダは、`rm` コマンドを使用して後から手動で削除できます。

3. 変更するインストールを選択します。
4. **[変更]** を選択します。
5. **[言語パッケージの選択]** ページで、インストールする言語を選択し、削除する言語を選択解除します。続行するには、**次へ** をクリックします。
6. 必要なすべての機能が選択されていることを確認します。インストールしない機能の選択が解除されていることを確認します。
キーボードの **[スペースバー]** を押して、選択したツリーで強調表示されている機能を展開します。方向キーを使用して、上下に移動します。 **[X]** キーで機能の選択/選択解除を切り替えます。
機能を選択したら、 **[Enter]** を押します。
7. インストール済みの CMS でサーバを変更する場合は、 **[Enter]** キーを押して変更を適用します。リモートでインストールされた CMS を使用するサーバを変更する場合は、ホスト名、ポート、管理アカウントのユーザ名とパスワードを入力します。
8. 変更したら、 **[Enter]** を押してコマンドラインに戻ります。

インストールが更新されました。

6.8.2 SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを修復する

これらの手順は、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームインストールを修復するプロセスについて説明します。このプロセスでは、セットアッププログラムによって初期設定されたファイルと設定が修復されます。

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを修復する前に、CMS システムデータベースをバックアップすることをお勧めします。

① 注記

インストールを変更するためには、CMS を実行する必要があります。

1. `<BIP_INSTALL_DIR>` フォルダにディレクトリを移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
./modifyOrRemoveProducts.sh
```

② 注記

削除プログラムでは、ログファイル、Web アプリケーション設定ファイル、および Web アプリケーションは削除されません。その他のフォルダはコマンド `rm` を使用して手動で削除できます。

3. 修復するインストールを選択します。
4. **[修復]** オプションを選択します。
5. CMS 接続情報とログオン情報を入力し、先に進んで修復を確認します。
6. 修復が完了したら、**[Enter]** キーを押してコマンドラインに戻ります。

インストールが修復され、システムが元の設定に復元されました。

6.8.3 BI プラットフォームにバンドルされたサードパーティソリューションへのパッチ提供

BI プラットフォーム 4.3 インストールには、以下を含むいくつかのサードパーティソフトウェアソリューションがバンドルされています。

- SAP Sybase SQL Anywhere
- Apache Tomcat 8.5
- SAP JVM

これらのサードパーティソリューションは、変更を加えることなく、ベンダー提供のパッチや更新を含むパッチ提供が行われない状態で出荷されています。これらの出荷された製品でセキュリティの問題が発生した場合は、SAP が必要に応じて今後のサポートパッケージ (SP) またはパッチにより、パッチを提供します。

バンドルされたソフトウェアの新しいバージョンまたはパッチを実行する必要がある場合は、より柔軟で充実したサポートを提供するフル機能のソリューションへの乗り換えを検討してください。このリリースでサポートされるデータベース、Web アプリケーションサーバ、およびその他のシステムの一覧は、SAP Support Portal の SAP

BusinessObjects セクションにある製品出荷マトリックス (サポートされるプラットフォーム/PAR) <https://support.sap.com/home.html>。

① 注記

SAP JVM/JDK は、別のベンダーの JVM/JDK と入れ替えないでください。

6.9 Administrator アカウントパスワードが失われた場合

BI プラットフォームの**管理者**アカウントの認証情報を紛失した場合、別の管理アカウントが使用可能かどうかを確認し、そのアカウントを使用して、BI プラットフォームの**管理者**アカウントのパスワードを変更します。

これが不可能な場合は、SAP Knowledge Base Article [1679970](#) 「How to reset the Administrator password in Business Intelligence Platform 4.X」を参照してください。

6.10 fontalias_v2.xml ファイルでのインストール後のフォントの設定

fontalias_v2.xml ファイルを手動で編集して Web Intelligence で使用できるフォントの数を増やすことができます。

4.3 SP2 より、一部のフォント名が変更され、フォントファイル名が fontalias_v2.xml に変更されました。パッチインストールの実行時に、旧 fontalias.xml ファイルは削除されません。また、旧 fontalias.xml に対する設定変更を行った場合、必ずそれらを手動で新しい fontalias_v2.xml ファイルに複製してください。

① 注記

fontalias_v2.xml ファイルでフォントを設定する前に、フォントを取得してマシンにインストールする必要があります。

- UNIX の場合、このファイルは以下のディレクトリにあります。
<BOBJ_INST_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/<platform>_x64/fonts
- 64 ビット Windows サーバの場合、このファイルは以下のフォルダにあります。
<SAP_BOBJ_INST_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%\win64_x64\fonts
- 32 ビット Windows サーバの場合、このファイルは以下のフォルダにあります。
<SAP_BOBJ_INST_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%\win32_x86\fonts

① 注記

使用されるフォントの一貫性を保つために、Web Intelligence リッチクライアントマシンのデプロイメントに追加されるフォントは、BI プラットフォームサーバマシンのデプロイメントにも追加されます。

デフォルトの fontalias_v2.xml の例は、次のとおりです。

```
<FONTALIASMANAGER>
```

```

<FONT NAME="Arial">
  <FONTFAMILY PLATFORM="ttf" NAME="Arial">
    <FONTATTRIBUTE BOLD="false" ITALIC="false" LOGICAL="Arial"
    PHYSICAL="Arial.ttf;arial.ttf;ArialMTPro-Regular.ttf"/>
    <FONTATTRIBUTE BOLD="true" ITALIC="false" LOGICAL="Arial Bold"
    PHYSICAL="Arial-Bold.ttf;arialbd.ttf;arialb.ttf;ArialMTPro-Bold.ttf"/>
    <FONTATTRIBUTE BOLD="false" ITALIC="true" LOGICAL="Arial Italic"
    PHYSICAL="Arial-Italic.ttf;ariali.ttf;ArialMTPro-Italic.ttf"/>
    <FONTATTRIBUTE BOLD="true" ITALIC="true" LOGICAL="Arial Bold Italic"
    PHYSICAL="Arial-BoldItalic.ttf;arialbi.ttf;arialz.ttf;ArialMTPro-
    BoldItalic.ttf"/>
  </FONTFAMILY>
  <FONTFAMILY PLATFORM="win" NAME="Arial"/>
  <FONTFAMILY PLATFORM="java" NAME="Arial, Helvetica, 'Courier New', 'Times
New Roman'"/>
  <FONTFAMILY PLATFORM="html" NAME="Arial, Helvetica, 'Courier New', 'Times
New Roman'"/>
</FONT>
</FONTALIASMANAGER>

```

次の操作を行う必要があります。

- 新しいフォルトごとに FONT エンティティを定義する。
- Web Intelligence アプリケーションの NAME 属性のフォント名を表示する。
- FONTATTRIBUTE エンティティごとに、フォントの論理名とフォントの PHYSICAL (ファイル名) を指定する。PHYSICAL 属性で一覧表示される置換フォントはセミコロンで区切られます。
- 各 FONT エンティティに 4 つの FONTFAMILY エンティティ、各 PLATFORM タイプに 1 つの エンティティを指定する。

プラットフォーム	名前	説明
ttf	フォントファミリの名前	PDF エクスポートに埋め込まれているサブセットの TrueType フォントに使用されます。
win	Windows OS で一覧表示されているフォント名	Excel などの Microsoft エクスポート形式で使用。
java	Java に表示されるフォント名。置換フォントはカンマで区切られます。	Java Web Intelligence アプレットまたはリッチクライアントインタフェースで使用。
html	HTML スタイルで指定されたフォント名。置換フォントはカンマで区切られます。	Web Intelligence HTML インタフェースで使用されます。

ttfPLATFORM エンティティには、可能な BOLD および ITALIC 論理値属性の組み合わせごとに 4 つの FONTATTRIBUTE エンティティを含んでいる必要があります。

BOLD	ITALIC	説明
false	false	標準書体
true	false	太字書体
false	true	斜体書体
true	true	太字斜体書体

① 注記

太字、斜体、または太字斜体には書体固有の TrueType フォントを使用することをお勧めします。標準以外の FONTATTRIBUTE エンティティは FONT エンティティで見つからない場合、Web Intelligence Processing Server で指定された標準書体のフォント書体が合成されます。合成されたフォントは標準以外の書体に明示的にデザインされたフォントより品質が悪くなります。

6.11 インストールの FIPS の確認

インストールの FIPS を確認するには、以下の手順を実行します。

1. コマンド `vi <Install_Dir>/sap_bobj/ccm.config` を実行します。
2. 値のキーには、デフォルトで `-fips` が表示されます。

インストールで、FIPS がデフォルトで有効になっていることを確認できます。

① 注記

FIPS は、新しいインストールでのみデフォルトです。

6.12 SPL_Warehouse.unx サンプルユニバースの実行

インストール時に [ウェアハウスデータベースおよびユニバースサンプル] を選択した場合は、以下の項目がご使用のマシンにインストールされます。

- SQL Anywhere データベースおよびドライバ
- サンプルデータセット
- データベースを起動するために使用される `launch_splwarehouse_database` スクリプト
- `SPL_Warehouse.conf` 設定ファイル

`SPL_Warehouse.db` はデータベースバックアップ本体で、サイズは約 7MB です。バックアップ、スクリプト、および設定ファイルが `<bip-install-dir>%Samples%splwarehouse` にコピーされます。

以下の項目が CMS リポジトリにインストールされます。

- `/Universes/Samples/` フォルダに `SPL_Warehouse.unx` サンプルユニバース
- `/Connections/` フォルダに接続 `SPL_Warehouse.cnx`

インストール後、エンドユーザがインフォメーションデザインツールでサンプルを使用することができるようにするために、データベースにサンプルデータベースをデプロイする必要があります。

6.12.1 サンプル接続について

サンプル接続は、SQL Anywhere データベースにデプロイされているサンプルデータベースを指します。接続パラメータは以下のとおりです。

- サーバ: SPL_Warehouse
- データベース名: SPL_Warehouse
- ユーザ名: SPL_Warehouse
- パスワード: SPL_Warehouse

データベースバックアップはデータベースと同じサーバにインストールする必要があるため、接続で設定されているデータベースサーバ名は localhost になります。この名前でない場合は、接続でサーバ名を変更する必要があります。

接続ポートおよびデータベース名が SPL_Warehouse.conf ファイルで変更されている場合は、これらも変更する必要があります。

6.12.2 サンプルデータセットを開始する

SQL Anywhere データベースでサンプルデータセットを開始するためのスクリプトを起動します。

サンプルは、インストール時に選択しています。

1. オプションで、SPL_Warehouse.conf ファイルを編集用に関き、データベース名の競合を防ぐために以下の行でデータベース名を変更します。

```
-n SPL_Warehouse
```

→ 注意

デフォルトのデータベース名は SPL_Warehouse です。この名前が変更されている場合は、サンプルとともに CMS リポジトリにインストールされている SPL_Warehouse 接続で、この名前も更新する必要があります。

2. オプションで、別のポートでデータベースを起動するように以下の行を変更します。

```
-x "tcPIP(PORT=6016)"
```

3. launch_splwarehouse_database スクリプトを実行してデータベースを起動します。

6.13 クライアントツールへの変更

6.13.1 サイレント変更

応答ファイルを使用してクライアントツールインストールをサイレント変更するには、以下の手順に従います。

1. [インストールディレクトリ](#)に移動します。
2. コマンドプロンプトを開いて応答ファイルを生成します。
3. パラメータを書き込んで応答ファイルを生成し、サイレント変更操作を実行するには、`./setup.sh -w <response file path> -i <product key name>` パラメータを指定して `setup.exe` ファイルを実行します。

```
./setup.sh -w response.ini -i boeserver
```

または

```
./modifyOrRemoveProducts.sh -w <response file path> -i <product key name>
```

例: `./modifyOrRemoveProducts.sh -w response.ini -i boeserver`

[製品キー名一覧 \[108 ページ\]](#) の製品キー名にアクセスします。

4. [\[メンテナンス\]](#) ダイアログボックスが開き、3つのオプション([\[変更\]](#)、[\[修復\]](#)、および [\[削除\]](#))が表示されます。
5. メンテナンス操作として [\[変更\]](#) ボタンを選択して、ウィザードを完了します。
6. [\[次へ\]](#) をクリックします。
7. ウィザードでインストールプログラムが完了すると、応答ファイルが生成されます。
8. 生成された応答ファイルで CMS パスワードを更新します。
9. [\[終了\]](#) をクリックして応答ファイルを生成し、変更アクションを完了します。

6.13.2 サイレント修復

応答ファイルを使用してクライアントツールインストールをサイレント修復するには、以下の手順に従います。

1. [インストールディレクトリ](#)に移動します。
2. コマンドプロンプトを開いて応答ファイルを生成します。
3. パラメータを書き込んで応答ファイルを生成し、サイレント修復操作を実行するには、`./setup.sh -w <response file path> -i <product key name>` パラメータを指定して `setup.exe` ファイルを実行します。

```
./setup.sh -w response.ini -i boeserver
```

または

```
./modifyOrRemoveProducts.sh -w <response file path> -i <product key name>
```

例: `./modifyOrRemoveProducts.sh -w response.ini -i boeserver`

4. パラメータを読み込んでサイレント修復操作を実行するには、`./setup.sh -r <response file path> -i <product key name>` パラメータを指定して `setup.exe` ファイルを実行します。

```
./setup.sh -r response.ini -i boeserver
```

または

```
./modifyOrRemoveProducts.sh -r <response file path> -i <product key name>
```

例: `./modifyOrRemoveProducts.sh -r response.ini -i boeserver`

[製品キー名一覧 \[108 ページ\]](#) の製品キー名にアクセスします。

5. [\[メンテナンス\]](#) ダイアログボックスが開き、3つのオプション([\[変更\]](#)、[\[修復\]](#)、および [\[削除\]](#))が表示されます。
6. メンテナンス操作として [\[修復\]](#) ボタンを選択して、ウィザードを完了します。
7. ウィザードでインストールが完了すると、応答ファイルが生成されます。
8. [\[次へ\]](#) をクリックします。
9. 生成された応答ファイルで CMS パスワードを更新します。
10. [\[終了\]](#) をクリックして応答ファイルを生成し、修復アクションを完了します。

6.13.3 サイレント削除 (アンインストール)

システムに更新がインストールされる場合に、応答ファイルを以下の2つの方法で使用して最新のパッチをサイレントに削除 (アンインストール) できます。

- 更新製品のアンインストール
- 基本製品のアンインストール

① 注記

インストールされているパッチを削除するには、製品キー名に接尾語 `patch` (必須) を付ける必要があります。この操作により、システムにインストールされている最新のパッチが常に削除されます。たとえば、`<product key name>+patch` (boeserverpatch) のようにします。

• 更新製品のアンインストール

応答ファイルを使用して製品で行われた更新をサイレント削除 (アンインストール) するには、以下の手順に従います。

1. [インストールディレクトリ](#)に移動します。
2. コマンドプロンプトを開いて応答ファイルを生成します。
3. パラメータを書き込んでサイレント削除 (アンインストール) 操作を実行するには、次のパラメータを指定して `setup.exe` ファイルを実行します。`./setup.sh -w <response file path> -i <product key name>+patch`。
例: `./setup.sh -w <response file path> -i boeserverpatch`
または
`./modifyOrRemoveProducts.sh -w <response file path> -i <product key name>`
例: `./modifyOrRemoveProducts.sh -w response.ini -i boeserver`
[製品キー名一覧 \[108 ページ\]](#) の製品キー名にアクセスします。
4. [\[メンテナンス\]](#) ダイアログボックスが開き、3つのオプション([\[変更\]](#)、[\[修復\]](#)、および [\[削除\]](#))が表示されます。
5. メンテナンス操作として [\[削除\]](#) ボタンを選択して、ウィザードを完了します。
6. [\[次へ\]](#) をクリックします。

7. ウィザードでインストールプログラムが完了してウィザードが終了すると、応答ファイルが生成されます。
8. 生成された応答ファイルで CMS パスワードを更新します。
9. パラメータを読み込んでサイレント削除 (アンインストール) 操作を実行するには、次のパラメータを指定して setup.exe ファイルを実行します。./setup.sh -r < generated response file path> -i <product key name>+patch。
例: ./setup.sh -r <response file path> -i boeserverpatch
または
./modifyOrRemoveProducts.sh -r <response file path> -i <product key name>
例: ./modifyOrRemoveProducts.sh -r response.ini -i boeserver
10. [終了] をクリックして応答ファイルを生成し、削除アクションを完了します。

- **基本製品のアンインストール**

応答ファイルを使用して基本製品をサイレント削除 (アンインストール) するには、以下の手順に従います。

1. [インストールディレクトリ](#)に移動します。
2. コマンドプロンプトを開いて応答ファイルを生成します。
3. パラメータを書き込んでサイレント削除 (アンインストール) 操作を実行するには、次のパラメータを指定して setup.exe ファイルを実行します。./setup.sh -w <response file path> -i <product key name>。
例: ./setup.sh -w <response file path> -i boeserver
または
./modifyOrRemoveProducts.sh -w < generated response file path> -i <product key name>
例: ./modifyOrRemoveProducts.sh -w < generated response file path> -i boeserver
4. パラメータを読み込んでサイレント削除 (アンインストール) 操作を実行するには、次のパラメータを指定して setup.exe ファイルを実行します。./setup.sh -r <response file path> -i <product key name>。
例: ./setup.sh -r <response file path> -i boeserver
または
./modifyOrRemoveProducts.sh -r < generated response file path> -i <product key name>
例: ./modifyOrRemoveProducts.sh -r < generated response file path> -i boeserver
ここをクリックして [製品キー名一覧 \[108 ページ\]](#) を表示します。
5. [\[メンテナンス\]](#) ダイアログボックスが開き、3つのオプション ([変更]、[修復]、および [削除]) が表示されます。
6. メンテナンス操作として [\[削除\]](#) ボタンを選択して、ウィザードを完了します。
7. [\[次へ\]](#) をクリックします。
8. システムで対応する応答ファイルが作成されます。
9. パラメータを読み込んでサイレント削除 (アンインストール) 操作を実行するには、次のパラメータを指定して setup.exe ファイルを実行します。./setup.sh -r < generated response file path> -i <product key name>。
例: ./setup.sh -r < generated response file path> -i boeserver
または
./modifyOrRemoveProducts.sh -r < generated response file path> -i <product key name>
例: ./modifyOrRemoveProducts.sh -r < generated response file path> -i boeserver
10. [\[終了\]](#) をクリックして応答ファイルを生成し、削除アクションを完了します。

6.13.4 製品キー名一覧

製品キー名には、接尾語 patch (必須) を付ける必要があります (たとえば、<product key name>+patch - bipclientpatch)、これにより、システムにインストールされている最新のパッチが常にアンインストールされます。



以下の変更/修復/削除 (アンインストール) の場合の製品キー名一覧を参照してください。

番号	製品名	製品キー名 (変更/修復/削除)	マシンにパッチがインストールされている場合の製品キー名 (削除)
1	SAP BusinessObjects BI プラットフォームクライアントツール	bipclient	bipclientpatch
2	SAP Crystal Reports 2020	crystalreports	crystalreportspatch
3	SAP Crystal Reports for Enterprise	crenterprise	crenterprisepatch
4	SAP Crystal Server クライアントツール 2020	crystalserverclient	crystalserverclientpatch
5	SAP Integration for Microsoft SharePoint	ioms	iomspatch
6	SAP BusinessObjects Live Office	liveoffice	liveofficepatch
7	SAP User Management Client 10.3	umc	umcpatch
8	SAP BusinessObjects BI プラットフォーム	bipserver	bipserverpatch
9	SAP Crystal Server 2020	crystalserver	crystalserverpatch
10	情報プラットフォームサービス	ips	ipspatch
11	SAP Crystal Reports Server 2020	crystalreportsserver	<パッチなし>
12	SAP Crystal Reports Viewer 2020	crystalreportsviewer	<パッチなし>
13	BusinessObjects Runtime 64	bipruntime64	<パッチなし>
14	BusinessObjects Runtime	bipruntime32	<パッチなし>
15	Lumira Discovery	lumiradiscovery	<パッチなし>
16	Lumira アドオン	lumiraserver	lumiraserverpatch
17	Analysis Office アドオン	analysisoffice	<パッチなし>

重要免責事項および法的情報

ハイパーリンク

リンクの一部は、アイコンやマウスオーバーテキストで分類されています。これらのリンクから、追加の情報を得ることができます。アイコンについて。

-  このアイコンが付いたリンク: SAP がホストしているものではない Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り) 以下のことに同意することになります。
 - リンク先のサイトのコンテンツが SAP のドキュメンテーションではないこと。お客様は、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできません。
 - SAP が、リンク先のサイトのコンテンツについて同意することも反対することもなく、また SAP がその利用可能性や正確性について保証しないこと。SAP は、かかるコンテンツの使用により発生した損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、その損害に対して一切責任を負いません。
-  このアイコンが付いたリンク: 当該の特定の SAP 製品又はサービスのドキュメンテーションから離れ、SAP がホストしている Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り)、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできないことに同意します。

外部プラットフォームでホストされているビデオ

一部のビデオは、サードパーティのビデオホスティングプラットフォームに置かれている場合があります。SAP では、これらのプラットフォームに保存されているビデオが将来にわたって利用できると保証することはできません。また、これらのプラットフォームにホストされている、いかなる広告またはその他のコンテンツ (関連ビデオまたは同じサイトでホストされている別のビデオに移動する場合など) については、SAP の管理外であり責任を負いません。

ベータおよびその他の試験的機能

試験的機能は、SAP が将来のリリースを保証する正式に提供される機能の範囲外です。これは、試験的機能は、SAP により通知なく理由の如何を問わず随時変更される場合があることを意味します。試験的機能は、本稼働使用のためのものではありません。お客様は、試験的機能を実際の運用環境で、又は十分なバックアップがとられていないデータとともに、デモンストレーション、テスト、試験、評価その他の方法で使用してはなりません。

試験的機能の目的は、早期にフィードバックを得ることで、それに応じて顧客の皆様やパートナーが将来の製品に影響を与えることを可能にすることです。SAP コミュニティなどにおいてフィードバックを提供することで、お客様は、投稿物や二次的著作物の知的財産権が SAP の独占的所有物であり続けることを承認することになります。

コード例

ソフトウェアのコーディングやコードスニペットはすべて、例です。それらは、本稼働使用のためのものではありません。コード例は、構文や表現規則を分かりやすく説明し視覚化することのみを目的としています。SAP は、コード例の正確性や完全性について保証しません。SAP は、コード例の使用により発生した過誤や損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、損害に対して一切責任を負いません。

偏見のない表現

SAP は、ダイバーシティ & インクルージョンの文化を支持しています。SAP の文書では、可能な限り、文化、民族性、ジェンダー、および障がいの有無を問わず、すべての人々に対する偏見を伴わない表現を採用します。

© 2024 SAP SE or an SAP affiliate company. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、SAP SE 又は SAP の関連会社の明示的な許可なくして、いかなる形式でも、いかなる目的にも複製又は伝送することはできません。本書に記載された情報は、予告なしに変更されることがあります。

SAP SE 及びその頒布業者によって販売される一部のソフトウェア製品には、他のソフトウェアベンダーの専有ソフトウェアコンポーネントが含まれています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。

これらの文書は、いかなる種類の表明又は保証もなしで、情報提供のみを目的として、SAP SE 又はその関連会社によって提供され、SAP 又はその関連会社は、これら文書に関する誤記脱漏等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP 又はその関連会社の製品及びサービスに対する唯一の保証は、当該製品及びサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

本書に記載される SAP 及びその他の SAP の製品やサービス、並びにそれらの個々のロゴは、ドイツ及びその他の国における SAP SE（又は SAP の関連会社）の商標若しくは登録商標です。本書に記載されたその他のすべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。

商標に関する詳細の情報や通知については、<https://www.sap.com/japan/about/legal/trademark.html> をご覧ください。